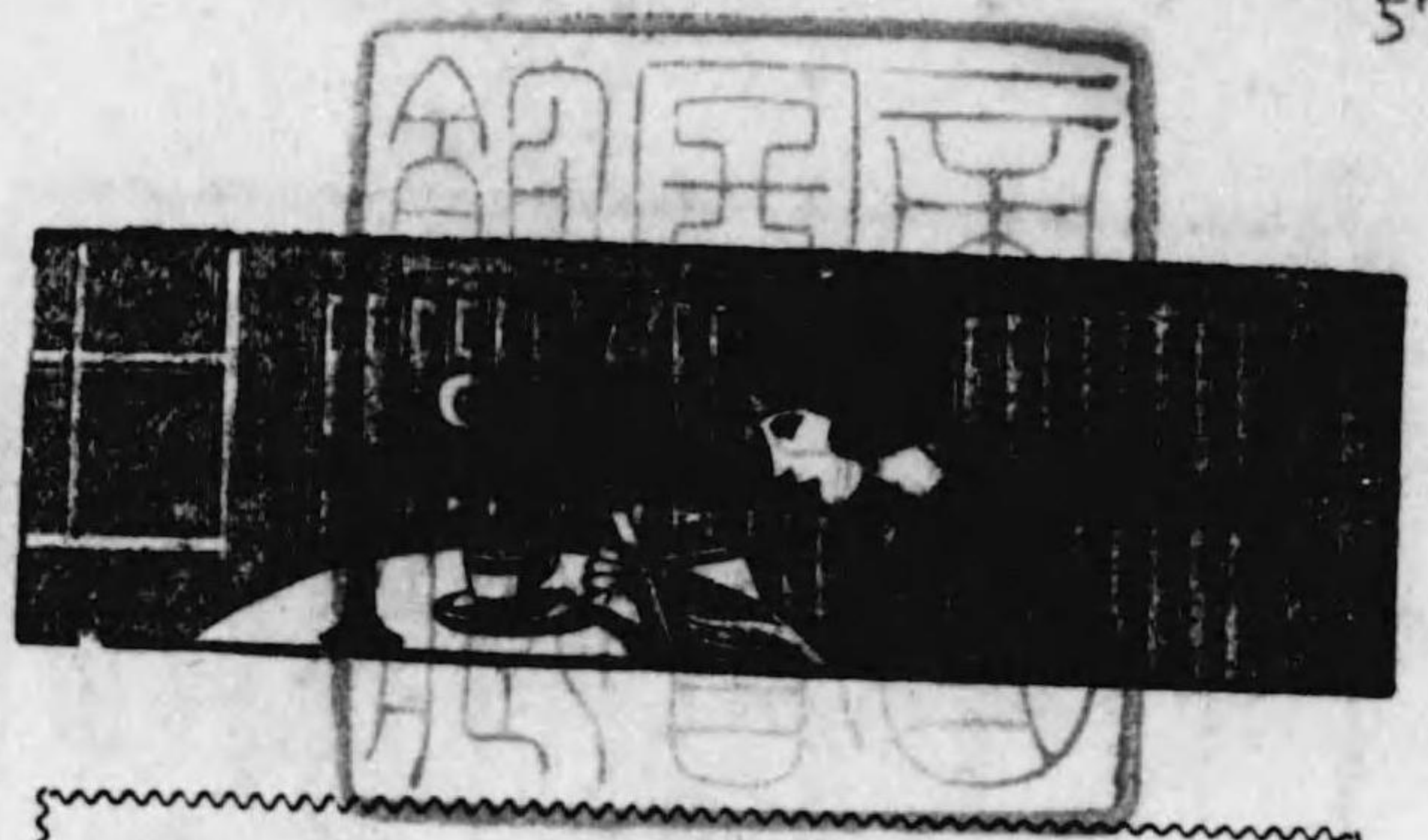


始



特230  
571

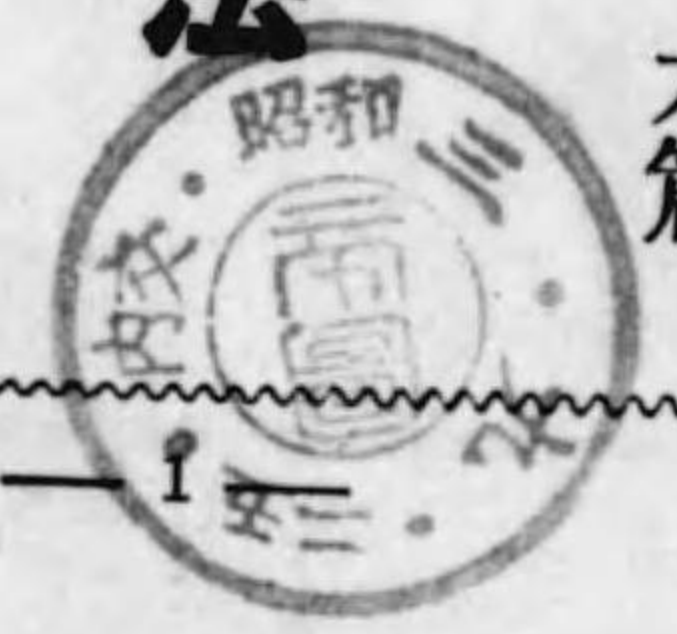


主婦之友實用百科叢書

第三十六篇

衣類洗濯法と保存法

發行所  
東京市  
駿河臺  
主婦之友社



衣類の整理や洗濯は、上等のものであればあるほど、専門家の手を煩はすのが常でありました。そして、また、この整理の上手下手は、保存の上にも著しい関係をもつてゐるのであります。この書は、専門家がなすと同じ効果ある整理法を、家庭に於て、大した道具も用ひずに試みられる方法を詳説したものであります。自分の手でできるとなれば、二度の整理が三度にもなり、従つて保存をも長くすることになります。

本書の編輯には、『主婦之友』記者山賀多喜子氏が専らこれに當りました。

『主婦之友實用百科叢書』の編輯發行に就て

◇私どもが生きてゆくためには多くの知識を必要とします。その知識を得るためには、どうしても書籍に就かねばなりません。ところが、これまでの書籍は一つの必要な知識を得るために、多くの不必要なこともまで讀まねばなりません。それは忙しい生活の今日、多くの人には許されぬことであります。

◇生活上必要な知識を、確實に、そして手取り早く得る方法として、『主婦之友實用百科叢書』の編輯發行を企てました。この叢書は、婦人や家庭の生活に、缺くことのできる實際的知識を、雑誌『主婦之友』の編輯と同じやうに、確實、親切、簡單を旨として、提供することにとめました。

◇従來の書籍に、も一つの缺點がありとすれば、それは定價の高といふことであります。この叢書は、それらの方面にも幾分の改善を施し、一冊六拾錢でわかつことにいたしました。この叢書の一冊でも御覧になつた方で、もし私共と御同感の方がございましたら、この叢書を一冊でも多く御覧のうへ、この叢書の目的の達成に御盡力のほどをお願ひ申します。

昭和三年八月四日

主婦之友社編輯局にて  
石川 武美

衣類洗濯法と保存法 目次

□	(1)	新式の鍔臺と洗濯場
□	(2)	重寶な洗濯機と張り物臺

衣服洗濯法の部

一、洗張りを上手にする秘訣……………七

(1) 地質を損めぬ布地の洗ひ方……………八

(2) 光澤を増す張り物の仕方……………一六

(イ) 伸子張りの上手な仕方……………一七

二、白地物の洗濯及び漂白の仕方……………二五

(1) 綿布並びに麻類の上手な洗ひ方……………二五

(2) 白地絹物の上手な洗ひ方……………三三

三、家庭で出来る夏洋服の洗濯と仕上げ法……………三六

(1) 夏洋服の布地と汚斑脱き法……………三六

(2) 麻並びに小倉地洋服の洗ひ方……………三七

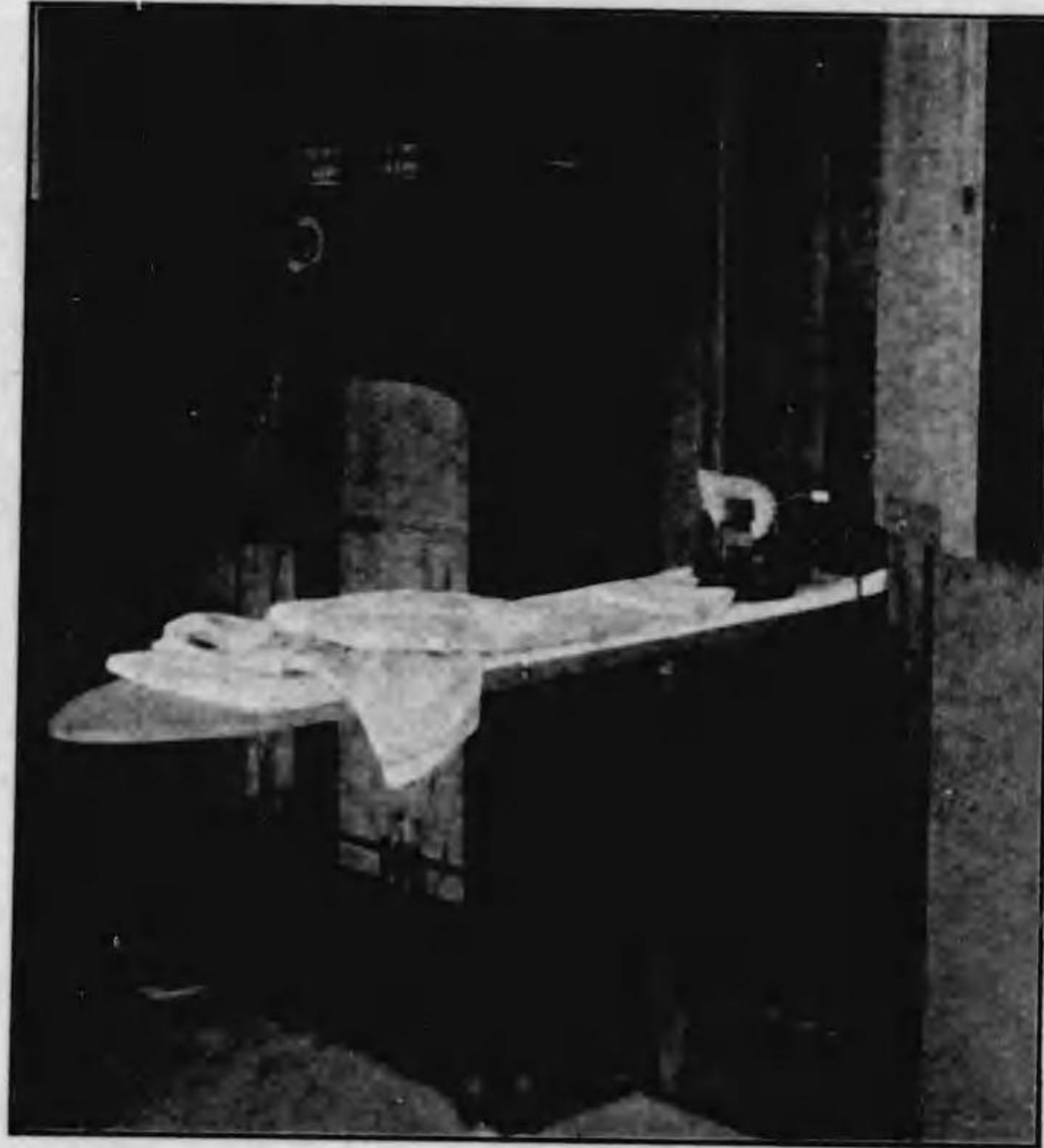
(ハ)(ロ) 板張りの上手な仕方……………二〇

手輕にてきるアイロンかけの仕方……………二三

(3) 白地毛織物の上手な洗ひ方……………二五



新式の鏡臺と洗濯場



上圖は、壁に仕掛けた鏡臺で、臺の丸みは、洋服のために、特に工夫したもので、臺の組立てと共に、大變参考になるものです。下圖は、立働きの便利な、洗濯臺と仕上げ臺ですが、このやうに人造石の水槽でなくとも、是非湯殿か洗面所の一隅に、便利な臺の設備が望ましく思ひます。



二、洋服の保存法と手入れの仕方

- (1) 洋服を保ちよく着るに必要な日常心得……………二〇三
- 脱いだら直ぐにブラッシを……………二〇三
- 二週に一回は必ずアイロンを……………二〇三

三、見事に出来る和洋服類の繕ひ方

- (1) 和服類の手際よい修理法……………二〇八
- 和服類の繕ひ方……………二〇八
- 布地による接線の選び方……………二〇八
- 接線の糊の引き方……………二〇九
- 布地の扱ひと縫ひ方……………二〇九
- 色紙當の仕方……………二〇九
- 糊の作り方……………二一〇

和洋服の藏ひ方……………二〇一

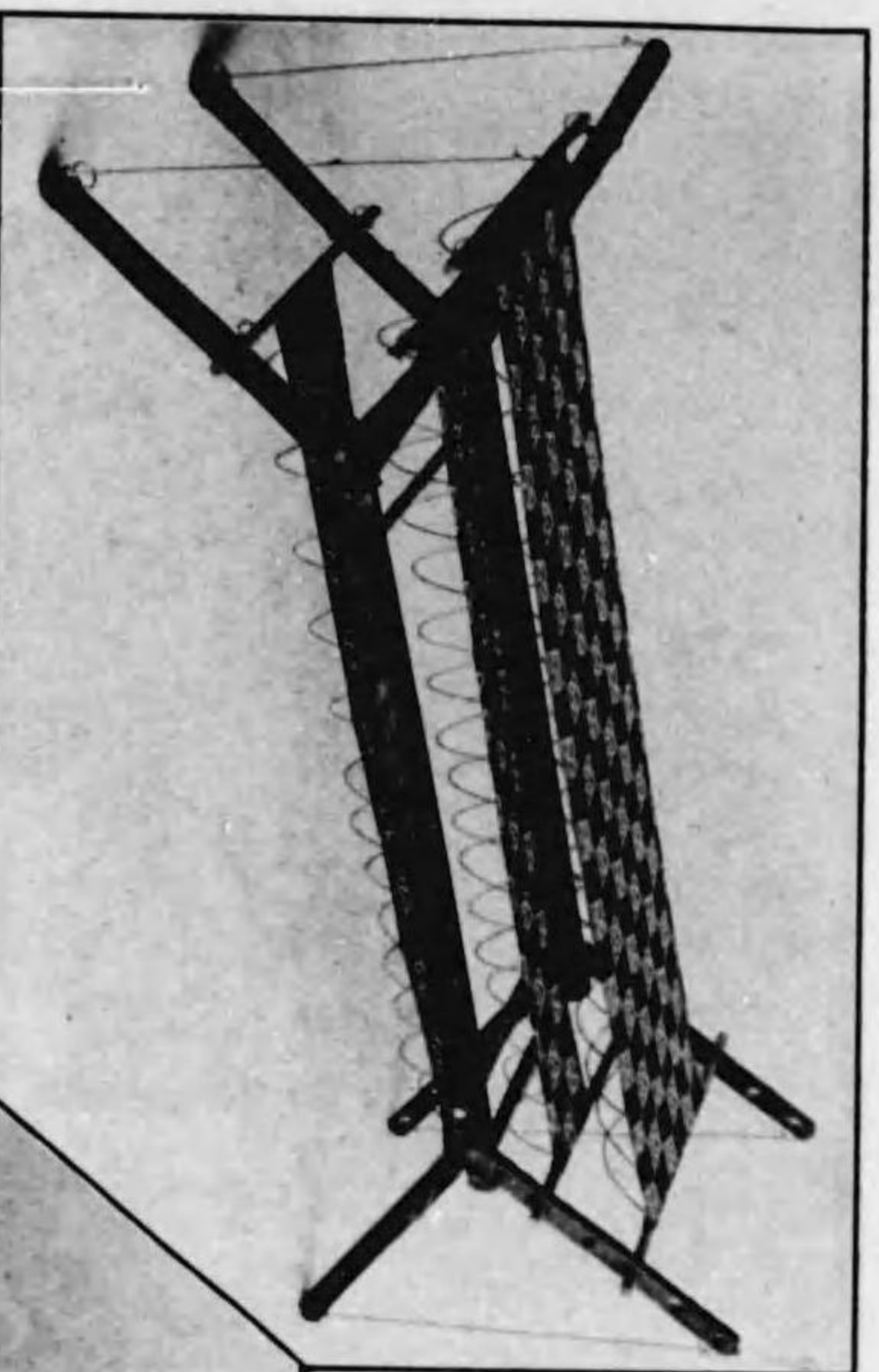
- 衣更への度に乾燥洗濯……………二〇五
- 濡れた服は殊に手入れを……………二〇七

(2) 素人に出来る洋服の修繕法……………二〇七

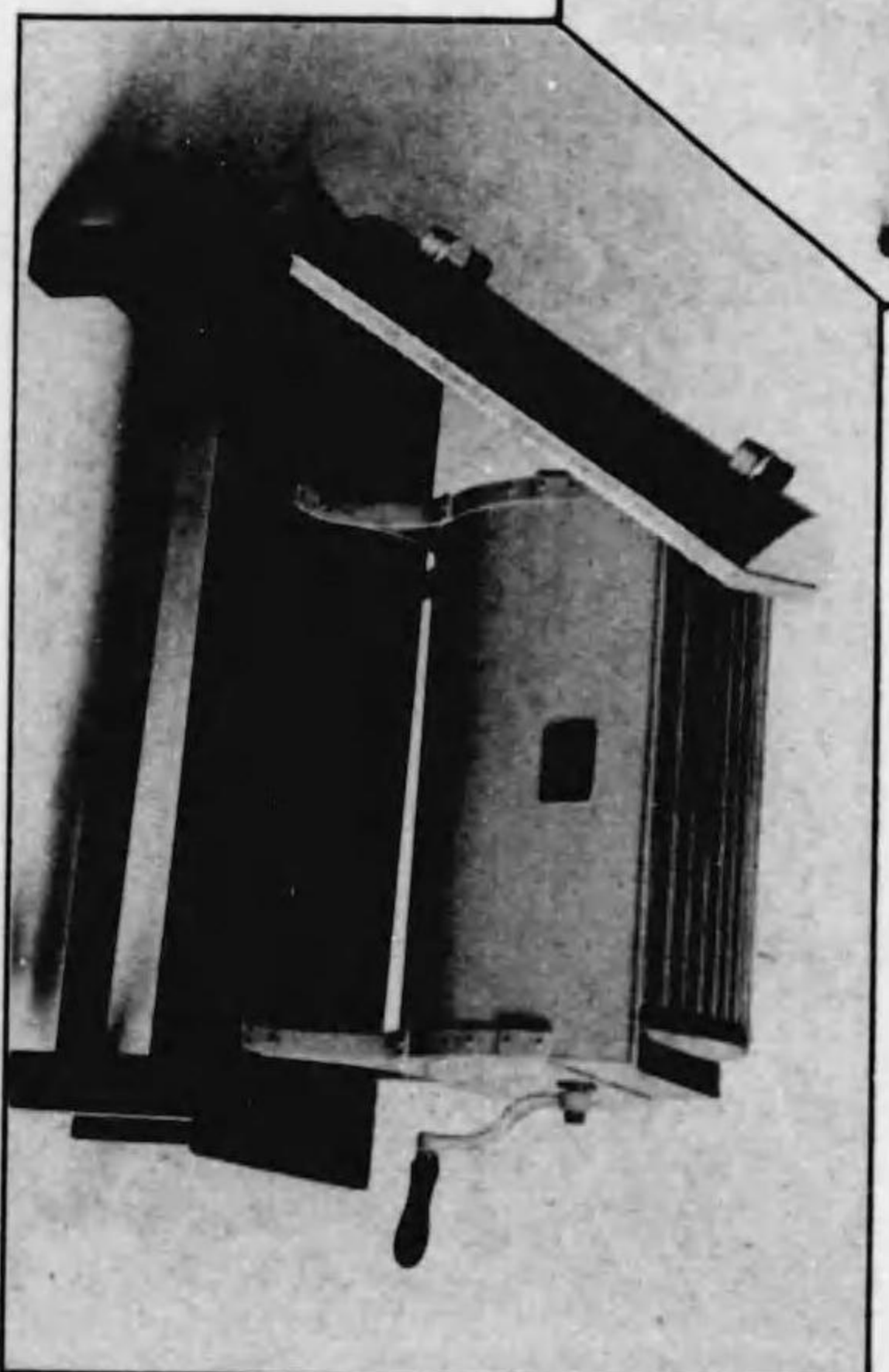
- 洋服類の繕ひ方……………二〇
- 孔、鈎裂の繕ひ方……………二〇
- 袖裏、前裏の繕ひ方……………二〇三
- 衿山、肘の繕ひ方……………二〇四
- 袖口、裾口の繕ひ方……………二〇四
- ズボン膝、臀部の繕ひ方……………二〇五

——(目次をばり)——

臺物り張と機濯洗な實重



狭い場所や縁側などで、自由に用ひられても、便利な、文化張り物臺を御紹介いたします。上圖は、張り臺を組立てたところですが、不要の場合には、折り盛むこともでき、一時に一反以上の布が張れますので便利です。定価はすべて、巻末を御覧くださいませ。



下圖は「るくねす式」洗濯機です。まつ中の圓い木枠をあげ、洗濯物を入れて洗濯液を注ぎ込み、木枠を止めて蓋を被せ、ハンドルを廻しますと、少しも布地を損わずに、洗濯が容易にでき、その上、濯ぎ上げも水切りもできて便利です。

# 衣類洗濯法と保存法

主婦之友社編輯局

## 衣服洗濯法の部

### 一、洗張りを上手にする秘訣

寒さが漸く薄らぎ、陽氣が少しでもよくなりますと、今まで着なれた着物の汚れ目が、急に目立つやうになります。次いで、あのいやな梅雨がじめく降り出しますと、押入や、部屋の間においたものに、見るも穢しいほど、垢が浮いてきますが、これをそのまま、抛っておきますと、濕氣のために黴が生え、後ではどうしても除れなくなります。それで張り物の方は、梅雨後の天候の定まるときまで延しても、汚れ物の洗濯だけは、是非梅雨前までに、全部すましておかねばなりません。

一體衣類の汚れは、少いうちならば、洗濯も容易にでき、垢もすぐに落ちますが、三年、四年と経つた、汚れのひどいものは、洗濯も困難ですし、つひには布地までが損みすから、着汚した衣類は、必ず、年毎に手入れをせねばなりません。これは着物の保ちをよくする、最も大切な心得であります。それで上等の外着は、専門家に依頼するとしても、せめて銘仙くらゐまでは、自分の手で始末をしたいものと思ひます。これから失敗なく、しかも上手にできる、本式の洗張りの仕方を、詳しく申述べることにいたします。

### (1) 地質を損めぬ布地の洗ひ方

**丸洗ひはせぬこと** よく洗張りをする場合、着物を裏表とは別々に離しても、そのまゝ丸洗ひにして、その後で一つく布をほぐし、板張りをするとか、または端縫ひをして、伸子張りをするやうですが、あれでは大切な汚れ目が落ちぬばかりでなく、縫糸の跡形が布につき、その上、近來よく使はれる絹小町の場合には、色が落ち易いために、醜い跡が残るものです。これは少しくらゐなら、汚斑脱きでどうにか直せませんが、全體となると、さう容易に脱けるものではありません。よく袖口の擦り切れたときなど、天地にして縫ひ返したいと思つても、この跡跡が出るために、ついできかねることがありますから、決して丸洗ひにしてはならないのです。しかし、布をばらばらにほぐしては、洗ひ難い上に、乾すとき風に吹き飛ばされますか

ら、それ／＼白糸で縫ひ合せ、一反の布にしておきますが、もし一反では長すぎると思はれましたら、まづ兩袖を一枚に接ぎ合せ、次に身頃は袷肩明を丁寧縫ひ合せ、兩身を別々にしておき、袷、衽を一枚に接ぎ合せますと、都合四枚の布に纏りますから、洗ひよくなります。但し普通は、布を一反に纏めてしまふので、これを端縫ひするといひます。なほ本式の端縫ひの順序は、布を着物に裁つ場合とは反對に、衽、共衽、兩衽といふやうに取り合せ、白糸で縫ひ合せればよいのですが、次に表になる方を外側にして、布と布とを取り合せ、接ぎ合せねばいけません。つまり、次に表になる方に、縫目が出るわけでありませぬ。

なほ少し面倒かも知れませんが、この接ぎ合せを、「重接ぎ」にしますと、端縫代が折り曲らぬため、後で一折代を起す手間が省けてよいのです。そこで全部端縫ひがすみましたら、伸子張りの場合に限り、丈の兩端に、三四寸の丈夫な布を縫ひつけます。これは、後で張り手を食はすためですから、もし張り手が棒のときは、この別布を輪にして縫ひつけます。なほ、裏の方は、大抵胴裏と裾廻布とが、違つた地質の布になつてゐますから、洗濯の都合上、別々に端縫ひをしなければなりません。

**局部の垢はベンジンで** 前のやうに布の端縫ひができましたら、洗濯にかゝりますが、その前に、ひどい汚れや垢を、ベンジンで洗ひ落しておきます。まづ袷山や袖口または膝頭など、特に垢のつき易い、汚れの多い部分は、ベンジンを小さな金盃などに取り分け、その中に浸して、撮み洗ひいたします。殊に袷山は脂垢



が澤山ついてゐますから、最初にオリーブ油または髪油を齒磨楊枝につけて、垢の上に引き、(かうすると垢が油のために浮き出ます)その上でベンジンの撮み洗ひをしますと、白粉や脂垢が容易に除れますから、是非お試しください。もし以上の方法では、ベンジンが多量に要ると思はれましたら、乾いた日本手拭を二枚重ねて敷き、その上に衣類の汚れた部分を擽げ、羅紗刷毛のやうなもので、丁寧に擦つて塵埃を拂ひ、次に齒磨楊枝にベンジンを含ませて、汚れた箇所を濡し、その上を天鷲絨または真綿で軽く擦ります。すると大抵の垢は落ちてしまひますが、この場合には、ベンジンを多目に用ふこと、手拭または晒木綿を布の下に當てること、何より大切であります。

また一體に汚れの多い箇所には、絲標をつけておけば、本洗ひのとき目標になり、完全に垢を落すことができますが、これを以上のやうな下準備をせずに、いきなり本洗ひにかゝると、ひどい汚れを落すために、つい無理な洗ひ方をしたり、長く洗液に浸しておきますから、布地が損んだり、褪色したりするので、それで、前もつてひどい汚れを除いておき、本洗ひでは手早く洗ふことが何より必要な理由であります。

**石鹼洗ひは量がつく** 以上のやうに、布地の下準備ができましたら、これから本洗ひにかゝるのですが、その前に、少し洗濯劑のことに就てお話しいたしませう。

これまで、一般の洗濯劑としては、石鹼が一番多く用はれてゐますが、石鹼は脂の強いものですから、白

地のものには適しても、色物には不向であります。よく、粉石鹼や、マルセル石鹼をお用ひになるやうですが、落ちることはよく落ちて、石鹼を用つたものは、その石鹼を濯き落すことがなかく困難で、充分濯いだと思つても、何となく後がべとくして、きしつくやうな氣持がするのです。もし少しでも石鹼が残つてゐるときは、その布の色艶を消すばかりでなく、糊をつけても上滑りがしますから、糊が充分に浸みません。そのために布の小皺が伸びぬ上に、かうして一旦乾し上げたものは、最早幾度洗つても、その石鹼分は除れぬやうになるのです。その上石鹼を用つたものは、入梅の節どうしても微が多くなりますから、色物の洗濯には、なるべく石鹼を使用しない方がよいのであります。それには専門家が永い間の經驗から、口を揃へて推奨してをられる、洗濯曹達または灰汁を用ひたいと思ひます。

よく學校などでは、曹達は絹物に絶対禁物として教へられてをりますが、しかし、永い間の實驗により、決して曹達が、絹物に何の害もないことが判つてをりますから、(但し、毛織物には絶対に用つてはいけません。それでメリンス等の洗濯法は、特に四八頁毛織物の部を、詳しく御覽くださいませ)紅絹裏でも色絹の裾廻しでも、甲斐絹でも、銘仙類は勿論のこと、友禪羽二重なども、この曹達液を用つて洗ふと、よいのです。しかし、白地物には石鹼を用つても、差支ありません。

次に、曹達液と、灰汁の仕立方がありますが、よく、木綿類の洗濯に、曹達を用ふとしても、地質を損め

るなどの心配から、ほんのお禁厭ほどしか入れませんが、あれでは、本當の洗濯はできません。まづ一升くらゐの微温湯に、細い曹達を一撮みほど入れ、この曹達の溶けた液を、指尖につけてみて、ほんの少しばかりぬめぬめする程度の濃さにします。餘り多く入れすぎて、指尖につけたとき、ぬらぬらするやうですと、絹などには少し強すぎます。この洗濯液を多目に用意しておくのです。次に灰汁の本式な作りですが、これは少し面倒でも蒸を燃して作るのではありません。蒸(米俵でも何でもよいのです。)を燃すと、御承知のやうに眞赤に燃え、やがて眞黒な塊となり、つひに白い灰になります。この白い灰にならぬ眞黒い中に、櫛に詰めて、上から踏みつけて水を入れ、櫛の下に吸口をつけて、灰の中を通つた水、即ち灰汁を取るのです。(なほ灰汁はしばらく静かにしておき、その上澄を用ひるのです。)これを前の曹達液のやうに、微温湯で薄めて、ほんの指尖がぬめぬめする程度にして用ひます。灰汁は炭酸加里を多量に含んでをりますから、曹達と同じくアルカリ性に富み、垢や汚れを除く働きがあります。

**手で揉まぬこと、水は搾らぬこと**

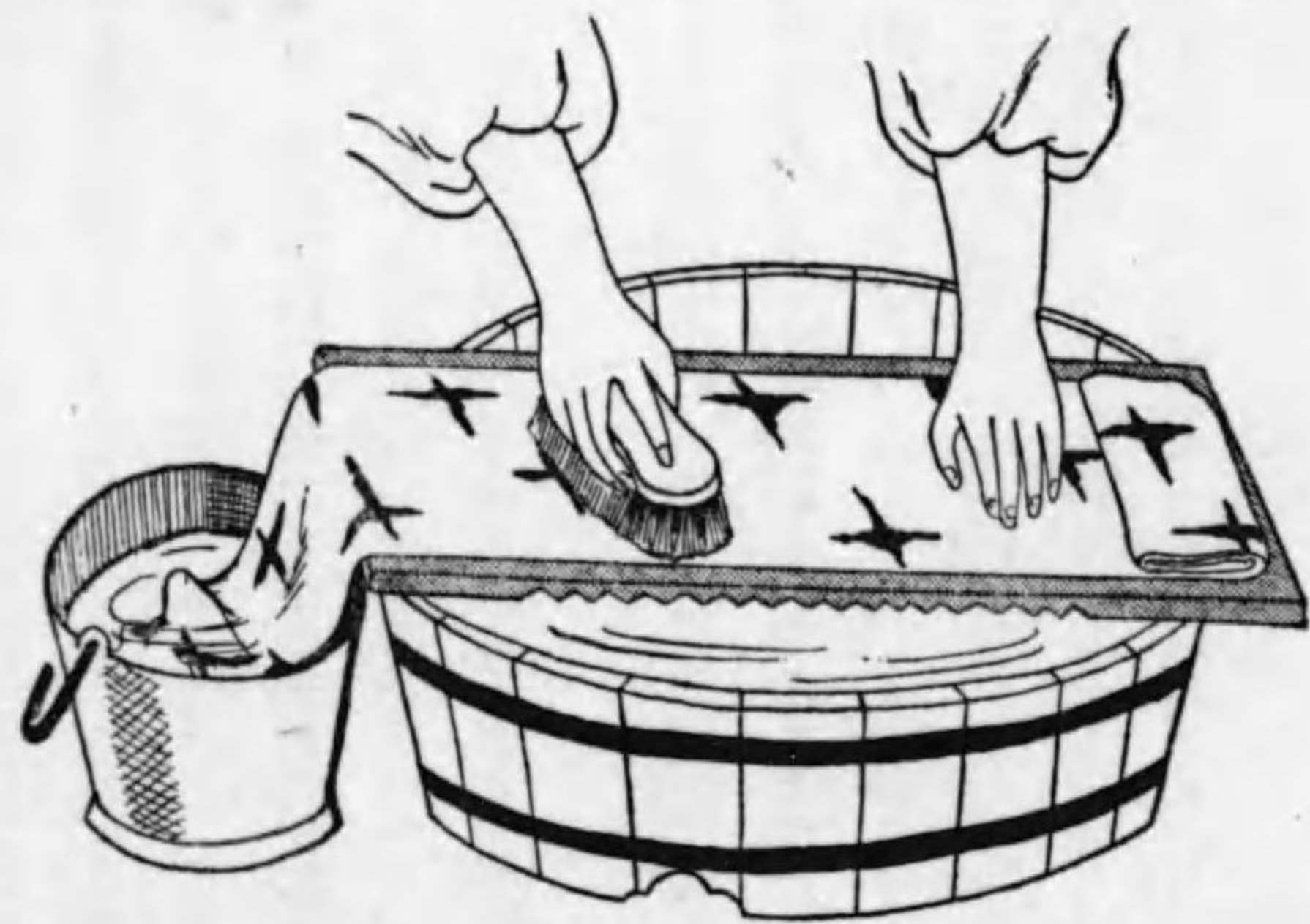
次に洗ひ方を申し上げます。よく石鹼を澤山つけて、洗濯板の上でござしお洗ひになる方を見受けますが、これは、下着類の丸洗ひとか、敷布を洗ふ場合には、差支ありませんけれども、有色の絹類には絶対に避けねばなりません。一體に皺といふものは、乾いてゐるときに出来たものならば、濡れると直りますが、水の中で出来た皺は決して直らないのであります。それで洗濯板の上で揉

むときに出来た皺は、たとひ糊がついて皺が全部なくなつたやうに見えても、それは決してなくなつたのではなく、一寸雨に遇ふとか、夜露にあたるとかしますと、すぐにその皺が戻つてくるのです。また一寸見れば判らぬ皺でも、これを透かして見ますと、はつきり判るものでありますから、決して手で揉み洗ひにせず、どんなものでも皆な刷毛を使つて洗はねばなりません。しかし刷毛で擦つては、さぞ布地が損むだらうとお考へになるかも知れませんが、軟いものには軟い刷毛を、硬いものには硬いのを使ひますから、決して心配はないのです。木綿などは、龜の子だは、しでも使つて洗はれた方が、手で揉んで洗ふより、遙にためによいのであります。

そこで、前に用意しておいた、曹達または灰汁の液を、たつぷり洗濯皿に入れ、(少しばかりの洗濯液では、決して汚れが斑なく綺麗に落ちません。)この中に前の布地を繰り込み、すぐ洗ひ始めるのであります。よく三十分か一時間、時によると一晩も洗濯液に浸けておいて洗ふ方がありますが、そんなに長く浸けておくと色が他へうつたり、または褪色する虞がありますし、大へん布地も損みますから、液に浸けると同時に洗ひ始めなければなりません。洗ひ方は、皿の上に洗濯板の、鋸目のない方を上に向けて平に渡し、板の上に洗濯物を引上げ、右手に洗濯刷毛を持ち、皿の中にある洗濯液を刷毛につけながら、左から右へと、布の上を軽く擦り、皿の左側には、水を入れたバケツをおき、刷毛で洗つた布を繰り込みますと、色のうつる心配

がありません。なほ衿や袖口のやうな殊に汚れのひどい部分分は、曹達液の比較的濃いものをつけて、特に洗ふとよいのです。かうして初めに、元の表側の方を一通り洗ひ、後に裏に返して、もう一度洗ふとよいのですが、すべて手早く洗はなければいけません。長くいちづつてゐますと、品物によつては變質したり褪色しますから、手早く洗ふことが秘訣の一つであります。こゝで始めて前にひどい垢や汚れを、ベンジンで除いておいたことが役立つのであります。汚れが除れましたら、度々水を取り替へ、振るやうにして濯ぎ、すつかり綺麗に洗ひ上げます。

さて充分に濯ぎができましたら、醋酸水(水一斗につき、醋酸を盃一杯くらゐ、即ち、嘗めて少し酸い程度にします。)に浸し、また充分水濯ぎします。すると、染料が灰汁氣(アルカリ性)のため、少し褪色してゐても、この醋酸で



方仕のひ洗毛刷(圖一第)

還元しますから、完全に灰汁氣を除くことができ、同時に、布に光澤が出て、地質が滑かになります。染料の中では、酸性のものが、一番アルカリ性のために、褪色するやうです。

さて充分水濯ぎができましたら、普通は、水氣を除くために固く搾りますが、これは、前にも申しましたやうに、濡れたうちに出来た皺は、なかく除れ難いものですから、まづ洗濯板の平な方を上にして、鹽の向ひ上におき、約五寸くらゐの幅に、順次布を手繰りあげるのであります。そこで、全部すみましたら、両端を持つて、軽く左右に捻つて水を切るのであります。これならば、普通の搾り方と違ひ、大纏めにしてありますから、少しも皺が出来ません。なほ一番完全なのは、搾機械にかけることですが、これは家庭では望めませんから、前の方法で、なるべく皺の出来ぬやうに搾るとよいのです。これで布の洗ひ方がすみましたから、物干竿なり綱なりに都合よく丁寧に掛け、なるべく風通しのよい日陰で乾します。

以上の洗濯法は、色物の、銚仙程度の方法ですから、木綿類などはこれに準じ、幾分手を省くとか、白の瓦斯胸裏などは、石鹼をつけてお洗ひになつても差支ありませんが、矢張り揉ますに、木綿刷毛か、龜の子だはしを使つてお洗ひください。また絹物などの褪色の虞のあるものは、特別の洗濯法によるとして、これ等は専門家にお頼みになつた方がよいのです。家庭で行はれる方法は、以上の曹達液の外に、私たちが洗髪に用ひます椿の糟の煎汁か、または布海苔の煮汁で洗ふとよいのであります。但し毛織物に限つては、

特にお断りしておきましたやうに、四八頁の毛織物の洗濯法によつてお洗ひください。

## (2) 光澤を増す張り物の仕方

**糊の用意** 縮緬や、お召のやうなものは、湯伸し仕上げにしますが、普通の木綿類や絹物は、大抵糊をつけて張上げるのであります。それで最初に糊の作り方を申上げませう。

糊の原料は、種々ありますが、色物には布海苔とかゼラチンを用ひ、白物には生麩、メリケン粉、コンスターチなどの糊に、布海苔糊少々を、割り混ぜて用ふのです。まづ水五合につき、布海苔一枚の四分の一くらいの割合にして、布海苔を煮溶し、(普通店で買つてゐる小さい布海苔一枚で、大島や銘仙ならば五反、木綿ならば三反くらゐ張れます。)これを、裏漉で二度ばかり漉し、その中に美也光油を二三滴落して、よくかき混ぜます。(この美也光油は、光澤を増すために入れるのです。)糊の濃さ加減は、地質によつて多少違ひますが、銘仙、紅絹、羽二重のやうなものは、手に糊をつけてみて、一寸も粘氣のない、たゞの水の一寸濁つたくらゐの加減に、また甲斐絹類は、これの凡そ三倍ほどの濃さにします。ゼラチンは、一枚を水八合くらゐで溶きます。これは約二反分です。

一體に慣れない方の糊づけは、伸子張りでも板張りでも、兎角糊の加減が固すぎるやうです。絹布に固い

糊をつけますと、どうしても光澤が生まれませんし、また仕上りもごつ／＼しますから、糊は薄目になさる方がよいのです。尤も木綿は、地質に比例して、それだけ糊を濃くいたします。糊の分量は、絹布や瓦斯物ならば、一反につき五合、普通の木綿物で六七合あれば充分です。また生麩糊の作り方は、粉をまづ水で溶き、火にかけて、適當の濃さに煉り上げ、これにも、美也光油を一二滴落して混ぜます。なほこの中にも、前の布海苔汁を、少々割り込むとよいのです。すべて糊加減は、御自身で幾度も経験を重ねられますと、後では目分量や目見當によつて、すぐに分量や加減が判つてくるものです。

## (4) 伸子張りの上手な仕方

伸子張りは御承知のやうに、その仕上りが、如何にもしなやかにでき、布の光澤も大變よく、その上これを乾す場合も、布表を日に當てぬため、色の損む心配もありません。殊に伸子の長さが一定してをりますから、布幅に、広い狭いが出来ませんし、張り物に何より大切な布糸の緊張が、平均に且つ充分にできますから、張り方のうちでは、一番理想的な方法と申すことができます。それで絹物などは、なるべくこの方法で仕上げをしなければなりません。

**糊の引き方と伸子の打ち方** 布が乾きましたら、その両端につけておいた別布に、張り手を食はせます。

張り手には随分いろいろの形式がありますが、針式のもの、布に針を突通し、棒式のもの、別布を輪にして縫ひつけ、その中に棒を通すのです。そこで両方の張り手を適当な場所にかけて、布を強く張り、布表を下に向けて、前に用意しておいた糊汁を、糊引き用の刷毛にたつぷりと含ませ、布裏の片端から、この場合布裏が上に出てゐます。すつと糊を引くのですが、一気に、端から端まで引くのは大へんですから、三分の一づつ引きます。なほ糊は、ごく軽く、かすくくらゐに適宜に引くので、糊汁が流れ出たり、溜つてはいけません。かうして全部引き終りましたら、次に、糊のつかぬ別の刷毛を片手に持ち、前の糊刷毛をまた片手に持つて、この二本の刷毛を使つて、(乾いた刷毛は表布の側に當てます) 布の表裏両側から、萬遍なく擦り、糊をよく布に浸ませるのであります。

伸子は、最初に一尺おきくらゐに飛伸子を打ち、なほ縫目には、特に伸子を當て、次に本打ちをするのです。まづ右手に一束の伸子握り、一本づつ取り分けて、布表(下側)の先方の耳に一方の針を差し、横の布目が曲らぬやうにして、手前の耳に、片方の針を差して突張るのです。かうして片端から順々に、一寸おきくらゐに、針を打つのであります。尤も伸子の間隔は、近く打てば、それだけ布幅が揃ふのですが、普通ならば一寸おきに、裏地などは、一寸五分乃至二寸おきくらゐでよいのです。もし、狭い場所などで、一反分に一度に張れないときは、袖、身頃、衿袷くらゐに、小分けにすればよいのです。また初めに糊を引く方法が

難しく思はれましたら、伸子を先に打ち、裏側だけに糊を引いてもよいのですが、矢張り前のやうに、初めに糊を引く方が糊の落着きがよく、仕上りもよいのであります。

かうしてほゞ乾き加減になつたとき、飛伸子だけを殘して、本伸子を取り外し、(但し縫目のところは取りません) 耳消しといふことをするのです。まづ、空刷毛に水をつけ、一振り切つて、兩耳の五分くらゐの深さまで、すつと濕りを打ち、濡れてゐる間に、兩手の拇指の腹で、互に引くやうにして、兩耳の凸凹を直します。すると糊がにじみ、伸子を除つた後の穴がふさがり、同時に兩耳の凸凹が平になります。そこで水氣が充分乾きましたら、全體の伸子を取り外し、張り手を除つて、仕上げをするのであります。

なほ伸子には、お召伸子、絹伸子、木綿伸子など、その種類がいろいろありますが、家庭用には、絹綿兩用の、合伸子とい



勢姿方ち打の子伸(圖二第)

ふのが、一番重寶です。また新しい伸子始めて使用する場合には、何の水油でも結構ですから、油を煮立たせ、伸子を束ねて、両端を五分乃至一寸くらゐ交互に浸し、凡そ三十分間ほど煮ますと、伸子に油氣が浸み込んでしなやかになり、大變使ひよく、また丈夫になります。

**仕上げはアイロンか火熨斗** 仕上げは砧打ちにするのが一番よいのですが、近頃のお家庭には、砧はありませんから、アイロンまたは火熨斗で仕上げをいたします。いづれにしても、まづ餓臺の用意が肝要で、この臺に凸凹があると布に餓すれが出来て見苦しくなりますから、ごく平な臺を準備することが必要です。もし適當なものが無い場合には、張り板でも結構間に合ひます。まづ臺の上に毛布を四重くらゐ重ねておき、その上に天竺末綿または白金巾を張つて、前に張上げておいた布を擦り、餓を布裏から軽く透らして當てるのです。そこで端縫ひ糸を抜き、縫込みに焼餓を當て、折り目を起し、一尺五寸くらゐの長さの程よく折り疊み、軽い押しをかけておきます。これは少し熟練さへすれば、専門家に依頼したものに比べても、決して見劣りのせぬ、立派な洗張りができるのです。しかし、お召や縮緬物のやうな上等物は、矢張り専門家に依頼しませんが、どうもたがが悪いやうです。

#### (□) 板張りの上手な仕方

板張りは、その張上げが、伸子張りほどのよい光澤がないこと、また直接日光が布表に當ることなどの心配はありますが、しかし一方には、端縫ひとか伸子打ちなどの手數もいらす、伸子張りのやうな億劫さがありません。また耳に伸子の針目も残らず、至極手軽に仕上げができますから、まづ銘仙くらゐまでは、この方法で仕上げをするに便利です。次に、簡便にできて、しかも仕上げの綺麗な、新式板張りの方法を、詳しく申上げることいたします。

**張り方の呼吸と方法** これまで一般に行はれてゐる板張りの方法は、用布を糊汁に浸し、それを張り板の上に、たゞべたくと張りつけるだけですから、布の光澤が悪くなるのも、尤もであります。これを上手に張るには、まづ張り板を充分丁寧に洗ひ、汚れのひどいものは、曹達液で洗つておくこと。充分水氣を除きます。次に、用布の短いものはそのままに、身頃、袖などのやうに長いものは、布裏を中にして片端からくるくると巻き込み、板張りの場合は、端縫ひなどの必要はありませんから、乾いたらすぐに接縫を抜きます。清水にしばらく浸し、竿の垂れる程度に水を切り、新に表になる側を、張り板の上に直に當て、巻き目をずらすと伸します。すると、最初布裏を内側にして巻き込んでありますから、自然裏布が上側に出、布表が直接板について、水張りができるので、つまり、普通の板張りの場合とは、裏表の位置が反対になるわけがあります。

そこで、布が伸びましたら、板の一方の端を定規に取り、板の端一杯に布の耳を當てまして、布幅を九寸なり九寸五分なりに伸ばすと、何の造作もなく、きちんと布幅を揃へて張れますが、それを、目當なしに板の真中へ載せ、一二寸づゝ両端に板を出し、何の當もなく布を擴げますから、どうしても曲つたり、幅に廣い狭いが出て、真直に張るのが困難になるのです。それで必ず前のやうに、一方の端を定規にして、布幅を定めなければいけません。

かうして一布づゝ假張りをいたしましたら、別の布に充分糊を含ませて、水張りの上から軽く叩きながらよく糊を浸み込ませ、一層布幅を正確に定めて張りつけます。次に軟いタオルなどで、布の上を軽く撫でつけ、餘分の糊をすつかり拭き取ります。このとき少しでも糊が残つてあたり、一つところに溜つたりしますと、張上げたとき、そこだけが浮いたり、また地質が硬張つたりしますから、糊を充分落着かせねばなりません。これが板張りの光澤を出す、何より大切な秘訣であります。そこで板の片側が張れましたら、次は板を返して、もう一方の側を張るのですが、兎角板山のところは、布幅が狂ひ易いものですから、特に注意を拂ひ、同じ幅になるやうに張らねばなりません。乾きましたら、布を板から剥ぎ取ります。

しかし、剥し方が悪いと、折角綺麗に張上げたものも、地の目が曲つたり、また薄絹などは、往々裂けることがありますから、丁寧に剥き取ることが肝要であります。それには、布の兩耳を兩手で持ち、徐かに二

三寸剥ぎかけて、板の上で、布を巻きながら剥がしてゆきますと、する／＼と面白いやうに、真直に剥がれるのであります。

なほ板張り用の糊は、前の伸子張りと同じく布海苔または生糞糊を用ひますが、前に水張りがありますから、伸子張りの場合よりも、幾分濃目の糊を用ひます。すると布表に日光が直射する心配もなく、その上、布によい光澤ができるのでありますから、是非これまで一般になされて来た方法と、よく比較してお試しなすつて下さいませ。

#### (ハ) 手軽に出来るアイロンかけの仕方

大幅のセル、サージ、またはネル、メリンスのやうに、お家庭では伸子の張れぬ場合は、(大幅用の伸子は普通のお家庭に御用意ないと思ひます)霧吹きをして、毛布などでしつかりと包み込んでおき、全體に濕りが廻つたところで、アイロンをかけて仕上げをいたします。この他、絹布や木綿物でも、伸子張りや板張りをする代りに、アイロンで仕上げをすれば、伸子跡や糊引きの面倒がありません。殊に、急ぎの場合など、前の方法では、天候が悪ければどうすることもできませんが、この方法ですと、すぐに仕上げができて、大變便利であります。

**アイロンのかけ方** まづ布を丁寧(ていねい)に洗ひ、(八、四八頁参照) 皺(しわ)の出来ぬやうに搾り、絹布(きぬ)や木綿物(もめんもの)には、濡(ぬ)れてゐる中に糊(ご)をつけます。尤も糊(ご)づけは、一旦(いちど)乾(か)してからでもよいのですが、かうして濡(ぬ)れたまゝで糊(ご)をつける方が、乾(か)す手間(てま)が省(は)けてよいのです。但し糊(ご)加減(かへん)は、前(まへ)の場合(ばあひ)よりも、すつと濃(こ)くしておかねばなりません。そこで糊(ご)がつきましたら、布(ぬい)を程(ほど)よく折り疊(た)んで、板(いた)の上(うへ)におき、上(うへ)から軽(かろ)く兩手(りょうて)で叩(たた)きつけ、(すると糊(ご)がよく落(お)つき、小皺(こしわ)が伸びます)竿(さ)か綱(つな)に掛(か)けて乾(か)します。毛織物(けあひもの)には、別(べつ)に糊(ご)をつける必要(ひつよう)はありません。糊(ご)が乾(か)きましたら、初(はじ)めに布(ぬい)全體(ぜんたい)に霧吹(きりふ)きをして、これを毛布(けあひもの)かシートのやうな大きな布(ぬい)に、しつかり包(か)み込み、半日(はんじつ)くらゐそのまゝにしておきます。すると、布(ぬい)全體(ぜんたい)に濕(し)りがゆき渡(わた)りますから、そこで始めて、アイロンをかけるのですが、霧吹(きりふ)きしてすぐかけては、どんなに上手(うま)にしても、幾分(いくぶん)霧斑(きりば)がありますので、布(ぬい)に伸(の)び縮(ちぢ)みが出来(でき)たり、汚斑(しみ)が出(で)たりして、決(け)して美(うつく)しい仕上げ(しあげ)はできません。

そこで、布(ぬい)の用意(ようい)ができましたら、アイロン臺(たい)の上(うへ)に、布(ぬい)の表(うら)を下(した)にして載(の)せ、布(ぬい)を平(ひら)に擴(ひろ)げて布目(ぬいのめ)が真(ま)直(ただ)になるやうにおき、充分(じゅうぶん)熱(ねつ)したアイロンを右(みぎ)手に持(も)ち、(アイロンと臺(たい)のことは三〇頁(さんじゅう)を御覽(ごらん)ください)左手(ひだりて)で布幅(ぬいばた)を定(さ)めながら、ゆる／＼とアイロンを動(うご)かし、すつかり水氣(みづけ)が乾(か)くまでかけるのです。なほ、慣(な)れぬ間(ま)は、圖(ず)のやうに物差(ものさし)を當(あ)て、一定(いじょう)の幅(はた)に伸(の)び、ところ／＼を針(はり)で留(と)めておくと容易(やす)にできます。かうして、初(はじ)めに擴(ひろ)げた分(ぶん)をかけ終(は)つたら、殘(のこ)りの分(ぶん)を順(じゆん)々に繰(く)り擴(ひろ)げ、アイロンをかければよいのですが、で

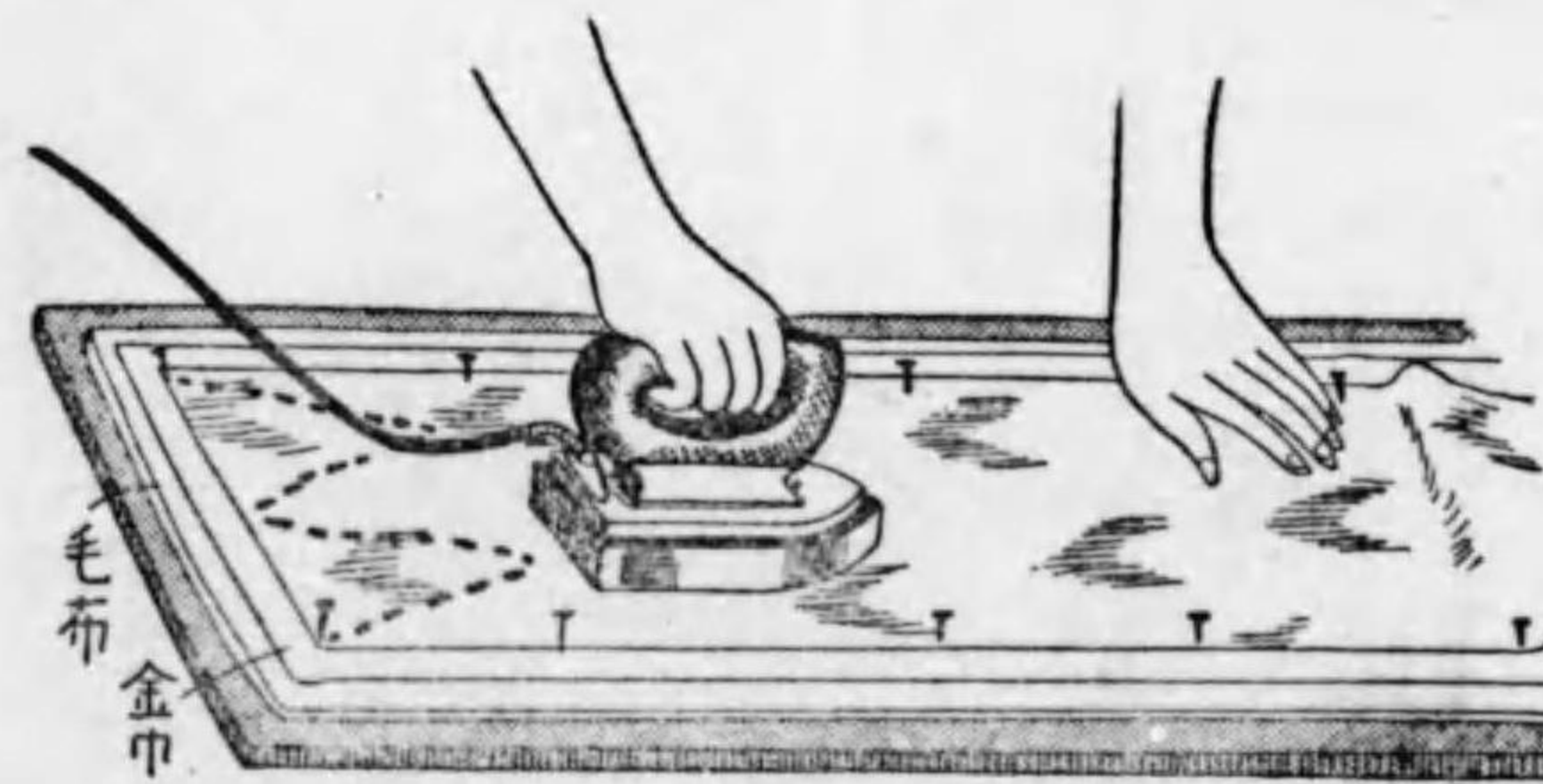
きるだけ輕(かろ)く取扱(と)り、跡形(あとがた)のできぬやう御注(ごちゅう)意(い)ください。

これは、洗濯(せんたく)さへしておけば、いつでも仕上げ(しあげ)が手輕(てかろ)にでき、至極(しごく)便利(べんり)な方法(はうほう)であります。

## 二、白地物(しろぢもの)の洗濯(せんたく)及び漂白(びやう)の仕方(しかた)

### (1) 綿布(めんぷ)並びに麻類(あしな)の上手(うま)な洗(せん)ひ方(かた)

**洗濯液(せんたくえき)の作り方(つくりかた)と洗(せん)ひ方(かた)** 敷布(しきふ)や窓掛(まどか)け、またはエプロン、シャツなどのやうな、白地(しろぢ)の木綿物(もめんもの)を洗(せん)ふ場合は、まづ鹽(しほ)に洗濯(せんたく)曹達(そうたつ)と粉末(こな)石鹼(せきけん)をそれ／＼入れ、次に熱湯(ねつとう)を注(つ)ぎ込み、曹達(そうたつ)が溶(と)けて石鹼(せきけん)の泡(あわ)が立つてきましたら、直(ただ)ちに前(まへ)の洗濯物(せんたくもの)を浸(ひ)し、鹽(しほ)にきつちり蓋(た)を被(か)せ、(風呂蓋(ふろがし)または張り板(はりいた)などを使(つか)ひます)そのまゝ、二三十分間(にさんじゅうぶんかん)ほどおきますと、布(ぬい)に附着(つ)した垢(あか)が充分(じゅうぶん)浮(う)き出(で)て、洗濯(せんたく)の都合(つがひ)が大(お)へんよくなるのです。なほこの洗濯液(せんたくえき)の分量(ぶんりやう)は、洗(せん)ひ物の多(お)少(す)により、幾分(いくぶん)の相違(さか)は



方(かた)けの鏡(かがみ)と方(かた)ち打(うち)の針(はり)止(と)め (圖(ず)三(さん)第(だい))



ありますが、まづ熱湯四五升につき、洗濯曹達茶匙三杯と、粉末石鹼盃二三杯の割合でよいのです。手のつけられる程度に洗濯液が冷めましたら、洗濯板を使つて洗ふとよいのですが、こゝで一吋洗濯板の使い方をお話し申上げませう。

まづ、鋸目の洗濯板を盆の中に斜に立て、上端を鳩尾のところにし、つかりと當てます。そこで洗濯物を両手で掴んで手繰り上げ、(石鹼液をたつぷり含ませて)布を廻しながら、さつくと軽く板の上で洗ひます。そしてまづ布表を板に當て、次いで裏側を當てるといふやうに、二三度繰り返して洗ひますと、少しも骨折らずに、全體が綺麗になるのですが、それを力一杯強く擦らねば、垢が充分落ちぬものゝやうに思ひ、しかも同じところをこしく擦りつける方がよくありますが、これでは布の部分々々の汚れは落ちて、布全體が真白くはなりませんし、その上布地が大へん損みまますから、決して強く擦つてはいけません。

**水を搾るにも板の上で** 次に汚れのひどい箇所には、特に濃目の曹達液か石鹼液をつけ、刷毛洗ひをするか、布を縦横交互に揉んで、一まづ布を搾つて石鹼水を捨てます。そして盆を洗ひ清めて熱湯を入れ、この中に搾り上げた洗濯物を浸し、そのまゝ、二三分間ほどおきます。専門の洗濯屋は、この場合煮るのですが、普通の家庭では、たゞ熱湯に浸すだけでよいのです。すると垢や石鹼分などが、完全に浮き上つてきますから、三四回ぐらゐの水を取り替へて、充分水濯きをするのですが、この場合にも、前のやうに洗濯板を使ひ、

手繰りながら洗ふと、容易に水濯きができます。

また、大きなものとか、地質の固いものは、固く搾るのが大變困難でありまして、力が入る上に、なかなか水が切れませんが、これも、次のやうな方法で搾りますと、何の造作もなく、固く搾れます。まづ洗濯板を盆の上におき、その上に洗濯物を平に攤げ、布を眞二つに折ります。次に右方の上端を、左に向けて少しばかり斜に折り、左方の上端から、斜にくるくると巻き、裾のところは、左の端を斜に右に向けて、少々折り込み、そのまゝ、巻き下げてゆきますと、同じ太さの斜巻の棒が出来ますから、次に上端(右端)を右手に、下の端(左端)を左手で持つて、棒の眞中を板で支へながら、左右の手を反對に向け、くるりと布を振るので、かうして二三度繰り返して振りますと、どんな固いものでも、容易に水が切れるのです。



附手の方で搾る布 (圖四第)

**青味づけと漂白の仕方** 洗濯ができましたら、更に青味づけをしますと、布が一層眞白く見えるやうになります。まづ鹽基性染料の青(藥店でキンピロといつて買ひます)を、水五升につき、耳搔に軽く一杯の割合にして、熱湯でよく溶き、これを清水の中に落とし込み、ごく薄い水色の液を作り、この中に洗濯物を浸け、二三回かき廻して、五分間ほどおきます。これは布がほんの水色が、ればよいのですから、この場合度を過ぎぬやうによく氣をつけねばなりません。

次に、垢が全體に浸み込んだ白地物は、どんなによく洗つても、何となく茶が、つて色の脱げぬものです。これは漂白粉で洒しますと、すぐに眞白くなります。

まづ水一升到漂白粉茶匙一杯の割合にとつて(漂白粉をよく潰すこと)水で溶き、その上澄の水を徐かに取り、その中に、重曹を茶匙に軽く一杯ほど入れ、よくかき廻して、前に洗つておいた洗濯物を直ちに浸します。すると、漂白粉中に含まれてゐる鹽素の作用で、見る／＼うちに、布が漂白されますから、布を取り出して更に何度も清水で濯ぎ、水五升につき稀硫酸または醋酸を盃に一二杯入れ、この中に暫く浸して、すつかり漂白粉の臭氣を除き、再び充分水洗ひをします。

漂白粉を主劑にして、これにいろ／＼の藥品を配合したホワイト・ローズといふ、木綿、麻用の漂白劑がござります。これは漂白粉よりも安全で、また容易に漂白ができますから、このホワイト・ローズ茶匙二三

杯分を水一升到に溶き、直ちに布を浸して、そのまゝ二三十分間くらのおきますと、綺麗に漂白ができます。尤も急ぎの場合には、酒石酸または醋酸少量を入れますと、直ちに目的が達せられて便利ですが、なほこの場合にも、後をよく水洗ひした後、稀硫酸水を通し、充分水濯ぎして漂白粉の氣を除る必要があります。何分にも漂白粉は、強い漂白劑ですから、使用量が多すぎても、漉出し液に長く浸けても、または水面から布を出し放しておいても、布がぼろ／＼になりますから、(これは酸化するためです)御注意願ひます。古くなつた白地物は、かうして時々洒しまして、その上で青味づけをいたしますと、いつまでも氣持よく保たせることができます。

**糊のつけ方と仕上げ法** 次に、洗つたものが乾きましたら、糊をつけます。糊は吟生紙十五匁につき水一升の割合にして、初めに水を少しづつ入れて生紙の粒々をすつかり溶き、前の分量の水で伸し、火にかけて絶えずかき廻しながら、生紙によく火が通り、色が透明になるまで煮ます。そして糊の温い中に品物を浸け込み、斑なく糊がゆき渡るやうに充分揉み込んだ後、固く搾つて乾します。

乾いたならば一面に霧を吹き、敷布とか窓掛のやうなものは、適宜の大きさに巻き込み、シャツやズボンなどは、縫目に従つて疊みつけ、固く搾つた清潔な濡布で包み、二三時間そのまゝにしておきます。濕氣が充分ゆき渡りましたら、アイロンかけ臺の上に擴げて、アイロンまたは火熨斗をかけ、小皺を伸ばしますと、

西洋洗濯屋に出したものと、少しも劣らぬやうに、立派な仕上げができます。なほ、アイロンは布が焦げぬ程度に熱く焼き、アイロン形や跡がつかぬやう、布の上に軽く當てながら、すう／＼と手順よくかけなければいけません。

こゝで少しばかり、アイロンとアイロン臺のお話をいたしませう。御承知のやうにアイロンには、在來の火熨斗式のもので、中に火を入れて使ふものや、鏝と同じく火の上で熱して使ふものとか、瓦斯や電氣を通じて熱めるものなど、いろいろ變つた形式のものがありますが、皆なそれ／＼一長一短があります。火熨斗式のものには、安いが代りに、使用上いろいろ不備な點があり、火熨斗の代用にはよいのですが、アイロンとしては、少し軽すぎるやうです。次は専門の洗濯屋で、一般に使はれてゐる本式の鏝式アイロンであります。これは型も大中小といろ／＼あり、重量が各違ひますから、材料によつて適當のものが使用され、大變便利であります。すべてアイロンは重いものほど仕上げの工合がよいのですが、餘り重いものは、素人には一寸扱ひ難いのであります。ですから、六ボンドくらゐのものが丁度手頃であります。これを使用するには、赤く熾つた炭火の上に乗せ、適當に熱したところで使ふのですが、何といつても火力で熱するので、いつまでも、温度が平均に保たれるわけにはゆきませんので、時々熱め返さねばならぬ缺點があります。瓦斯アイロンは、この意味では、炭火を用ふ面倒もなく、いつも一定の温度を保つてゐるので、工合がよいの

ですが、瓦斯の設備のないところでは使用できませんし、アイロンの中で瓦斯が燃えてゐるため、うつかりすると、布を焦すやうな缺點があります。そこへゆくと電氣アイロンは、すべての點に於て、前記のものに優つてゐますが、これも瓦斯と同じく、電氣のないところでは、絶対に使用されぬこと、たとひ電氣の設備があつても、晝間送電の設備がなければ、夜分しか使用できぬ不便があります。近頃は電熱の利用が盛んに行はれ、アイロンも電氣用のものが、多く使用されるやうになりました。それでアイロンは、どの種類のものでも結構ですから、是非これからの家庭には、一箇だけは備へつけておきたいと思ひます。またアイロンは、日頃手入れをよくしておき、鏝のできぬやうに、注意しなければなりません。

次にアイロン臺ですが、これは幅一尺、長さ二尺、厚み三四分くらゐの手頃な板の上に、程よく綿を一面に敷き、(綿の厚さを平均させること)上から白地の木綿を被せて、板をすつかり包み、鏝臺の大きいやうなものを作つておきますと、いつでも使用ができて、大層便利であります。もしさうした専用のものでない場合には、適當なテーパーとか、または張り板のやうな、表面が平で滑かなものを選び、その上に毛布かフランネルのやうな、地厚の毛織物を、三重くらゐにして敷き、その上から、金巾のやうな白い布を被せて代用いたします。

## (2) 白地絹物の上手な洗ひ方

**洗濯液と洗ひ方** 普通のお家庭では、白羽二重または白縮緬、その他白地の絹布類を、一反二反と纏めて洗濯するやうなことは滅多にありませんし、また用具なども調ひませんから、家庭で洗濯するのは却て御損であります。しかし兵児帯や袖裏、襦袢の半襟または帯揚げなどのやうな、細々としたものは、洗濯の機会も多く、また誰にでも手軽にできます。次に、それ等の簡単な洗濯法を申述べませう。

白地の絹物を洗濯するには、まづ、洗濯物が入る大きさの瀬戸引または銅の鍋に(瀬戸引洗面器でも結構です)湯を沸し、湯三四升の中へ、洗濯曹達を茶匙に一杯半くらゐ入れて、煮立てます。これは水の中にある石灰分を除くため、つまり、水の質を軟くしておくのですが、もし質の硬い水に(これを硬水といひます)石鹼を入れますと、水中に含まれてゐる石灰分と石鹼とが化合して、石灰石鹼といふ滓ができ、これが絹物について、布の光澤をなくしてしまふのであります。そこで、この中にマルセル石鹼十匁(凡そ五六分角の賽の目大)を薄く削つて入れ、石鹼が溶けた上で、洗濯物を入れ、三四十分間はかり煮るのであります。このとき、火が強くて、湯がぐらぐらと煮立たぬやうに、(攝氏七八十度くらゐの温度が丁度よいのです)時々箸で、洗濯物を繰り廻すことを忘れてはいけません。

かうしておきますと、大抵の垢は除れますが、なほ部分々に垢が残つてゐる場合には、再び取り出して洗濯板の上におき、絹用刷毛に、濃い石鹼水をつけて、軽く擦つて垢を落します。

次に全體が洗へましたら、新しい熱湯三四升につき、洗濯曹達を、茶匙に一杯半くらゐの分量で溶し、その中にしばらく浸けてから濯ぎ、なほ清水で、二三度振りながら濯ぎ洗ひをします。最後に水一升につき、醋酸盃一杯の割にして作つた、醋酸水にしばらく浸し、(これはアルカリ分を除き、布に光澤を出すためです)布を一枚づつ引上げて、濡れたまゝで竿に掛けて乾すのです。すべて絹物は固く搾つたり、強く揉んだりしては、すぐに皺が出来ますから、御注意ください。なほ仕上げは伸子張にするか、アイロンをかけるかよいのですが、このときに濕りをつけては、布に汚斑が出来ますから、布が乾きましたら、直ちにアイロンをおかけください。

**漂白の仕方** 絹物の漂白法は、水一升到リスリン三四滴、酸性亞硫酸曹達盃一杯を入れてよく混ぜ合せ、その中へ水濯ぎした洗濯物を搾つて浸しておきます。これで充分白くなるのですが、これだけではまた元へ戻ることがありますから、更に次亜硫酸曹達の溶液を通します。これは、一升の水につき、茶匙一杯を少量の熱湯で溶して用ひるのですが、この浸しておく時間は、いづれも五分間くらゐで結構です。酒しましたら、ざつと水濯ぎして、最後にリスリン三四滴、醋酸四五滴(二升の水に)を落した水を通して

乾すのであります。これは太陽の光線に透して見て、白く透き通つて見ればよいのですが、黄色く濁つてある場合には、もう一度この方法を繰り返して洒します。

なほ、木綿漂白剤のホワイト・ローズのやうなもので、『白性』といふ絹、毛織物用の漂白剤があります。これを水で溶いて用ひますと、容易に漂白ができて便利であります。

### (3) 白地毛織物の上手な洗ひ方

**毛織物の性質と洗濯法** 白セル、白メリンスなどを洗ふには、本洗ひをする前に、是非下浸けをしなければなりません。これは、毛織物には絹や木綿と違つた、特別の性質があるためでありまして、これをいきなり水洗ひしますと、布地が収縮したり、弾性がなくなつたりして、その上布地が黄色になります。一體白セルでも白メリンスでも、最初はつと黄ばんでゐるものですが、漂白して初めて白くなるものでありますから、これをアルカリ性の強い石鹼で洗ひますと、毛の繊維中に含まれてゐる硫黄分と石鹼中の遊離アルカリが化合して、元のやうに布が黄色くなるわけです。またアルカリは、垢を落とすと同時に、布の脂肪分を除きますから、毛織物特有の弾性までが失はれるのです。毛織物の洗濯には、アルカリを用ひぬやうにしなければなりません。しかし普通の水洗ひ洗濯では、幾分なりとこのアルカリが入らねば、垢がよく落ちぬもので

すから、結局アルカリの害を防ぐより他に方法はないことになります。従つて本洗ひの前に、下浸けをすることが、それに役立つといふことになります。

かうした研究から、リスリン液に浸す方法が判つてきたのであります。リスリンには、アルカリを受けつけぬこと、地質を縮ませぬこと、光澤をよくすること、垢を早く溶解して分離させること、皺がついてもすぐ伸びること、などの諸性質があるために、かうして一旦リスリンで下拵へをしたものは、たとひアルカリに會つても、それを繊維に浸ませませぬ。そのために、黄色くもならず、地質も損なわずに、汚れを早く除くことができるのであります。

まづ一升の微温湯に、リスリンを五六滴落し、洗濯物をしばらく浸けておきます。すると、リスリンが布に浸み込みますから、ラックス(五〇頁参照)またはマルセルなどの品質のよい洗濯石鹼を微温湯で溶し、分量は湯一升につき石鹼五六匁くらゐ(充分泡が立ちましたら、前の洗濯物を浸して洗ひますが、毛織物は、こし、揉んだり擦つたりしますと、毛羽が立つて地が損ないますから、洗濯液を充分含ませて板の上に擴げ、絹物用の軟い洗濯刷毛を用ひ、軽く擦りながら洗ひます。それで汚れが落ちましたら、微温湯で濯いで洒し、再びよく濯いで絹物のやうに、醋酸とリスリン液に浸け、濡れたまゝ、竿に掛けて乾します。なほ毛織物は、冷たい水で洗ひますと、布が収縮したり、損んだりしますから、最初から最後の仕上げまで

すべて微温湯を用ひねばなりません。

**漂白と仕上げ法** 漂白の仕方は、すべて絹物と同じ方法でよいのです。なほ最後に醋酸とリスリンの溶液に浸けましたら、搾らずにそのまま竿に掛け、たゞ水を切つて乾すのです。固く搾ると皺が出来ますから、注意しなければなりません。なほ仕上げの仕方は、アイロン仕上げの部分(二三頁)を御参照ください。

### 三、家庭で出来る夏洋服の洗濯と仕上げ法

一口に夏洋服と申しましても、いろいろの種類がありますが、こゝでは主に男子服の洗濯法をお話したいと思ひます。これまで洋服といへば、家庭では洗へぬものゝやうに思はれ、大方専門家に依頼される習慣になつてをり、ために洗濯代を澤山支拂はねばならぬので、汗でぐたくになつても、つい三度に一度は、そのまゝ、乾しつけるといつたわけになり、兎角洋服の洗濯は億劫がられるのですが、これは、衛生上からも、また保存上からも、大變不利なことでありますから、これからは、なるべく気軽に家庭で洗濯なさいますやうに、習慣づけて頂きたいものであります。

#### (1) 夏洋服の布地と汚斑脱き法

**洗ふ前に汚斑脱きを** 洋服に限らず、すべて織物は繊維の種類により、各洗濯法が異なりますから、まづ第一に繊維を検べ、布地に適當する方法で洗濯するのであります。夏洋服用の布地としては、主にセル、アルバカ、ポーラ、麻、小倉、桂木の類、または絹絨及びフランシルク等が使用されています。この中セル、アルバカ、ポーラ、絹絨、フランシルクは申すまでもなく動物性繊維で、麻、小倉、桂木は植物性です。これを何も彼も、ごつちやに水に浸けて洗つては、立派な洗濯ができる筈はありません。そこで繊維の區別がつきましたら、次は全體に刷毛をかけて塵埃を拂ひ、ポケットも裏返して綺麗に塵埃を拂ひます。次に汚斑のあるものは、繊維の區別と汚斑の種類により、各適當な汚斑脱き法を行ひ、その上で洗濯をします。

夏洋服につき易い汚斑は、インキ、墨汁、汗、果實汁、泥はねなどがありますが、これは、第九項の汚斑脱き法(八二頁から九三頁まで)を應用して、それら汚斑を除きます。

#### (2) 麻並びに小倉地洋服の洗ひ方

**洗濯液の作り方と洗ひ方** 小倉、麻、桂木等の木綿類は、最初水一升、洗濯曹達茶匙一杯の割合の曹達液に浸し、その後で、粉石鹼を一升の水に茶匙二杯くらゐの割合に溶き、その中に入れて、洗濯板の上で洗ひ、衿、袖口、裾口のやうな、特に汚れのひどい部分は、木綿用の洗濯刷毛に、濃目の石鹼を含ませ、擦りなが

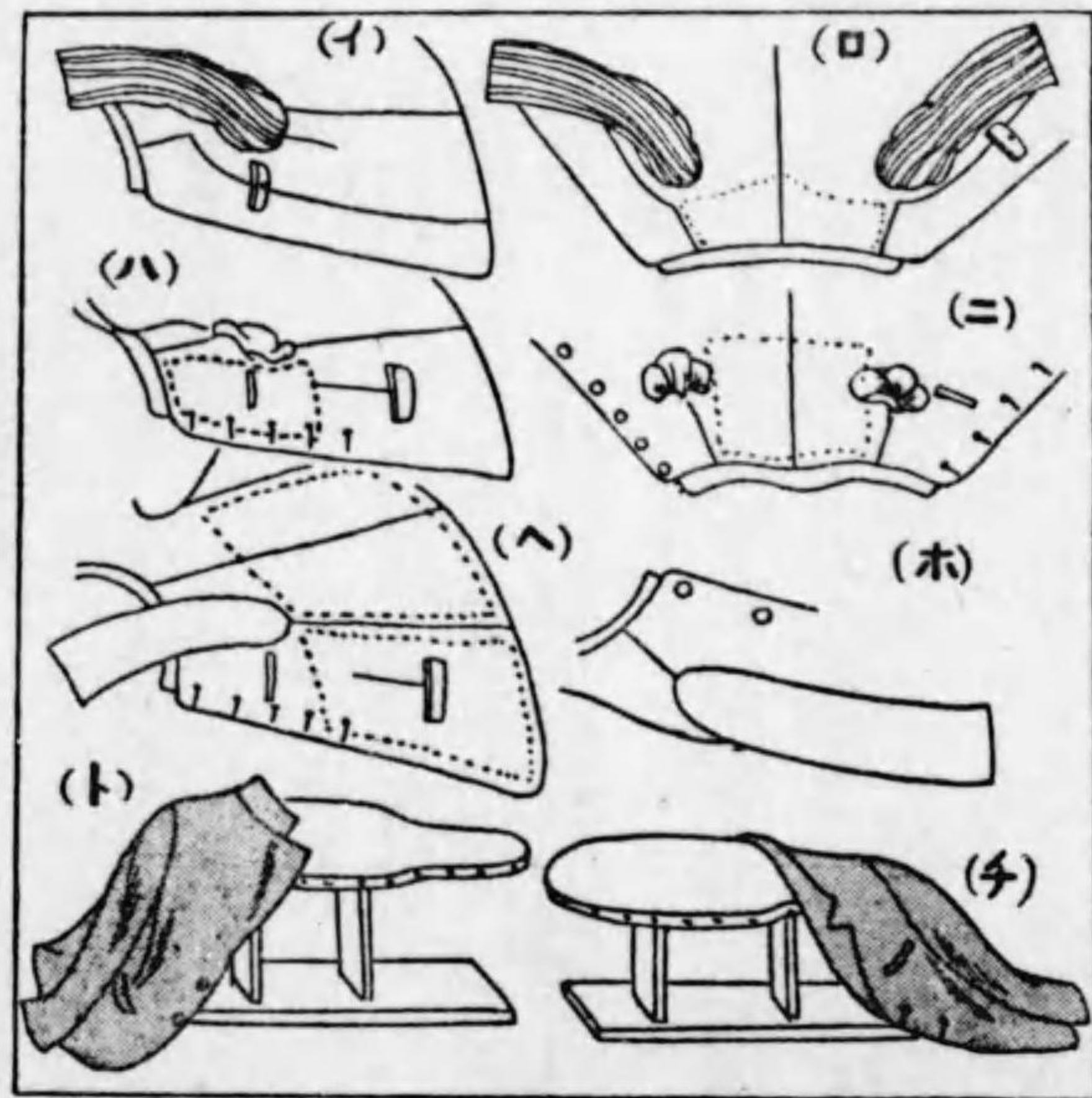
ら洗ひますが、すべて前の白地木綿の洗濯法と同じですから、前項をよく御参照ください。そこで汚れが充分落ちましたら、よく水濯ぎして、直ちに糊をつけて乾すのであります。

なほ白地のもので、洗つただけでは綺麗にならぬものは、前の白地漂白法により漂白粉、またはホワイトローズで漂白し、ごく薄い醋酸水に通して漂白粉の臭気を除き、水洗ひします。糊は何でもかまひませんが、御飯糊や生麩糊は、一度にからりと乾かないと、腐敗して變色したり、星が出たりしますから、コンスターチが一番よろしいやうです。この分量は、一着分につき茶匙四杯くらゐを、片栗粉を溶くやうにして、まづ水溶きしてから、熱湯を注ぎ、手早くかき廻し、葛煉りのやうにすつかり水色になるまで溶き、その上で、一着分の洋服に浸みるくらゐの水で、薄く伸して用ふのです。なほ糊は服を裏返してつけ、洋服疊みに疊んで、軽く押し搾りして乾します。

**仕上げアイロンのかけ方** まづ噴霧器で全體に霧をかけ、くるくると巻いて毛布か敷布に包み、平均に濕りの廻つたところで、アイロンをかけます。

アイロンのかけ方は、第五圖の順序で、各點線内をかけます。つまり(イ)は下前衿裏、(ロ)は肩當から上前の衿孔裏、(ハ)は上前表衿孔のところから肩まで、(ニ)は表背上半身と衿附先まで、(ホ)は袖を表に返し、袖場合は、括り枕か、布を丸めて當て、その上でかけるとよいのです。

なほ、アイロンのかけ方は、前の二四頁を御参照ください。臺その他の物品も御用意して頂きたいのです。しかしここで一つ注意を要することは、アイロン掛のために、銹斑を作つたり、ひどく鏝跡をつけぬことであります。何しろ洋服類は、前の敷布やシャツとは異ひ、上に着て人様の中に出なければなりませんから、餘程仕上げを手際よくしないと、大へん



洋服仕上鍍げのかけ方順序 (圖五第)

見苦しいものですから、何度も経験を積まれて、仕上げが上手にできますやう、いろいろ工夫をなさることが何より大切なわけであります。

### (3) 絹綯及びフランシルク服の洗ひ方

#### 洗ひ方と仕上げの仕方

次に絹綯の洋服や、近頃流行してゐる、フランシルク製の洋服の、洗ひ方をお話しいたしませう。まづ湯二升につき、アンモニア四五滴及びマルセル石鹼茶匙三四杯の微温湯溶液に浸し、刷毛洗ひをします。充分汚れが落ちましたら、よく水濯ぎをしまして、次に次亜硫酸曹達の溶液に(次亜硫酸曹達茶匙二杯を、少しの熱湯で溶き、二升の微温湯で薄める。)十分間くらゐ浸し、更に薄い醋酸液を通し、そのまゝ搾らずに洋服掛に吊し、正しく形を整へて、風通しのよいところで乾します。

なほ絹物には、別に糊づけをする必要はありませんが、もし糊氣を持たせたいときは、ゼラチンを煮溶してごく薄く伸し、最後に糊づけをするのです。そこで洋服が大體乾き、ほんの少し湿氣のある中に取り入れ、前のやうにアイロンをかけて仕上げをします。絹物は霧を當てますと、汚斑の出来る虞がありますから、霧吹はしない方が安全であります。またアイロンは、必ず裏から當てなければいけません。

### (4) セル・アルバカ類の洗ひ方

#### 洗濯法と仕上げの仕方

毛織物は、前にも申しましたやうに、いきより洗濯液に浸けて洗ひますと、黄ばんだり毛羽が立つたりして、外見を害し、地質を損めますから、まづ三四頁白地毛織物の部で、詳しく述べましたリスリン液に浸し、その上で洗濯をします。なほ白セルの場合は、右の浸し液の代りに、米の漸汁を微温湯にして用つても、結構であります。

かうして下浸げができましたら、次に洋服の色別によつて、それごと洗濯液を作つて洗ひます。

▲淡色の洗液 微温湯二升、マルセル石鹼末茶匙四五杯、アンモニア水四五滴。

▲濃色の洗液 微温湯二升、アンモニア水六七滴、硼砂茶匙一杯。

▲白色の洗液 微温湯二升、マルセル石鹼末茶匙五六杯、アンモニア水五六滴。

そこで綿アルバカや薄色物は淡色の洗液で、紺、黒などの服は、濃色の洗液で洗ひ、白セルは白色の洗液で洗ふのであります。まづ洗濯刷毛で表全體を洗ひ、次に裏を洗ひまして、衿、袖口、ポケット口のやうなところは、特に入念に洗ひます。またズボンやチョッキも同様の方法で洗ひ、全部洗ひ終つた後、幾度も水を替へて、(微温湯を用ひます。)充分に水濯ぎいたします。なほ衿その他の汗汚斑が、洗つたゞけで落ちぬ場合は、



酒石酸茶匙一杯を五勺の熱湯に溶き、その部分に塗りつけて後、水濯ぎをします。また白セルのやうな、全體を漂白する必要のあるものは、酸性亞硫酸曹達 盃二杯に湯三升、ハイドロサルファイト茶匙三杯の割合の液にしばらく浸けて酒し、最後に醋酸液(微温湯五升、醋酸 盃半分、リスリン五六滴)にしばらく浸し、濡れたまゝ洋服疊みに折り疊んで、押し搾りするのです。但しビヂウのやうなものは、亞硫酸のために錆がつきますから、白い布でよく包んでおきます。もし取ることができれば、それに越したことはありません。

また毛織物には、糊づけの必要はありませんが、もしびんとさせたときは、前の絹と同様に、ゼラチン糊をつけ、洋服疊みにして、水氣を押し搾り、更に大タオルか、敷布に包み、充分水氣を除いて、前の絹織物のやうに洋服掛に吊して、陰乾しにします。服が乾きましたら、全體に霧をかけ、濕りが斑なくゆき渡つた上で、アイロンをかけて仕上げますが、木綿物のやうに、直に服に當ると布が光りますから、必ず固く搾つた布を一枚上に當て、その上からアイロンをかけなければいけません。

#### 四、木綿單衣類の上手な丸洗ひの仕方

##### (1) 布地、染色別による洗ひ方

##### 汚れ易い夏の着物の洗ひ方

木綿單衣物には、麻、綿紬、縮、ポイル、ガーゼ、真岡、手拭地など、いろいろ變つた地質のものがあり、また染色の方面から見ても、緋、縞、織出模様、友禪、絞りといふやうに、異つた染つけのものがありますから、従つて洗濯法も、一樣に説明できぬものです。御承知のやうに、久留米緋などは、大へん染めが堅牢なものですから、少々無理な洗ひ方をして、布地が損んだり、色が褪めたりすることはありませんが、値段の安い中形物や、染模様の中には、随分色の落ち易いものがありますから、餘程注意を拂つて洗濯をしなければなりません。

##### (1) 久留米緋、縞物の洗ひ方

##### 黒地及び紺地の洗ひ方

久留米緋の特長は、洗濯をすればするほど、紺の色が冴えて緋が綺麗になるのですから、安心して洗濯できるのでありますが、大方は紺地や黒地といふやうに、濃色が多いものですから、石鹼を多量に用つて、しっかりと洗ひますと、石鹼滓が布に附着して、折角の紺色が悪くなります。久留米緋でも、縞織物でも、紺地や黒地のものは、洗張りの部で詳しく申述べましたやうに、(一)頁参照。洗濯曹達液か、灰汁の溶き液で洗ふ方がよいのであります。しかしどうしても、石鹼を用ひたい場合には、石鹼を直につけぬやう、必ず洗濯曹達液の中に溶し込み、その中に着物を浸して、刷毛または龜の子だはしで洗ふと

よいのであります。

こゝで一丈丸洗ひについて御注意申上げたいことがあります。それは、何しろ丸洗ひは、着物を丸のまま、洗濯液に浸し、さぶく洗ふために、幾分着物の形がくづれたり、また縫目がはみ出したりすることは、どうしても免れ得ません。しかしこれとても、洗濯を丁寧にするか、或は前もつて着物に騷をかけておけば、形をくづさずに、立派に洗濯することができます。それで洗濯にかゝる前に、掛衿だけを取り外し、衿幅の中心に二寸くらの針目ですつと騷をかけ、衿芯がごろ／＼しないやうに止めます。次に袖附、背縫、衽附などには、面倒でも、一々騷をかけておきます。以上のやうに、充分下準備ができましたら、これを前の液に浸して刷毛で洗ひ、丁寧に水で濯ぎまして、濡れたまゝで袖疊みに疊み、水を押し搾りします。また掛衿は、衿辻の汚れを揮發油で拭き除り、前と同じやうに刷毛で洗ひ、よく水濯ぎをします。

次に糊は、紺地や黒地ものには、布海苔を煮溶し、これに生軟糊少々を混ぜて用ひます。尤も糊づけは、濡れてゐる中でも、一旦乾し上げた後でも別に差支ありませんから、御都合のよいときにおつけください。しかし、濡れた中につける場合は、糊を幾分濃目にしなければなりません。なほ着物は裏返しにしておきます。糊が充分着物に浸みしたら、前のやうに袖疊みに疊んで、水気を押し搾り、乾いた大タオルか敷布などに包み、一層よく水気を除り、その上で、両手で徐かに叩きつけ、できるだけ皺を伸ばして、これを物干竿

に通して乾すのであります。

### (口) 麻、ポイル、綿糸の洗ひ方

**色止め法と洗ひ方** 近頃は麻織物にも、随分いろ／＼な種類のものが出来、お値段なども競争の形となつて、だん／＼安くなりました。しかし、それに準じてかなり粗悪品が現れてまゐりましたから、洗濯も餘程注意しなければなりません。

麻、ポイル、綿糸などの、褪色の虞あるものは、最初に水三升に、鹽一掴みと、燻明礬茶匙二杯をよく溶して入れ、その中に數分間浸しまして、手早く振り洗ひをします。すると色が止りますから、石鹼水で洗つても、色が出る心配がなくなります。しかし、紺や黒地物は、石鹼で洗ひますと、幾分色が出ますから、必ず灰汁か洗濯曹達水で洗ふのであります。白地物は、まづ曹達水を作り、上等の粉石鹼少量を加へ、充分泡立つた上で着物を浸し、徐かに振り洗ひをします。これは決して強く揉んだり擦つたりしてはいけません。また模様物や色物を、長く水に浸しておくと、非常に染色を害しますから、できるだけ手早に洗ふことが何より大切であります。それで下漬けをして色を止めましたら、すぐに本洗ひをするといふやうに、一枚づつ、手早く洗ひ上げてゆくののであります。

そこで汚れが充分落ちましたら、よく水濯ぎをした上で、再び色止液を通し、最後に水でざつと洗ひ、糊をつけて、(ポイルは糊をつけません。)袖疊みに疊み、水氣を押し搾つて軽く叩きつけ、日陰に出して乾します。糊は、メリケン粉糊、生軟糊、御飯糊、姫糊等を用ひますが、一番便利で、ためによいのは、コンスターチであります。また紺地物には、前のやうに布海苔糊をお用ひください。また幾度か水に通して、地質がだらけたものは、文化糊の使用をお勧めします。これは木綿を、麻のやうにさらりとさせる糊であります。着物の新しいとき、手で擦つても色のつくやうなものは、仕立てる前に、焼明礬茶匙二杯を一合の湯で溶き、一面に斑なく霧をかけ、日光に當て、色を焼きつけるとよいのです。

#### (ハ) 中形及び縮類の洗ひ方

**洗ひ方と乾かし方** さつぱりと洗ひ上げた、糊氣の程よい浴衣の氣心地は、一日の苦熱を忘れ得るに充分であります。それだけにまた夏場の洗濯は、忙しいものです。しかし中形染め法は、昔からいろく研究されてをりまして、値段の割に染色は、確實、堅牢でありますから、布地は弱つても、染めはもとのまゝであるものさへあるのです。けれども、数多い中には、往々粗悪品もありますし、紺や黒地物は、かなり入念に洗ひましても、幾分色の出るものですから、すべて前の麻類の洗濯法により、丁寧に洗はねばなりません。

なほ糊のつけ方は、前項を参照して頂きます。

次は縮類の洗濯の仕方でありますが、これも前の麻類の洗ひ方を應用して、洗濯して頂きたいのであります。なほ縮類は、御承知のやうに、これを水で濡しますと、織物の性質上縮んだり、また反対に伸びたりすることがありますから、布の伸縮の工合をよく見定めて、縮むものは、竿に通して乾す場合に、袖、身頃、衿袷に、程よく、伸子を十文字に渡してかけ、その上で乾しますと、布がひどくは縮みませんから、後で仕上げをするときに、大へん都合がよいのです。

この他、單衣には、よくメリンスを用ひますが、この洗濯法は、四八頁毛織物の洗濯の仕方を、應用して頂きます。

#### (2) 單衣洗濯物の仕上げの仕方

**布の伸し方とアイロンのかけ方** 前述のやうにそれく洗濯がすみましたら、糊づけをした着物は、充分乾した後で、布地をよく伸し、仕上げをするのであります。尤もポイルなどは、乾しただけでも皺が伸び、別に仕上げの必要もないくらいになります。大抵のものは、小皺が出来てをりますから、着物を裏返しにして、全體に噴霧器を使つて霧をかけ、しばらく敷布などに包んでおきます。久留米紺や中形物は、布を縦

横に、徐々に伸し、なほ掌でよく擦りながら引張るのです。次に居敷當や肩當を表布と離して本疊みに疊み、丈を二つに折つて、綺麗な筵か白布で挟み、上から叩きつけて軽い壓しを當てます。すると着物がびんとなつてきますから、衣紋掛に吊し、風通しのよいところに出して充分乾します。掛衿は別に霧を吹いて充分伸し、その上で着物にかけますと、衿がはみ出たりすることなしに、形もくづれず、綺麗に丸洗ひができます。なほ麩絲は最後にお除りください。

また麻や綿絹などは、前のやうにして濕りを當てた後、アイロン臺の上に攤げ、まづ居敷當や肩當にアイロンをかけ、衿裏を伸し、次に表衿、衿先を伸して、(布を一枚當て、かけます。)次に、後身頃、兩袖、上半身に斑なくアイロンを當てます。これが終わりましたら、着物を表に返して本疊みにしながら、前身、衿、後身といふやうに、順序よく伸すのであります。かうして全體にアイロンがかゝりましたら、掛衿をよく伸し、前のやうに衿をかけて仕上げるのです。

## 五、毛織物並びに毛絲編品の洗濯法

毛織物は御承知のやうに、保温性に富んで着心地よきこと、地質が堅牢で耐久性のあることなどにより、衣服としては大へん重寶なものでありますから、洋服類は申すまでもなく、和服類にも、着類一切から帶、

長襦袢、夜具の類まで、廣く使用されてゐるのであります。近來はまた、毛織物のみでなく、毛絲編品の需要が著しく多くなりましたから、従つて家庭に於きましても、毛織品並びに毛絲編物の洗濯が、非常に多くなつてまゐりましたが、白地物の洗ひ方や酒し方に就ては、既に(三四頁参照)お話しいたしましたから、ここでは、色物の毛織並びに毛絲編物の洗ひ方を、説明申上げませう。

### (1) セル及びメリンス類の洗ひ方

**色の止め方と洗ひ方** 近頃は、セル、メリンスの需要が著しく多くなり、殆ど一年を通じて、着用されるやうになりましたので、自然お値段なども、競争の形となり、そのために、かなりな粗悪品がありますから、餘程洗濯に注意して、入念に取り扱はねばなりません。その上、前にも一寸申上げましたやうに、毛織物は纖維の性質上、木綿や絹に比べて、大へん洗濯法が喧しいものであります。一例を申しますと、毛織物の洗濯液や濯水は、最初から最後まで、すべて微温湯を用ひるなど、かなり面倒な特別の注意が必要であるのです。

これからいよく洗濯にかゝるのでありますが、セルはともかく、メリンス類の中には、値の安い褪色し易い粗悪品が往々ありますから、洗濯する前に、色止めをしなければなりません。それには、單寧酸茶匙二

杯、濃く煮出した茶汁二合を、一升の湯に入れてもよいのです。醋酸五六滴、リスリン五六滴を、二升の微温湯で溶き、この中に洗濯物を五六分間浸して後、水洗ひをいたします。なほ毛織物には、アルカリ性の強い洗濯剤は、絶対に使用されませんから、まづアンモニア液とか、マルセル石鹼かラックスを用ひます。マルセル石鹼のことは、誰方も御承知のこと、思ひますが、ラックスと申しますのは、絹毛兩用の舶來石鹼で、その形が、丁度雲母を薄く剥がしたやうな、粉石鹼の一種であります。いづれも高級な石鹼でありまして、遊離アルカリの少ないものですから、絹や毛物に用つて安全であります。

前述の石鹼を微温湯三四升に程よく入れ、充分泡立つてきましたら、次にアンモニア六七滴を落し込み、前の下浸けした洗濯物を浸けて、手早く搦み洗ひしながら、よく振り出しますと、汚れが除れますから、直ちに微温湯で何度も濯ぎ、最後に再び色止液を通し、水洗ひして程よく疊み、水気を押し搾つた後、更に乾いた布に包んで、充分水気を吸収させ、風通しのよいところで、短時間に乾します。

**仕上げの仕方と保存法** 毛織物には糊づけの必要はありませんから、前のやうにして布が充分乾きましたら、全體に濕りを與へて、二四頁のアイロン仕上げ法により、布をアイロンで伸します。もし糊氣を保たせたいときは、布海苔糊か、ゼラチン糊を用ひます。また近頃は、メリンスやセル單衣を丸洗ひする場合は多いのですが、これ等は、前のやうにして洗ひ、よく濯いで搾り、糊づけの希望の場合は、濡れたうちにつけ

ます。(乾上げて霧を當て、木綿單衣物の場合と同じやうに、(四七頁参照)一體にアイロンをかけて仕上げます。また着物の裾廻しや帯側などは、アイロンで仕上げても、伸子張りまたは板張りにしてもよいのです。なほ御承知のやうに、毛織物は、大へん害虫のつき易いものですから、充分注意を拂ひ、濕氣のつかぬやうにして、貯藏しておかなければいけません。

## (2) 毛絲編品の洗濯と色揚げ法

**毛絲の色別け方** 毛絲編物は、毛織物などよりも、また一層洗濯に細心の注意がいります。これを心なして洗ひますと、色が褪めたり、編目が伸びたりして、再び使用ができなくなります。そこで毛絲の色を(一)白系統Ⅱ淡紅色、水色、藤色、黄色。(二)赤系統Ⅱ胭脂、海老茶、ローズ、赤。(三)黒系統Ⅱ青、紫、鼠、鐵、紺、黒等に大別して、各に就き洗濯法を申上げることいたします。

**白系統の洗ひ方** まづ最初に、微温湯一升到リスリン五六滴の割合に落した液の中へ、洗濯しようとする編物を浸します。すると、よく水分を吸収しますから、軽く搾つて、微温湯一升到マルセル石鹼またはラックス(以下皆な同じ)を、七匁から十匁溶します。なほ石鹼の質が悪くときには、リスリンを五六滴落します。これで洗濯液の用意ができましたから、前に下浸けのできた編物を浸して洗へばよいわけでありませぬ。

この洗ひ方に就ては、既に御承知のこと、は思ひますが、決して揉んだり擦つたりしてはいけません。液の中に浸したまゝ、両手で掴むやうに、また押しつけるやうにして洗ふのです。なほあまり汚れのひどいものは、もう一度新しい石鹼液と取り替へて洗ひ、後をよく微温湯で濯ぎますが、この場合にも、洗ふときと同じやうに、掴むやうにして、すつかり水が澄むまで濯ぐのです。綺麗になりましたら、最後の濯水に、醋酸とリスリンを落します。その割合は、一升の水に、各四五滴づつです。こゝで一寸申添へたいことは、既に洗ひ損じて、糸が細くなつてゐるものでも、濯水を通せば、幾分糸がふつくりすることあります。濯げましたら、両手で壓へるやうにして水を切り、大タオルに巻き込んで足で踏みつけます。水気を澤山含んだまゝで乾しますと、水の重みで糸が伸びますから、かうして特に水気を除くのです。それで水気さへ充分に切れてゐれば、竿に掛けても大丈夫ですが、この場合編み方によつては、非常に丈に伸びるものと、幅に伸びるものとがありますから、この點をよく考へて、丈の伸びるものは横に掛け、幅の伸びるものは縦に掛けるとうよいのです。またシヨールのやうに丈の長いものは、たとひどんな編み方にしても、長いまゝ掛けると伸びますから、横に掛けるか、竿に二回巻きつけて掛けるやうにしなければいけません。かうしてすつかり乾きましたら、形を整へてきちんと畳み、蒸しにかけます。蒸器は、石油の空甕でもよく、御飯蒸器でもよろしいのですが、湯が細物につかぬやうに、よく注意しな

ければなりません。蒸す時間は、蒸気が上つてから、五六分間で充分です。すると形が正しく、毛糸がふつくりとしてきますが、これを無造作にぐしく洗つたり乾したりしますと、糸がこち／＼に細くなり、形が見苦しく伸びますから、入念に洗濯をしなければなりません。

#### 赤味系統の洗ひ方

色物はアルカリに合ふと褪色する虞がありますから、まづ最初に色止めをしておかねばなりません。それで、前に申しました赤味系統のものは、主に鹽基性染料が用つてありますから、單寧酸または濃い茶汁で色止めをします。次に前の白系統の洗ひ方と同一の順序と方法とで水洗ひをし、最後に、もう一度茶汁を通します。色物のときは、なるべく風通しのよい處で、陰乾しにします。

#### 黒味系統の洗ひ方

この系統の色は、大抵酸性染料が用つてありますから、色止めには醋酸を用ひます。分量は一升の微温湯に醋酸五六滴、リスリン四五滴を落し、材料を浸けて液を通し、ざつと水濯ぎして、すぐ石鹼液で洗ひますが、この中へ、糠一掴み(水一升につき)ほどを入れますと、色が褪せないで、綺麗に洗へます。また、既に色の焦けてゐるものでも、或る程度まで元へ戻ります。髪洗粉(一袋二三錢で賣つてゐるもの)も糠と同じ効果があります。すべて酸性染料で染めたものは、この方法で洗ひますと、褪色することもなく、綺麗に洗へます。

#### 色揚げの仕方

シヨールの色が派手になつたから地味にしたい場合とか、スウェーターの色が焦けたので、

元のやうに色揚げしたいときのために、毛織物の色揚げ法をお話しいたませう。この場合には、まづ最初によく材料を洗つておかねばなりません。しかしこのときには、色止めの必要はありませんから、色物でも白と同じ方法で洗ひます。なほ淡色を濃くしたいとか、たゞ單に、色の褪めたのを元の色にしたいときは、洗濯さへすればよいのですが、もし濃い色を淡くしたいとか、赤を黄にするとか、青にするとかいふやうに、全然異つた色にする場合には、一旦色脱きをしてから染めなくてはなりません。

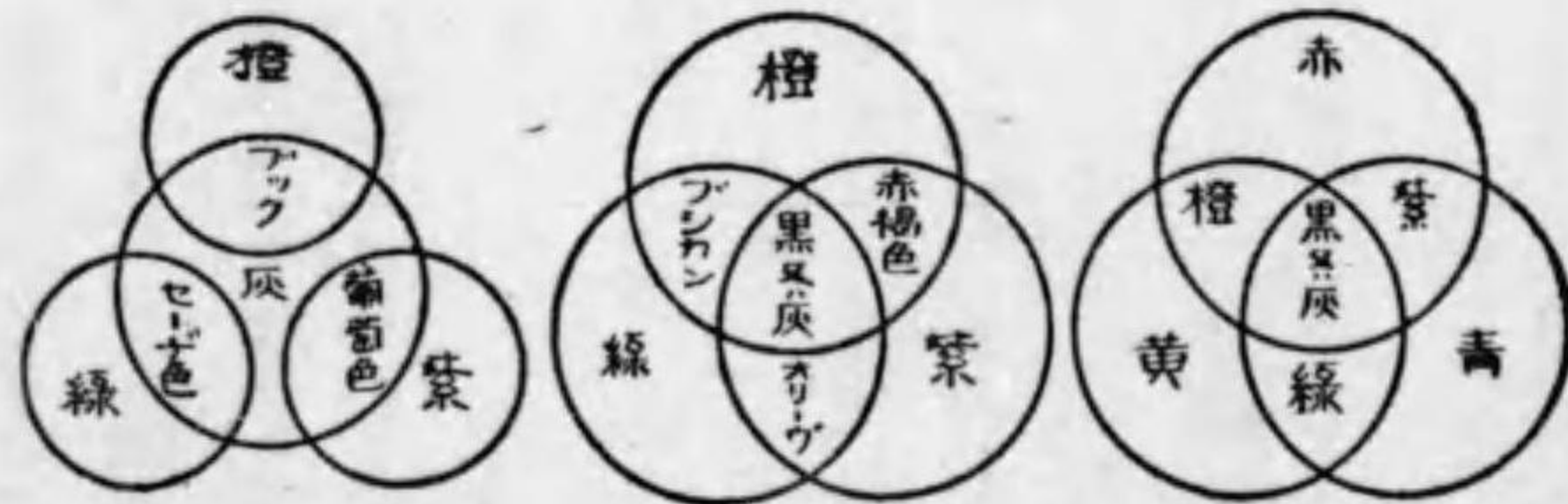
▲色脱きの仕方 毛織一ポンドにつき、水二升か三升を煮立て、そこへ、米糠一合ほど、マルセル石鹼十匁とを入れ、よく溶けたところで洗濯したものを入れ、かき廻しながら十分間煮て、よく水濯ぎします。次にハイドロサルファイト四匁を、二三升の熱湯に入れ、更に十分間煮ます。そして水濯ぎして、醋酸、リスリンの液を通します。大抵のものは、右の方法を一回すれば充分ですが、もし綺麗に落ちぬときは、もう一度ハイドロサルファイトの溶液で煮返します。

▲染め方 二升の湯を入れて火にかけ、染料を加へ、(染料は別の器で、滓のないやうに溶いておく)よくかき混ぜた中に編物を入れ、箸でかき廻しますと、液が煮立つにつれて、次第々々に染料が浸みつきますから、一旦外へ引上げておいて、その液に醋酸七八滴(酢なら盃一杯)を落し、よく混ぜて、再び材料を洗面器に戻し、なほしばらく煮染めします。すると染液が水のやうになりますから、これを引上げてよく風を通し、充分冷めたところで水で濯ぎ、最後に醋酸とリスリンの液を通します。仕上げの仕方は、前の仕上げ法と同じです。なほ、色の出し方は、第六圖「色の混ぜ合せ方」によつて御覽ください。

▲染め方 二升の湯を入れて火にかけ、染料を加へ、(染料は別の器で、滓のないやうに溶いておく)よくかき混ぜた中に編物を入れ、箸でかき廻しますと、液が煮立つにつれて、次第々々に染料が浸みつきますから、一旦外へ引上げておいて、その液に醋酸七八滴(酢なら盃一杯)を落し、よく混ぜて、再び材料を洗面器に戻し、なほしばらく煮染めします。すると染液が水のやうになりますから、これを引上げてよく風を通し、充分冷めたところで水で濯ぎ、最後に醋酸とリスリンの液を通します。仕上げの仕方は、前の仕上げ法と同じです。なほ、色の出し方は、第六圖「色の混ぜ合せ方」によつて御覽ください。

## 六、家庭で出来る簡単なクリーニングの仕方

ドライ・クリーニングと申しますのは、文字通り乾いたまゝ、つまり水に浸けずに洗濯するのではありません。水洗ひの洗濯とは違つて、地質も損みませんし、形もくづれないで綺麗に洗へる、一番完全な洗濯法であります。本式にするには、



方せ合せ混の色 (圖六第)

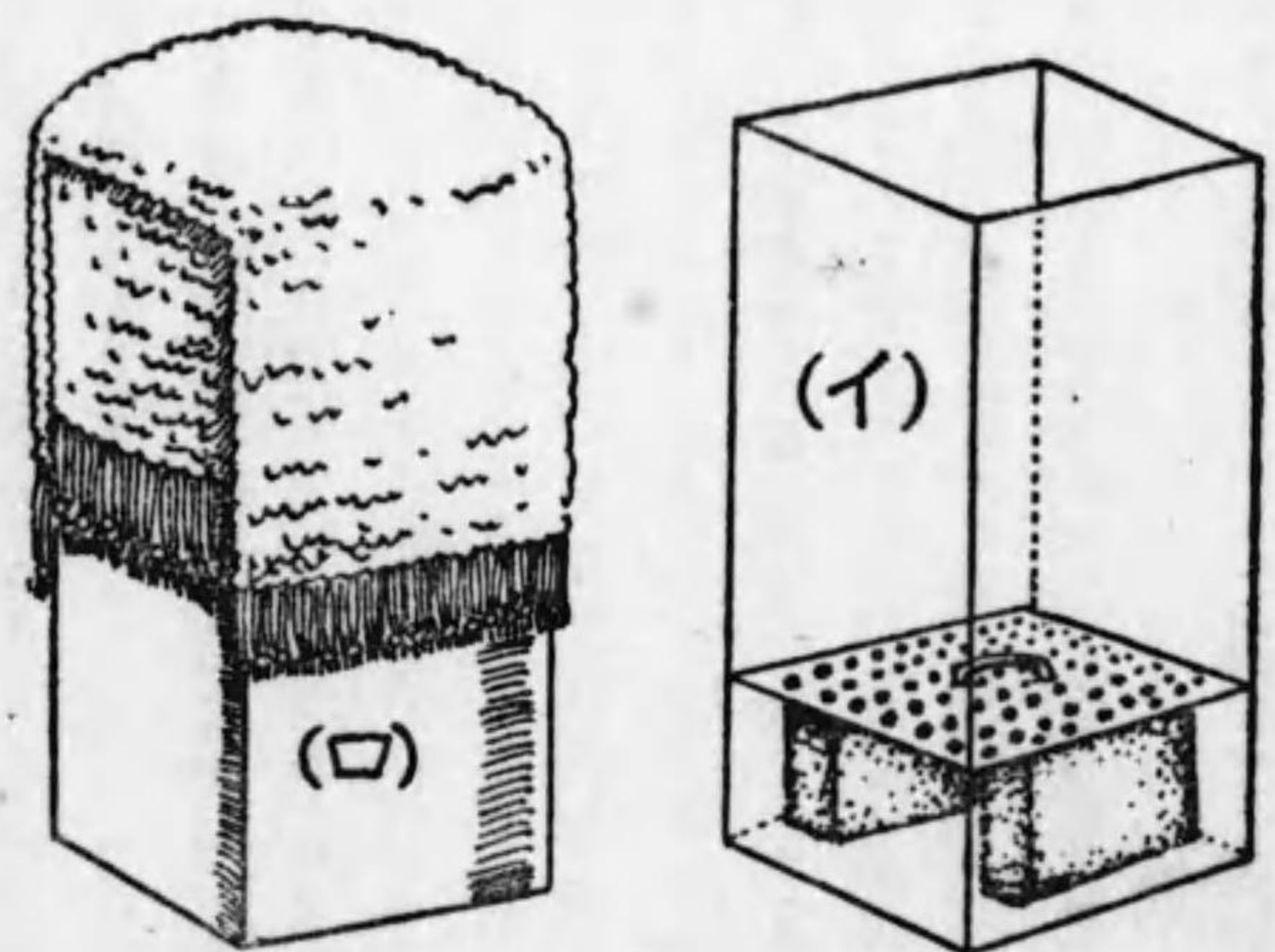
揮發油とベンジンだけを用ひますが、それには相當の設備がなくては、徒らに澤山の揮發油を消費するだけで、それほどの効果はありません。それも半衿とかネクタイくらの小さいものでしたら、家庭でできないこととはありませんが、洋服などになりますと、却て不經濟かと思ひます。それで、これから申し上げます、佛國式の家庭ドライ・クリーニングの仕方ですと、ごく簡單に何の設備もいらす、揮發油で洗つたものと同じやうに綺麗になりますから、是非お試しください。

(1) 石油の空罐で出来る乾燥洗濯法

**蒸器の作り方** まづ器具の用意からいたします。石油の空罐を求めまして、縁きつかりに切り取り、切口を金鋸で叩いて滑かにしておきます。切り取つた蓋の方は、丁度御飯蒸器の中底のやうに、澤山孔をあけます。孔をあけるには、蓋を平な地面において、少し太目の釘を當て、金鋸でとんとんと二三回打ち込みます。と、造作なくあきます。出来上りましたら罐の底に、煉瓦二つを第七圖(イ)のやうに横に立て、おき、その上に孔をあけた蓋を載せます。つまり御飯蒸器と同じものを作るのです。もし煉瓦がなければ何でもかまひませんから、三寸くらの高さに、底が上るものを用ひます。これで蒸器が出来上りましたから、底へ水を入れ、(中底と水との間隔を、一寸くらのあけます)火にか

ます。そしてこれが沸騰する間に、次の割合で薬品の分量を計つて、手近に揃へておき、洗濯物もちやんと傍に出しておきます。

**漂白液の作り方** 使用する薬品は、(一)硼砂茶匙三杯、(二)重曹茶匙二杯、(三)醋酸五六滴、(四)揮發油一盃であります。以上を用意しておき、蒸器の水が充分沸騰しましたら、この薬品を入れるのですが、しかしこれだけのものは、入れる順序を間違へると、全然効果はないのですから、よく注意して頂きます。入れる順序は、ここに記しました通りで、まづ第一に硼砂を、第二に重曹を、次に醋酸を入れ、最後に揮發油を入れるのです。つまりこれだけの薬品が化合して、オレイント瓦斯といふものが出来、蒸氣と一緒に蒸發します。そのオレイント瓦斯によつて、汚れが除れるのでありますから、すべ



器アンニーク用庭家 (圖七第)



ての動作を順序よく手早にしませんと、折角の瓦斯が無駄に蒸發してしまふことになりまますから、薬品は順序よく並べておき、次々と手早く入れ終つて、すぐに洗濯物を入れなくてはなりません。

次に洗濯物を蒸器の中に入れて、上部をタオルの大きいものですつぽりと被ひます。(口圖)は洗濯物を蒸器に入れて、タオルで被つたところでありまます。また、この一度分の洗濯物の量は、男子の冬服でしたら、上衣とズボンと分けて、二回に蒸すのです。(チヨキはズボンと一緒にします)餘り一度に澤山詰め込みますと、蒸氣の通りが悪くなるのです。なほ蒸す時間は、火力の如何によりまますから、何分間とはつきり申上げられませんが、罐の縁が熱くて手がつけられぬくらゐになれば、目的は達しられたのですから、取り出してよろしいのであります。

**仕上げの仕方** 蒸しをかけましたら、次には一層仕上げを完全にするため、更に揮發油を用つて手入れをいたします。まづ洋服を蒸器から取り出し、服全體に刷毛をかけてよく埃を拂ひ落し、次に噴霧器に揮發油を入れて、霧を吹きかけては刷毛をかけて、全體を揮發油で拭き上げ、アイロンをかけて、最後の仕上げをいたします。但しアイロンをかけるに申しましても、水洗ひしたものは違ひ、形は一寸もくづれてゐませんから、簡單で結構であります。

この方法は、單に洋服ばかりでなく、和服にでも、帽子やシヨールのやうなもの、その他羽蒲團や毛布等に

でも、蒸器の中へ容易に入るものでさへあれば、何にでも應用ができるのです。但し色の褪げるものや、縮類のやうに縮む性質のものは、もし湯氣でもかゝるといけませんから、なるべく避けた方が安全です。

なほ洋服の袖裏、ズボンの腰裏などに、白い木綿の布がついてゐる場合は、蒸しにかける前に、マルセル石鹼で洗濯して、よく水濯きしておかねばなりません。これは白の綿織物は、蒸したゞけでは完全に白くならないからです。

**實行上の注意** 以上のやうに、方法としては、實に簡單すぎるくらゐ簡單ですが、なほ注意して頂かねばならぬことは、前にも申しましたやうに、薬品の分量と、入れる順序を間違へぬこと、薬は湯が充分沸騰したところで入れることでありまして、まだ微温い中に入れては效き目がありません。何しろ硼砂を入れ、重曹を入れたところへ、醋酸を入れますと、丁度サイダーの栓を抜いたときのやうに、勢よく沸騰しますから、そこへすぐ揮發油を入れ、手早く中底を嵌めて、洗濯物を入れるといふやうに、迅速に手廻しよくしなければならぬのです。

なほ、薬の效き目は一回だけでですから、續いて蒸すときは、また更に前の通りの分量を加へなくてはなりません。仕上げ拭きは、地質の硬いものは揮發油がよろしいのですが、軟いものには、アンモニアの方がよろしいやうです。アンモニアは、十倍に薄めてお用ひください。揮發油にしるアンモニアにしる、いづれ

も揮發性の強いものですから、一度に澤山霧を吹いては駄目です。少しづつ吹いて、手早く刷毛をかけることが大切です。これで費用はどのくらいかゝるかと思しきと、一回分の薬品が全部で五錢くらゐと、それに炭代を入れたり、仕上げ拭きの揮發油代を加へたりしても、十錢とはかゝらないのであります。

## 七、簡単に出来る人絹の洗濯と色揚げの仕方

最近、人造絹絲(レーヨン)の製法が目覚しく發達して、帯側、着尺地、友禪物を始め、半衿、帯止めの類から、手袋、靴下の類に至るまで、凡そ人絹製品にないものはないくらゐ、廣く應用されてまゐりました。従つて、需要も著しく多くなりましたが、この人絹に對する知識が、まだ一般に普及されてゐないため、地質を損めたり、染色を害したりして、すぐ使用できぬやうにしてしまひます。それでは、結局安物買ひの錢失ひで、不經濟の上もありませんから、人絹をお用ひになる場合には、まづ、その性質や洗濯法を、一通り研究して頂きたいのであります。

### (1) 人絹の性質と洗濯の仕方

#### 人絹の性質

人絹にも、植物性と動物性とがあり、また礦物性もありますが、現在織物に利用されてゐる

のは、殆ど植物性人絹であります。その植物性の中にもまた、ヴィスコース人絹、酸化銅アンモニア人絹、醋酸纖維素人絹などの種類があつて、各特色を持つてゐます。ヴィスコースは、美しい透明の光澤を持ち、洗濯をしても、比較的の光澤を失はぬものですが、質の弱いのが缺點であります。酸化銅アンモニア人絹は、強い上光りのする光澤を持つてゐますが、絲質は比較的丈夫です。醋酸纖維素人絹といふのは、ごく穏かな光澤を持つた、天然絹に最も近いものであります。不正商人はそれをいゝことにして、往々客を瞞着しますが、これ等はいづれも植物性でありますから、絲をほぐして焼いてみると、きな臭い臭ひがするので、すぐ判ります。値段の安いものには、ヴィスコース人絹が多く用ひられ、比較的高價なものには、醋酸纖維素人絹が用ひられてゐます。このやうに、一樣に人絹といはれてゐるものにも、それゝゝ特長あり缺點ありですから、よくその性質を知つて、取り扱はねばなりません。

#### 人絹の洗濯法

以前の人絹は水に濡れると、ぼろ／＼になつたものであります。今もやはり水に對する耐久性は弱いのですが、しかし以前の人絹とは、比較にならぬほど丈夫になりました。人絹は、どうして水に弱いかと申しますと、もと／＼溶解した纖維が、毛細管を通り、アルコールとエーテルの混合液を通過して、始めて絲となつたものですから、水に浸けると膨脹し、弾力を失つて、容易く切れるのであります。けれども、アルコール分を含ましておきさへすれば、どんなに水に濡れても洗濯しても、大丈夫であります。

それで、この學理から、洗濯するときは、必ずアルコールを前もつて通せばよいのでありまして、雨に遇つて光澤を失つたり、地質を弱めたりしたのものにも、アルコールを三倍に薄めて、一面に霧吹きして乾しますと、また光澤も出ますし、丈夫にもなります。雨に遇つた後や、汗を浸ませたときなど、忘れずにこの手當をなさるやう、お勧めいたします。

▲**濃し液** 洗濯いたしますものは、まづ水一升到對し、アルコール 盃半分くらゐ、日本酒ならば五勺くらゐを入れ、その中に目的の洗濯物をしばらく浸しておきます。するとアルコール分は、殆ど人絹に吸収されて、絲質が非常に丈夫になりますから、少々くらゐ揉んでも、引張つても、切れる心配はありません。

▲**洗濯液** さうした後、微温湯一升到、マルセル石鹼茶匙二杯(粉末)、アンモニア水三四滴の洗濯液の中で軽く揉み洗ひします。(揉むといふより、掌の中へ丸め込むやうに)。但し、帯地のやうな厚地のものは、刷毛洗ひにいたします。またシールなどの、總のついたものは、最初に總を糸ですつかり巻き縛りにしておいて、洗はねばなりません。なほ褪色の虞あるもの、赤、黒、紺のやうな濃色のものは、石鹼を少くして、硼砂(茶匙三四杯)かアンモニア(水一升到七八滴)を入れて洗ひます。

▲**濯き液** 洗つたものは、よく水濯ぎして、白及び淡色のものは、酢酸茶匙一杯を湯に溶いて、水一升到薄めた液に通し、最後にまたアルコール液(水一升到 盃半分)に數分間浸し、さつと水濯ぎし、押し搾りに

して乾します。

濃色の場合は、酢酸の代りに、醋酸を用ひます。醋酸の分量は、水一升到六七滴で結構です。最後に同じくアルコール液を通します。また醋酸を用ひぬものは、水濯ぎせず、そのまゝ押し搾りして乾します。なほ赤、臙脂、ローズ等の、赤味系統のものは、酸を通すと黒っぽくなりますから、水濯ぎしたら、すぐアルコール液を通して乾しますが、このアルコール液中に、アンモニア三四滴、テレピン油五六滴を加へます。

▲**仕上げ方** 乾きましたら、薄く霧吹きして、平均に湿りの廻つたところで、温度の低いアイロンで仕上げます。但し、しぼ織のものは、アイロンでなく、湯伸し仕上げにします。

手袋、靴下等も、右の方法で洗ひますと、木綿以上に耐久力があります。

▲**人絹の色揚げ法** このやうに、人絹の洗濯が、家庭で容易くできるやうになりましたから、序に、染色の話をしていませう。よく、シールなどの色揚げに就て御相談を受けますが、薄色のシール、半衿等は、簡単に色揚げができますから、お試しになつて御覽なさいませ。

▲**染め方** 染めにかゝる前に、まづ前の方法によつて綺麗に洗濯いたします。そして直接染料によつて、煮染めにします。

▲**染料** 好みの直接染料を、淡色ならば一升の水に茶匙半杯、中色ならば一杯、濃色ならば二杯を、湯で

よく溶いて加へ、その染液二升に對し、アルコールを盃に一杯、食鹽茶匙三四杯を加へ、洗濯して濡れたまゝの布を入れ、手早くかき廻して、斑なく染液を浸ませ、煮立つてから、凡そ十五分間煮染めします。よく染めついたら、徐々に引上げて日陰の竿に掛け、すつかり冷めるのを待つて、色止液に浸し、よく水濯ぎして乾します。染めるときにも、濯ぐときにも、決して手荒に扱つてはいけません。

▲色止液 水三升に、燒明礬茶匙三杯、アルコール 盃半分くらゐといたします。

## 八、衣類附屬品の手輕な洗濯法

これまで、衣類の洗濯法に就て、一通りの説明を申しましたから、次には、衣類附屬品の洗濯のお話をいたしたいと思ひます。御承知のやうに、衣類附屬品は、その種類が随分多いものであります。洋服の場合のカラー、カフス、ワイシャツ、ネクタイ、手袋、靴下の類とか、帽子、ハンカチーフ、婦人用の洋傘、シール、足袋、下駄の表などは、かなり汚れ易いものでありますから、充分注意を拂つて、いつも清潔なものを用ひたいと思ひます。しかしこれまでは、ワイシャツ、カラー、帽子など、いふものは、家庭では洗濯し難いものやうに思はれ、大方はこれを専門家に依頼されることが、かなり多いやうに見受けられますが、これは大變不經濟なことでありますから、これからは、なるべく手輕に家庭で洗濯したいものであります。

### (1) カラー、カフスの簡単な洗濯法

#### 洗濯の仕方と糊のつけ方

この洗濯法は、前の白地木綿と同じ方法でよいのですが、カラー、カフスは、糊でかんくに固めてありますから、しばらくこれを曹達液に浸して、糊氣をすつかり採み落し、粉末石鹼を入れて、煮洗ひにするなり、洗濯板の上に並べて刷毛洗ひをしますと、汚れが綺麗に落ちます。なほ折山などの、特に汚れのひどいところは、特別に石鹼をつけ、丁寧に洗はねばなりません。かうして汚れが落ちましたら、水でよく濯ぎ、もしカラーの折山やカフス口などが、汗や垢のために、黄ばんでゐる場合は、漂白粉、またはホワイト・ローズ(二八頁参照)を用つて漂白しますが、それでも除れぬ汚斑は、ホワイト・ローズをどろどろに溶き、筆につけて、汚斑の上からすうと引き、直ちに水洗ひして、極く薄い醋酸液に浸け、再び水洗ひをして、糊をつけるのです。

糊は、ソフトならば生熟でもコンスターチでもよろしいのですが、固いカラーだと、生糊を用ふのですから、この方法が素人には一寸難しいのです。家庭用には、便利なカラー糊を用ひますと、糊づけの面倒がなく、誰方にも容易く、カラーの糊づけができます。そこで、このカラー糊茶匙五杯分ほどを、一合の水でよく溶き仰し、この量ならば七本乃至十本くらゐつきまます。前に水氣を搾つておいた材料を入れて、徐々に

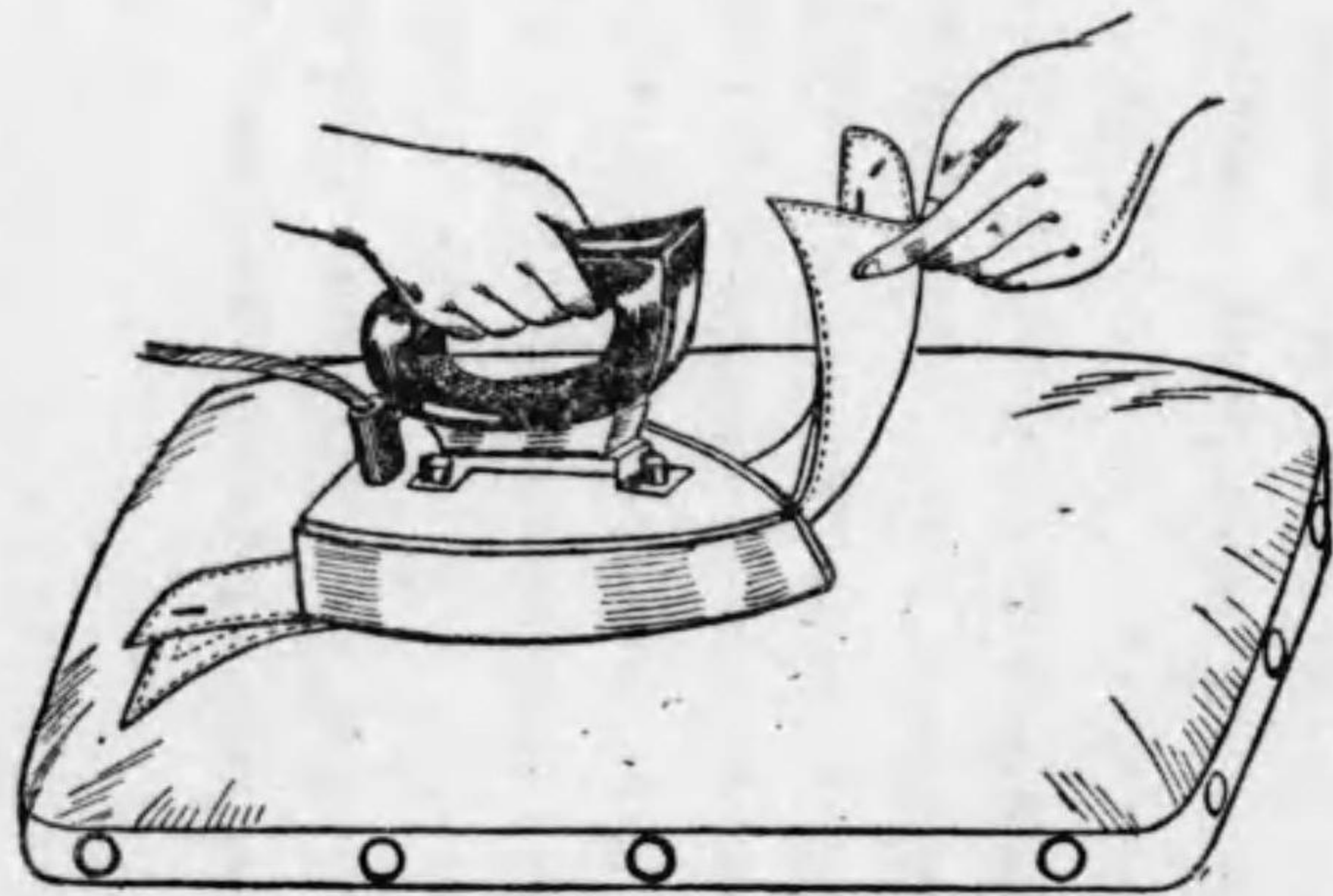
両手で揉みながら、布の心まで充分糊を浸み込ませます。何しろカラーやカフスは、布が幾枚も重つてゐるものですから、たゞ押へたくらゐるでは、とても心まで糊が浸み込みません。そのためにどんなに苦心しても、びんと固く仕上げができません。丁寧に糊をつけなければいけません。さて糊づけができましたら、固く水気を搾つて指でよく押し、濡手拭で表面についた糊滓を拭き除り、乾いた白布に包んで、水気を吸収させ、直ちに仕上げをするのであります。

#### カラー、カフスの仕上げ法

まづ手でよく伸して大體の形を整へ、アイロン蒲團(毛布四枚重ねくらゐ)の上におき、裏面から皺のよらぬやうに、平にアイロンをかけます。裏が大體乾きましたら、次は表からかけ、また裏返して、こんどは心まで充分乾くやうにかけ、最後に表から丁寧に平にかけます。これでも充分固くはなりますが、仕上げを美しくするために、水五勺、コンスターチ茶匙一杯の割で煮上げた糊に、白蠟少々、テレピン油または白色ワセリンを少々入れたものを、齒楊枝で表面に平に引き、固く搾つた手拭で糊滓をよく拭き除り、糊が乾き加減になつたところで、アイロンに力を入れ、(腰を少し浮し、尖の方をカラーに當てます。)きゆつくと手早く擦つて、艶を出すのです。

専門家は、この仕上げの艶出しに、特別な艶出しアイロンを使ひますが、それには及びません。もし普通のアイロンで、充分艶の出ない場合は、瀬戸物か硝子の、圓い滑かなもので擦れば、美しい艶が出ます。

これでもう仕上げはよいのですが、このまゝではびつたりと平になつて、カラーの形がつきませんから、最後に丸味つけのアイロンをかけます。シングル・カラーならば、裏の方を濡手拭で一丈拭いて、湿氣をつけ、ダブル・カラーならば、毛筆に水をつけて、折目のところに、裏からすうと筋を引き、そこだけを軟くして、表から二重に折り、なほ裏側(カラーの内側になる方)を濡手拭で一丈拭き、共に裏を上にして、折目を手前に向け、第八圖のやうに圓く形をつけながら、折目きつかりに、びつたりとアイロンをかけます。(カフスも同様に)尤もソフト・カラーならば、糊もごく薄くし、普通にアイロンをかければよいのです。カフスは、カラーと同じ要領で、糊づけや仕上げをいたします。



方けの鍔げ上仕—ラカ (圖八第)

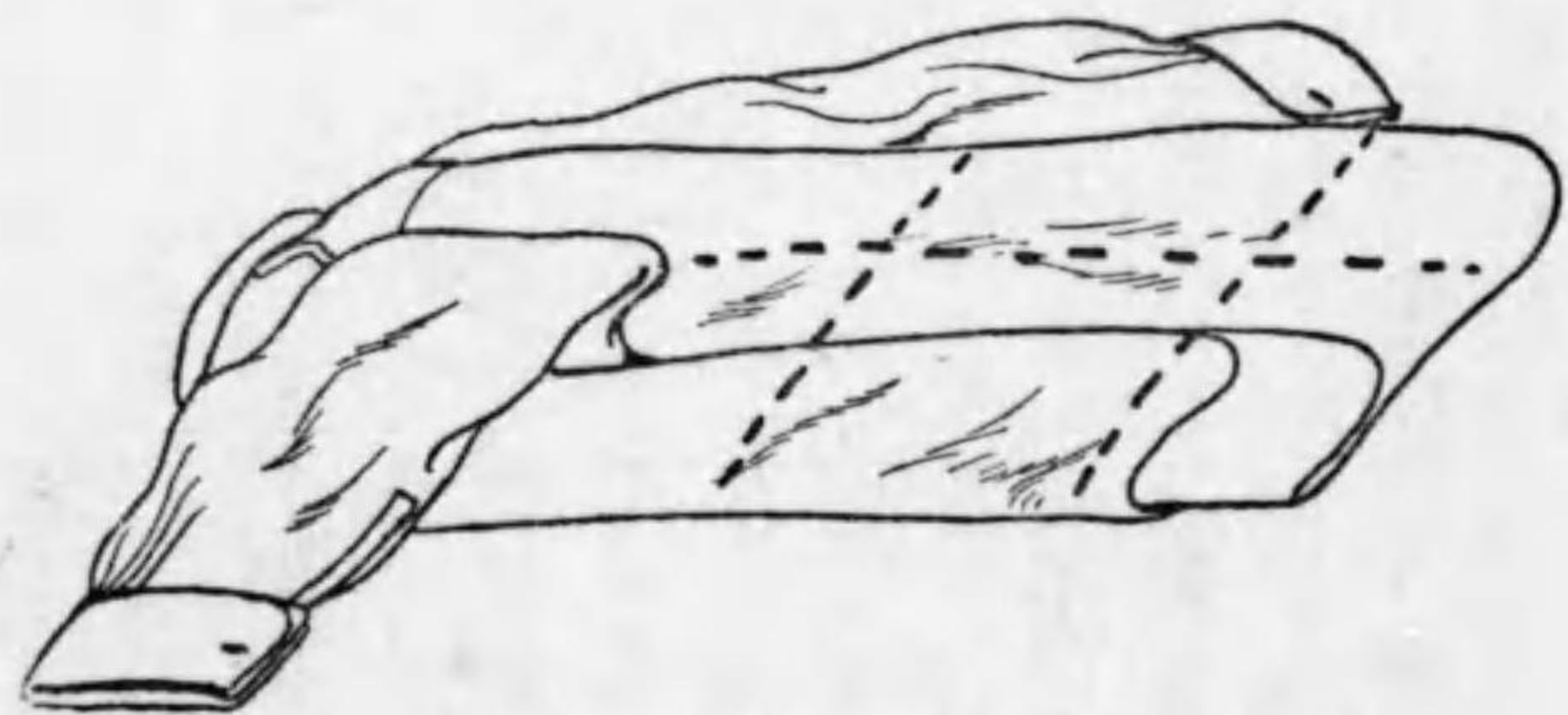
## (2) ワイシャツの上手な洗ひ方

**布地による洗ひ方** ワイシャツの布地には、随分いろいろのものが使用されてをりますから、洗ひ方もそれぞれ布地の種類により、適当な方法を取らねばなりません。まづ地質がキャラコ、縮、ポイル、麻などのやうに、植物性繊維の場合は、前のカラーと同じやうに、二五頁白地木綿の洗濯法によつて洗ひ、洒しておきます。しかしこれは白地のものに限るので、綿物色物は後で洒しては、折角の色や縞がなくなりますから、その代りに、カフス、衿などの汚斑は、蓼酸茶匙一杯を湯一合で溶き、この液をつけておきます。そこで汚れが充分落ちましたら、よく水洗ひをして、コンスターチの薄糊をつけ、なほ衿やカフスはや、固くしますから、更にそこだけを撮んで、薄目に溶いたカラー糊をつけ、半乾きにしてアイロンをかけるのです。

富士絹のワイシャツは、洗ふ前に、湯二合につき、白砂糖茶匙二三杯の割合に溶いた液に、五六分間浸し、次に微温湯二升につき、マルセルまたはラックス石鹼茶匙五六杯の液で、軽く揉み洗ひして、よく水濯きをし、最後に湯二升に醋酸五六滴、サルチル酸茶匙一杯を入れた液に、数分間浸し、押し搾りにして乾します。なほ衿やカフスなどの黄色く汗じみたところは、前の蓼酸液か酒石酸茶匙一杯を五勺の熱湯に溶いて、筆のやうなもので引き、数分の後水濯きいたします。糊は、木綿のときよりすつと薄くします。

また白絹のシャツは、二三頁絹物の洗濯と漂白法により、洗濯をよく濯ぎ、富士絹と同じやうに、極く薄い糊をつけます。この他、本ネル、白地セルのワイシャツは、これも三四頁毛織物の洗濯と漂白法によつて、洗濯いたしますが、この場合には、糊づけの必要はありません。

**仕上げアイロンのかけ方** 糊が半乾きになりましたら取り入れて、アイロンをかけるとよいのですが、若し乾き、つてあるときは、霧吹きをして全体に湿りを保たせ、その上でアイロンをかけます。この順序は、まづ裏を外にして背幅を二つに折り、左右の後身頃をよく伸し、次に表返しにして、(後身を外に) 両袖を自然に合せ、衿附を手前に、袖口先を右手に取つておき、まづ、左袖の外側、右袖の内側を伸して、袖口先を、左手に向け返し、こんどは右袖の外側、左袖の内側を綺麗に伸します。すると袖が順々に伸びますから、次に前のカラーの要領で、カフスの外側に饅を當て、なほ内側をよく伸し、(カフスの



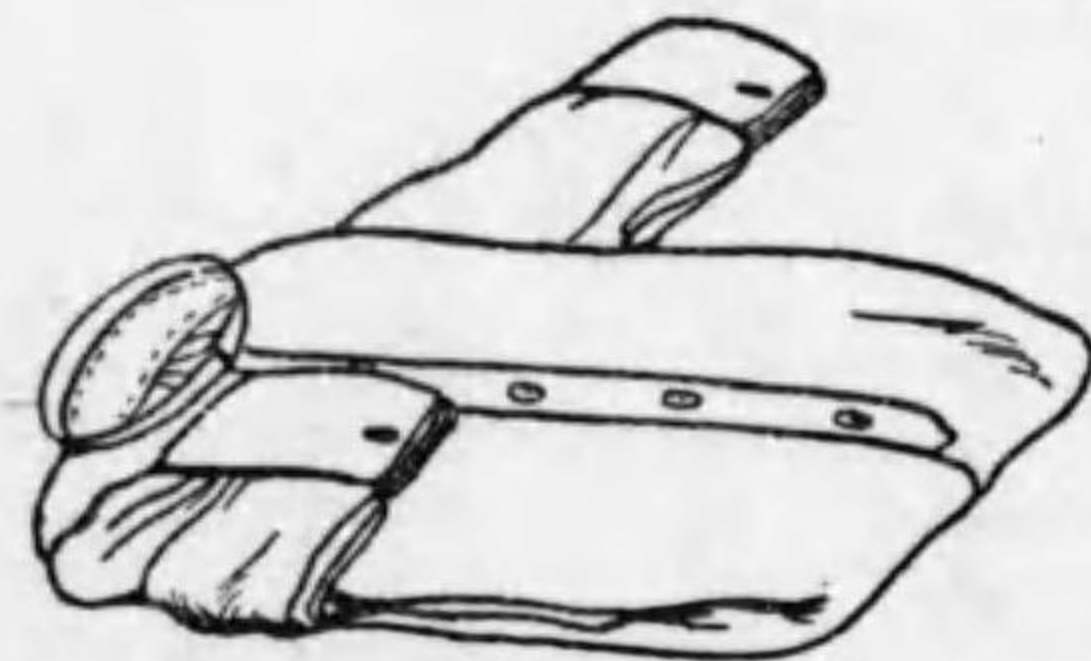
(1) 方み疊のツァシイワ (圖九第)

表になる方)二つ折にするのです。かうして、左右のカフスが綺麗になりましたら、胸を二つに折り合せ、(表を外に折ります。)左右の持出しと見返しを伸し、衿を揃けて、まづ表側に釦を當て、衿裏を伸します。次に、肩當の部を裏側から伸し、そのまゝ、前身と後身を重ねて揃げ、(後幅の廣いのは中央で縫を作ります。)胸のボタンを掛けて、前身全體に釦をかけるのです。

すると、何の造作もなく、手順よく釦がかかりますから、そこで、後身頃を上におき返して、片身頃を半分づゝ中央に向けて折り畳み、袖はカフスだけを身頃の外に出し、同じく掛け合せに後身の上に折り畳みます。次に丈を適宜に三つに畳み、前身を上になるやうにおき換へて、左右のカフスを、前身の胸の上に折りますと、衿も綺麗に外に出て、大へん綺麗に畳めます。

### (3) ネクタイ、手袋類の洗ひ方

**ネクタイの洗ひ方** ネクタイは、一つものを毎日用ひぬやうに、二三本かけ替を用意しておき、一日二日交代に用ひますと、汚れ方も少く、皺もよく伸びますから、長く役立たせることができます。御承知の



(2)方み疊のツァシイヲ(圖十第)

やうに、ネクタイには、織物製や編物製など種々のものがあり、最近には、非常に人絹物が流行してをりますが、この洗濯法は、まづネクタイの中央に紐を掛け、形のくづれぬやうに準備しておき、人絹物ならば、六〇頁人絹洗濯法によつて、洗ふとよいのです。また絹地、絹子地のものは、白色及び薄色の場合には、微温湯五合、マルセル石鹼末茶匙三杯の中に浸し、刷毛洗ひをして、水五合、酒石酸茶匙一杯の中に入れ、浸し、再び水洗ひしてよく押し搾り、乾いた布に包んで水氣を除き、乾してアイロンをかけます。なほ頸の部分に特に汚れてゐるときは、蓆酸茶匙半杯を、五勺の湯で溶いて塗り、直ちに水洗ひします。次に濃色のものは、水一升につき、アンモニア水七八滴または硼砂茶匙二杯を入れた液で洗ひ、水一升、醋酸七八滴に浸けて水で洗ひ、乾して仕上げます。この他蝶形ネクタイで、結附になつてゐるものは、水洗ひできませんから、揮發油一合、アンモニア一勺の割合のものを、刷毛につけて軽く擦り、そのまゝ乾します。

**手袋類の洗ひ方** 手袋にも、木綿メリヤス、絹メリヤス、毛絲編、人絹、革製など、いろいろ變つた種類のものがありますから、それごと洗濯法を選ばねばなりません。

絹メリヤスは前の絹地、絹子地ネクタイと同様に洗濯します。次に毛絲編は四八頁の毛絲編物の洗ひ方により、人絹は六〇頁の人絹洗濯法によつて、洗濯すればよいので、木綿物は、これも四三頁を参照の上お洗ひくださいませ。

最後に革製手袋の洗ひ方は、まづ水一升にマルセル石鹼末茶匙二杯、アンモニア四五滴の割合の液に浸け、刷毛洗ひまたは揉み洗ひをいたします。次にこれをよく水で洗ひ、米の漸汁の最も濃いもの五合につき、アルコール茶匙一杯、テレピン油茶匙一杯、亞麻仁油三四滴の液を作り、よくかき廻して、この中に十二三分間浸けておき、軽く搾つて乾いた白布に包み、充分水氣を除つて乾すとよいのです。

以上のやうにして洗濯が済みしたら、手に嵌めて、數回指を屈伸させ、大體の形を整へて日陰で乾し、生乾きのときに取り入れて、よく揉みほぐし、柔かにするのです。なほ革の艶出し法は、酢、アルコール、テレピン油、亞麻仁油を、各盃一杯づつ、混ぜ合せ、これを刷毛につけて、前の軟くした革手袋につけ、軟い布で摩擦するとよいのです。

#### (4) 半衿、シヨール類の洗ひ方

**半衿類の乾燥洗濯法** 乾燥洗濯といふのは、前に詳しく申しましたやうに、水を用ひず、揮發油やベンジンで洗濯する方法でありまして、形をくづさぬこと、色の褪めぬこと、手早に洗ひ得ることなどの、種々の特長がありますが、たゞ費用の多くかゝる點で、大きいものゝ洗濯は、不經濟になります。半衿、手柄、帶止めなどは、この方法で洗ふとよいのです。しかし、揮發油を綿などに浸まして布を摩擦し、以て汚れを

除ることは、生地を悪くし、色の褪める虞があつて、しかも垢や塵埃は布裏に廻るばかりですから、この方法は感心できません。それにはまづ、口の廣い塚を二箇用意して、各揮發油かベンジンを程よく入れておき、半衿(白粉や油の汚染には、オレーフ油を塗る。)や手柄を一つの塚に入れて、かたく栓をしめ、塚と共に振ります。すると垢や塵埃が出て、液が汚れますから、中の材料を取り出し、これを兩手に持つて、丸め込むやうにして軽く揉み、再び二つ目の新しい揮發油の塚に入れて、もう一度洗つて引上げ、よく振ります。この揮發油のある中に、アルコールを振りますと、揮發油の氣及び脂肪分が除れますから、そこで乾いた布で挟み、よく叩きつけ、風通しのよいところで乾します。半衿は、これを輪に縫ひ、棒を二本通して、兩方から張り、湯伸し仕上げをします。

なほ白地、水色、薄藤色のやうな薄色物は、矢張り水を使つて石鹼で洗ふ方がよいのです。

**シヨール類の洗濯法** シヨールにも、随分いろいろ種類のものがありますから、それ々々地質の區別をして、適當な方法で、洗濯しなければいけません。例へば人絹物の場合は、前の人絹物洗濯法を應用し、毛絲編品は毛絲編洗濯法により、毛織物にも、同じくこの方法を應用します。なほ薄色絹物ならば、三二頁絹物の洗濯法を應用するといふやうに、これまでの洗濯法を利用されるとよいのです。また近頃よく流行する天鰯絨、モヘーヤなどのシヨールの場合は、前のやうに水洗ひしてもよいのですが、



これは五五頁の、家庭でできる乾燥洗濯をするといひのです。以上は、すべて、汚れのひどくならぬうちに、洗ふことが何より必要であります。

### (5) 汚れ易い夏帽子の簡単な洗濯法

#### 麥藁帽子の洗ひ方

まづ刷毛で、よく塵埃を拂ひます。リボンは、大抵はそのまゝでかまひませんが、もし色の落ちる虞のあるものは、最初に外しておきます。そして、水五合、洗濯曹達茶匙三四杯、またはアンモニア五六滴の洗ひ液を作り、これを齒楊枝に含ませ、リボンにつけぬやうにして、帽子全體を軽く洗ひます。すると見る／＼黄色くなりますが、別に差支ありません。たゞ汚れが落ちればよいのです。

洗へましたら、刷毛で手早く水濯ぎいたします。このときリボンも洗ふのです。次に亞硫酸を五倍の水に薄めて、リボンにつけぬやうに、齒楊枝で刷きつけ、次に白性(どろりとするくらゐに溶き)または、蓴酸茶匙一杯、水一合、アルコール四五滴の混合液を刷きつけ、直ちに水濯ぎをします。これは手早く、丁寧にしなければいけません。そこで帽子を振つてよく水を切り、リボンは乾いた布を當て、水氣をできるだけ吸ひ取つた上で、日光に當て、乾します。

なほこれに、少し青味をつけますと、更に新品らしくなります。但し、それには洗ひ上げてしまつてはい

けません。今申上げた曹達で洗つた後の亞硫酸を刷かないで、水濯ぎしたら、すぐ蓴酸液を刷き、そのまゝ青味をつけるのです。青味は、直接染料の青竹を、極く少し布に包んで、一合ほどの水に溶き、白い布を浸けて色加減を見るのです。これは青味づけですから、ほんの淡くてよいので、濃くては後で取返しがつきません。丁度よい色になったら、その中へ亞硫酸を少し落して、かき廻します。すると青味がすっかりなくなつて、水が綺麗に澄んできますから、帽子のリボンにつけぬやうに、斑なくこの液を刷きつけ、よく水濯ぎして乾しますと、空氣中の酸素が作用して、帽子に綺麗な青味が出るのです。

これで、すっかり古帽子が若返りました。お洗ひになるとき、注意して頂きたいのは、水を心へしみ込ませないやう、手早くすることです。御承知のやうに麥藁帽子は、糊で固めてありますので、ぐづ／＼してゐると、水のために形を悪くする虞があります。よく水を切つて乾すのも、つまりそのためです。よく大道で、帽子の洗濯をしてゐるのを見受けますが、あれは多く最初過濃儉加里を塗り、赤くなつたところに亞硫酸水を塗り、酸化漂白の方法によるものであります。一時的には綺麗になりますが、すぐに赤くなり、質をも損めます。

#### バナマ帽子の洗ひ方

バナマ帽には、本バナマと、臺灣で出来る臺灣バナマと、いま一つ雁皮紙で作つた東洋バナマといふのがあります。そのうち東洋バナマが値段の安い關係から、一般的に用ひられてゐるやう

です。洗ひ方は、本バナマと臺灣バナマとは同じですが、後の東洋バナマは、全然違ふのでありますから、まづ東洋バナマの洗ひ方から、お話ししたいと思ひます。

▲東洋バナマの洗ひ方  
リボンを外して、水一升、マルセル石鹼末茶匙四五杯の割合の洗濯液で、手早く刷毛洗ひいたします。次によく水濯ぎして、ホワイト・ローズをどろりとするくらゐの濃さに溶き、滑皮を除いた全部に塗つて、五六分間そのまゝにおきます。次にそれをよく水濯ぎして、水一升到醋酸四五滴の仕上げ液を全體に刷きます。次に糊づけをするのです。この糊は、コンスターチ茶匙一杯、熱湯一合、テレピン油七八滴の割合で作ります。コンスターチは、片栗粉と同じで、熱湯を注ぎながら、かき廻すと透明になります。から、この糊を、刷毛で斑なく引き、日光に當て、乾します。

乾いたら、帽臺に被せ、帽臺がないときは括り枕でもよろしい。濡手拭を當て、アイロンをかけ、形を整へます。滑皮の汚れは、まづテレピン油で拭き、その後を揮發油で拭きます。リボンは、取り外す前に、よくその恰好を見ておき、汚れてゐたら、水一升につきアンモニア四五滴の割合の液で、徐々に洗ひ、水濯ぎして乾します。乾いたらアイロンをかけ、元通りに帽子に綴ちつけます。

▲本バナマと臺灣バナマ  
リボンを外して、水一升、アンモニア水七八滴の液で、前のやうにして洗ひ、水濯ぎして、白色、または萋酸茶匙一杯、湯一合の液を引いて、漂白します。更に一層、漂白を完全にする

には、亞硫酸を二倍くらゐに薄めたものを引きます。

次に、よく水濯ぎして糊づけをいたしますが、この糊は、ゼラチン一枚、水二合、テレピン油四五滴の割合にします。作り方は、ゼラチンを水二合で煮溶し、その中へテレピン油を落すのです。仕上げは東洋バナマと同様です。

### (6) 洋傘の上手な洗ひ方

洋傘の手入れと洗ひ方  
洋傘を、いつも綺麗に、保ちよくするには、使用後微温湯一升到、リスリン四五滴の液を刷毛につけて、傘の表から斑なく刷きつけ、水をかけて濯ぎ、水氣を振り切つて、よく乾した上で藏ひます。毎日使用する方でしたら、一週一度づつでも、かうして洗つておきますと、折目が擦り切れたり、汚斑になつたりする心配がなく、傘の壽命を著しく長くいたします。次に洗ひ方は、色により、また地質によつて異ひます。

▲白麻洋傘  
傘を擱げたまゝで、石鹼液を刷毛につけて、上から下へと、さつくと擦り洗ひします。なほ折目のところは、裏に手を當て、やゝ強く洗ひ、充分汚れが落ちましたら、上から水をざあくかけて濯ぎます。漂白の必要のあるものは、ホワイト・ローズ茶匙三杯、水二合の液を塗り、五分間の後、水濯ぎいた

します。もし鐵錆などがありますなら、舊酸茶匙一杯を、五勺の湯で溶いたものを塗っておきますと、綺麗に除れますから、再びよく水洗ひして、開いたまゝで乾します。

▲富士絹洋傘 折目の汚れへ、アンモニアの薄めたものを塗っておき、次に白砂糖茶匙二三杯を湯二合で溶き、これを傘全體に刷いてそのまゝ五分間くらゐおき、次にマルセル石鹼末茶匙四杯、微温湯一升の液を作つて、前同様に洗つて水濯ぎし、醋酸五六滴、水一升の液を引き、再び水濯ぎして乾します。なほ汚れのひどいものは、酸液を通す前に、亜硫酸を二倍に薄めて塗りますが、但しこれは白無地物に限ります。

▲絹張洋傘 これは色によつて、區別しなくてはなりません。で、(一)を白及び淡紅色、クリーム等の淡色、(二)を黒、紺、鐵、青等の黒味系統、(三)を赤、臘脂、海老茶等の赤系統と、この三種に分けて、お話し申上げませう。

(一)は湯一升、硼砂茶匙三四杯の液を引き、數分後マルセル石鹼茶匙四杯、微温湯二升の液で洗ひ、水濯ぎします。そして白ならば、舊酸茶匙一杯、湯四合、淡色ならば、酒石酸茶匙一杯、湯四合の液を引いて水濯ぎします。

(二)は最初に、グリセリン四五滴、微温湯一升の液を引き、(刺繡などのある場合は、そのところだけ揮發油を塗つておく)次に、アンモニア水七八滴、水一升の液で洗ひ、折目などの汚れのひどい部分には、やゝ

濃くした液をつけます。また刺繡の部分は、石鹼水をつけて、軽く刷毛で洗ひ、よく水濯ぎして、醋酸七八滴、湯五合の液を、熱い中に引きます。

(三)はアンモニア水七八滴、水一升の液で洗ひますが、この系統は色が落ち易いのですから、できるだけ手早く洗はねばなりません。刺繡やレースの飾りなどのついたものは、最初に飾りの部分に、テレピン油を塗つておき、その部分だけを後で洗ひますと、傘の色が飾りに移りません。すべて色物は手早くしなければいけません。

水濯ぎして次に、醋酸四五滴、單寧酸茶匙一杯、水一升の割合の色止液を引き、よく水を振り切つて、なほ飾りのところは、特に乾いた布で、充分水氣を吸ひ取つて乾します。

## (7) 下駄並びに草履の洗ひ方

### 下駄の洗ひ方

下駄や草履は、下に履くもので、汚れるのは當然であります。しかしそれだけに、また汚れたのは氣味の悪いもので、人が見ても不快なものです。かういふものも、少しまめに手を働かせれば、いつも綺麗で氣持のいゝものが履かれます。それには日頃の手入れが何より必要であります。汚れのひどいものは、次のやうにしてお洗ひになるとよいのです。

足の脂がついて汚れたものは、まづ最初にアンモニアを十倍くらゐに薄めた液で洗ひます。洗ふには齒楊枝を用ひ、必ず表の目なりに擦らねばなりません。たゞ塵や埃で汚れたものならば、曹達液で洗つて、次に白性または萘酸茶匙一杯、湯五勺の溶液を、齒楊枝につけて、鼻緒につけぬやうにしながら、表の目なりに擦り、綺麗になりましたら、乾いた布で水氣をよく拭き、硝子塚の丸い滑かなところで、表を目なりに擦ります。もし表が擦れてざら々になつてゐる場合は、アセトン一勺、セルロイド五分の溶液を塗りますと、平になつて、しかも美しい光澤が出ます。普通はゼラチン一枚、湯五勺の溶液を塗ります。

また臺の方は、萘酸茶匙一杯、湯一合、テレピン油三四滴の溶液で洗ひ、水氣を拭き除つて、テレピン油を布につけてよく擦ります。なほこの上に、砥の粉をつけて、擦ると、申分ない新品となります。

表のない、桐下駄のやうなものは、今の臺と同じ方法で洗つて、仕上げをいたします。また足の脂が、ひどくついてゐる場合は、前のやうにアンモニアを十倍に薄めた液で洗ひます。なほフェルトの草履も、下駄の表と同じやうに洗ひます。

この他、襪や藤椅子の汚れなども、この下駄表と同じ方法で、綺麗になりますから、その上で、麥藁帽子の青味づけの方法で、青味をつけますと、感じのよい、青畳とすることが出来ます。

### (8) 靴下及び足袋の洗ひ方

**靴下の洗ひ方** 靴下、足袋の洗濯法は、誰にも判つてゐるやうで、案外投げやりにされるものです。よくお家庭で靴下の洗濯をされる場合、汚れたまゝのものを他のものと一緒の水に浸け、最後に靴下を洗はれるやうですが、このやうに長く水に浸けては地質を損め、却て垢が落ち難くなるものであります。また靴下は洗はずにおきますと、足から出る脂肪分と鹽分とが結合して、非常に布地を損めますから、度々洗濯しなければなりません。これは靴下を、永く保たせる上に、大切な心得であります。

まづ水一升到、食鹽を茶匙二杯入れ、(脂肪分の凝固するのを防ぐのです。)洗濯する靴下の布地により、白地木綿物ならば、石鹼で洗ひ、色物は、曹達液で洗ひます。人絹及び絹物は、それら前述の洗濯法で洗ひますが、木綿と同じく、洗濯液中に、食鹽またはアンモニアを入れることを忘れてはなりません。充分綺麗になりましたら、よく水洗ひをして搾り、充分乾して後霧を吹いて、新しいときと同じやうに、中央から二つ折にして、丁寧に伸ばします。この頃靴下伸張器といふものが出来てゐますが、これを靴下の中に入れて乾しますと、形もくづれず、皺がよく伸びて、早く乾きます。

**足袋の洗ひ方** 白足袋の洗ひ方は、二五頁白地木綿の洗濯法を参照ください。足袋は、龜の子だはしの古

くなつたもので洗ふと、容易に汚れが落ちます。なほ紺キヤラコ、紺木綿足袋は、色が褪せますから、足袋底と裏だけを石鹼で洗ひ、表はた、曹達液で洗ひ、よく濯いで乾し、白足袋と同様に鍍をかけて仕上げをいたしますが、表だけは、何か布を一枚當て、その上からかけねばなりません。またコール天、絹天、縞子などは、最初に水五合、單寧酸茶匙一杯、燒明礬同じく半杯の中に浸して、色止めをした後、紺足袋と同じ方法で洗ひます。しかし仕上げは、縞子だけに鍍をかけますが、コール天、絹天は、濡れたうちに充分手で伸し、別に鍍をかけません。これは毛並が潰れるからであります。

## 九、上手に出来る汚斑脱きの秘訣

### (1) 汚斑脱きに就ての一般心得

- 新しい汚斑と古い汚斑の區別** 汚斑の種類は、千差萬別であります。これを大別しますと、
- (一) 汚斑の性質が明かで、まだ附着して時日の経過せぬもの。
  - (二) 汚斑の性質は明かであるが、附着して時日の経過したもの。
  - (三) 汚斑の性質は不明でも、附着して時日の経過せぬもの。

(四) 汚斑の性質が不明な上に、附着して時日の経過したもの。

等の四通りになります。このうち、性質の明かな汚斑と申しますのは、汚斑の原因が、明かに判つてゐるもの、稱で、日常私どもの觸れ易いものでは、茶、珈琲、果實汁、砂糖、酒、醬油、酸、油、脂肪、ペンキ、樹脂、コールタール、染料、インキ、墨汁、尿水、血液、鐵銹、泥、汗、微など、その種類が極めて多いのであります。また性質不明のものは、汚斑の原因の明かでないもの、ことあります。次に汚斑の新旧の區別は、一ヶ月経過を標準にして、一ヶ月以内の汚斑を新しいもの、一ヶ月以上経過のものを、古い汚斑といふやうに、假りに定めておきます。

**汚斑脱きは一刻も早く** すべて汚斑は何の汚斑によらず、一刻も早く手當をいたしませんと、時間の経過するほど、脱き難くなるものであります。これは、汚斑脱き法の、最も大切な心得でありまして、前の例で申しますと、二より一が易く、四より三が脱き易い理由であります。何しろ汚斑は新しいうちならば、必ず脱けるのですが、それをそのままに抛つておくために、後ではどうすることもできなくなる實例が、決して少なくないので、汚斑ができた場合には、一刻も早く脱くやうにしなければなりません。また同時に大切なのは、その汚斑の種類を鑑別することでありまして、その種類により、適當な方法さへ施しますと、容易に除くことができるのであります。例へば車の油が附着した場合には、それは、油と鐵と塵埃の混合した

ものですから、まづ油の汚斑脱きをした上に、塵埃を除き、次に鐵分の汚斑脱きをするといわけ、また燻燥の煮汁がついたときには、砂糖、醬油、脂肪などの汚斑脱きを應用すればよいのです。

**汚斑脱きの練習法** これから順を追つて、學理と實驗から研究された、汚斑脱き法を、精細に説明いたしますから、その方法を會得されましたら、誰方にも汚斑脱きができるのですが、元來この汚斑脱きとか染物とかいふものは、一種の技術ものでありまして、たゞその方法を知つただけでは、實際の役には立ちませんから、幾度もく經驗をつまれば、かうすればかうなるといふ結果を、充分研究しておくことが、何より肝要なことです。それには、絹または木綿の布に、種々の汚斑をつけておき、暇の時に、これを脱き除る練習をしておきますと、汚斑脱きに就ての自信がきますから、衣類に汚斑のできた場合には狼狽せず、手際よく除ることができます。

次に汚斑脱きには是非必要な、汚斑脱き道具に就て申上げませう。それには、まづ當板といふ、厚さ五六分、で五六寸角の板を用意します。これを、白木綿で二重か三重に包み、汚斑の附着した衣類なり布の下に當て、(汚斑が真中になるやうにします。)この板の上で、汚斑を脱くのです。次には、汚斑脱用刷毛といふ、人の頭髮で製へた刷毛を用意しておきます。これは、種々の藥液を浸して、汚斑の上を濡したり、叩いたりするに必要なものでありますが、もし新しい刷毛を始めて使ふ場合には、刷毛の毛を熱湯に浸して、よくく

擦り、黒い汁を除つた上で、使はねばなりません。この他、汚斑脱きをした周囲をほかすために片及刷毛といふ、刷毛の毛が、一列並びになつてゐるものを用意する必要があります。なほ繪筆とか小刷毛、ガーゼ、白木綿、海綿などを準備しておきますと、それらに必要な場合に、すぐ取り出して使へますから、大へん重寶であります。

## (2) 學理と實驗を應用した汚斑脱き法

**果汁、葡萄酒 砂糖、膠の汚斑脱き法** まづ當板を白木綿で包み、布の下に當て、汚斑脱き刷毛にアルコール液をつけ、汚斑の上に塗ります。すると果汁や葡萄酒などは、色素が除れますから、そこでアンモニア水を五倍に薄め、これを刷毛につけて、前の汚斑の上から、軽く揉む氣持で、押へながら洗ひます。このとき液を多くつけすぎたり、刷毛を廣く使ひますと、汚斑の箇所がだんく擴りますから、なるべく水を散さぬやう、注意しなければなりません。かうして、汚斑が除れましたら、次には清水を刷毛につけ、再び前の方法で布を洗ふのですが、この水洗ひが不充分ですと、他日生地を損める虞がありますから、できるだけ入念に、水洗ひをすることが何より必要です。またこの間に、下の當板の布が濡れますから、二三度布を取り替へます。そこで軟いガーゼを用ひ、水洗ひした上を、軽く叩いて水氣を除き、片及刷毛に水をつけ

て、水際を手際よくほかし、再び布の裏表から白布を當て、兩手でばたく叩きながら、すつかり水氣を除き、手の熱で乾すのです。次に白地物の汚斑は、木綿、麻類は漂白粉を用ひ、絹物は蓆酸茶匙一杯を、湯一合で溶き、この液を刷毛につけて洗ひ、前の方法で仕上げるのです。以上は薬品を用ふ方法であります。この他、酸味のものゝは食鹽を熱湯に溶いて洗ひ、甘味のものゝは、大根卸しの搾汁または生姜で脱き、滋味のものは酢で脱くとよいのです。以上は汚斑脱き法の一例ですが、すべて刷毛の使ひ方とか、水際のほかし方などは前にも申しましたやうに、何度も経験をし得た後に、始めて上達し得るものでありますから、充分注意を拂つて、實際に當らねばなりません。

**酒、麥酒、醬油、酸類の汚斑脱き法**

酒や麥酒が白地物についた場合は、漂白法によつて除りますが、色物のときには、アンモニアを十倍くらゐに薄めた液で洗ふか、または乾烏賊の煮出し液で振り出しますと、容易に除れます。但し汚斑の古くなつたものは、變質し易いもので、アンモニアを用ひますと、往々布地が損むことがありますから、このやうなものは、前の乾烏賊の煮出し液で洗ふ方が安全であります。洗ひ方やほかし方、仕上げ法などは、すべて前の項を御参照ください。

次に醬油または味噌の汚斑は、布の種類によらず、汚斑ができたとき直ちに、大根卸しの漉汁をつけ、水洗ひすると容易に除れます。その他五倍に薄めたアンモニア水を、汚斑の上につけ、メリケン粉を極く少量

つけて揉み、後をよく水洗ひして乾します。

また梅酢や酢などは、まづ酸の性質を區別して、植物性のもものは、アンモニア水(酸の強弱によつて、濃さを加減します)をつけて洗ひますが、梅酢のやうに色素を含むものは、前もつてアルコールで色を除き、アンモニア水をつけます。なほ白地の場合は、湯一合につき、蓆酸茶匙一杯の割合の液に浸し、いづれも水洗ひして仕上げます。この他、動物性の酸は、米の漉汁及び糠汁(水一升到二合)を熱くして除ります。最後に動物性の酸、例へば吐瀉物中に含まれる酪酸、腋臭より生じる脂肪變化酸は、最も除り難いものであります。この場合には、アンモニア一、水五、アルコール一の割合で作つた液にしばらく浸し、水洗ひをして仕上げをします。

**汗、尿水、海水の汚斑脱き法**

木綿や麻のやうな植物性の白布は、水一升到蓆酸茶匙一杯、漂白粉茶匙二杯を入れ、この中に十分間くらゐ浸して酒し、よく濯いで乾します。また動物性の絹や毛織の場合は、まづ微温湯一升、アンモニア水七八滴、アルコール盃一杯の液に浸し、更に絹物は微温湯一升到蓆酸茶匙一杯、毛織物は同量の湯に醋酸七八滴の割合の液に、各浸け、最後に水に浸けて乾すのです。

次に色物の場合は、植物性ならば前同様のアンモニア液に浸し、次に水一升、アルコール盃一杯の液にしばらく浸します。なほ動物性色物は、微温湯一升、アンモニア七八滴、アルコール六七滴を刷毛につけて

洗ひ、後をよく水洗ひして、更に薄い醋酸水を通し、再び水洗ひして仕上げるのですが、これではできるだけ手早くしなければなりません。

#### 血液、膿、乳の汚斑脱き法

血液や乳は、附着したとき、湯に入れたりしますと、除り難くなるものです。それで汚斑の新しいうちに、手早く大根卸しの漉汁をつけるか、または薄いアンモニア（水一合にアンモニア六七滴）をつけ、局部をよく洗つた上で、水洗ひをします。なほ汚斑の古くなつたものは、姫糊か積飯糊、またはどろくに煉つた小鳥の糞を塗つて、指尖で揉み出しながら、丁寧に洗つて濯ぎます。若し斑點の残る場合は、アルコールをつけて再び洗ひ、よく水洗ひをして仕上げるのであります。

#### 茶、珈琲の汚斑脱き法

刷毛に微温湯を含ませ、汚斑の上を揉む氣持で擦りますと、大抵のものは除れますが、後に斑點が残るやうでしたら、微温湯五合につき、硼砂を茶匙一杯の割合に溶し、これを小筆につけて斑點の上に塗り、再び汚斑脱き刷毛で洗ひます。最後に薄い醋酸液に通し、よく水洗ひをして乾すのです。但し、以上は色物の例でありまして、白地物の場合には、木綿や麻は漂白粉で酒し、毛織物は酒石酸を茶匙二杯、絹物は醋酸を茶匙一杯の割合にして、各五合の湯で溶き、その中に布を浸して酒します。

#### 油脂、矽油、機械油、コールドタール

油脂類の汚斑は、大抵揮發油かベンジンで除れますが、中には有機物や色素を含むものがあり、ベンジンだけでは、痕跡が除れぬ場合がありますから、最初アルコールで揉み、

後を揮發油かベンジンで洗ふとよいのです。また油類が固つてゐるためには、一寸揮發油では除れぬ場合は、十倍に薄めたアンモニア水を噴霧器に入れ、汚斑の部分に霧を當て、後をベンジンで洗ひますと、容易に除れます。

次に着物の衿などが、衿垢と白粉とで、ひどく汚れてゐる場合には、最初汚斑の上にオレーフ油か樟油を引き、垢を浮かして、上等のベンジンか揮發油で洗ひます。またコールドタールや機械油の汚斑は、これも先に美也光油または樟油をつけ、その上に白布を載せて、アイロンか鑊を熱めてかけ、次に揮發油かベンジンで揉み、最後に石鹼で洗ふとよいのです。

#### 蠟、樹脂、煙草脂の汚斑脱き法

蠟、樹脂の汚斑は、まづ竹筥のやうなもので、軽く表面を削り、上等のベンジンまたは揮發油で拭き、その上に白紙を當て、アイロンまたは鑊をかけるか、または熱灰を白紙に包んで、上から當てますと、次第に汚斑が紙に除れて、綺麗に跡がなくなります。この場合、當紙は再々取り替へねばなりません。また煙草脂の汚斑も同一の方法によつて除り、最後に石鹼洗ひをします。

#### ペンキ、ワニス類の汚斑脱き法

ペンキの汚斑は、つきたてのものならば、ベンジンでも除れますが、少し古くなつた場合は、何か軟い布にテレピン油を浸ませ、徐かに汚斑の上を濕らして、白布を上を當て、アイロンをかけた後、ベンジンで洗ひますと、大抵のものは除れます。もし、非常に時日の経過して凝りの



出来たものは、右のテレピン油の代りにターペンタイン、ベンジンの代りにコロ、ホルムを用ひ、前と同じ方法で除るとよいのです。

ワニスの汚斑は、汚斑の部分にアルコールをつけ、白布を上に乗せて、アイロンをかけ、再びアルコールを布につけて拭ひますと、大抵の場合綺麗に脱けます。

#### 印肉、印刷インキ、靴墨の汚斑脱き法

印肉の汚斑は、最初これを揮発油かベンジンで拭き、水一合、粉石鹼茶匙一杯、アルコール七八滴の割合の液で洗ひます。次に印刷インキは、これも最初はベンジンで洗ひ、後石鹼で洗ひます。なほ靴墨または油煙は、テレピン油と揮発油を、同量づつ混ぜた液で洗ひ、これも後石鹼で洗ひます。なほ騰寫版肉、油繪具などの汚斑も、以上の汚斑脱き法の應用で除れます。

#### インキ、墨汁の汚斑脱き法

インキにはいろいろの種類があつて、一樣には申されませんが、まづ大體コッピイ属インキ(書いたときは淡青いが、時間が経つと黒くなるもの)と、鹽基性インキ(赤、青、紫)とであります。

コッピイ属インキの汚斑は、白の木綿、麻などの場合には、漂白粉またはホワイト・ローズ茶匙一杯を、五勺の湯に溶いて、汚斑の部分につけ、後で蓚酸茶匙半分を五勺の湯に溶いて塗りつけ、水洗ひします。色物の場合は、アンモニア水を五倍に薄めた液と、蓚酸茶匙半分を、五勺の湯に溶いたものを作ります。そして

最初アンモニア液をつけ、水濯ぎした後、更に蓚酸液をつけて、再び水濯ぎをし、綺麗に脱けるまで、同じ方法を繰り返します。なほ、絹物のやうな動物性繊維の場合には、反対に、蓚酸を先に、アンモニアを後で用ひます。

青、紫、赤インキも、植物性繊維の場合には、前と同様でよいのです。

赤インキの汚斑も、白の植物性繊維についた場合は、前と同じですが、色物の場合は、繊維の種類によらず、米糠一合を五合くらの熱湯に溶いて、その中で振り出し、そしてすつかり脱けたところで、水濯ぎします。

何インキに限らず、毛織物に附着した場合は、直ちにアルコールを塗つて揉み、熱い牛乳で振り出せば脱けます。

墨汁の汚斑は、附着したすぐならば、續飯糊または糊をつけ、指尖で丁寧に揉むとよいのですが、古くなつたものは、なか／＼除れ難いものです。それにはメリケン粉と粉石鹼を半々にして、固い糊を作るとか、また小鳥の糞と飯粒とを煉り合せ、これを汚斑の上に塗つて、根氣よく揉み脱き、後をよく水洗ひして仕上げをするといふのです。また製圖用の墨インキの汚斑も、前の方法で綺麗に除れます。すべてこの場合は、機械的方法で脱くのが、一番安全で、よく脱けるのであります。

**鐵、泥はね、鐵錆の汚斑脱き法** 普通の鐵は、よく日光に晒しまして、刷毛で掃き落とし、後に残った汚斑を、薄い醋酸水か醋酸水（白いものに限る。）で洗へばよいのです。また俗に黒鐵といつて、白い物に黒つばいぼつ／＼の出来たものは、過満俺酸加里茶匙一杯を、五合の湯に溶き、小刷毛または筆につけて、汚斑の上に塗ります。すると最初は綺麗な牡丹色をしてゐますが、しばらくするうちに茶色に變りますから、そこで、湯五合、醋酸茶匙半杯、酸性亞硫酸曹達盃一杯の割合に作った液を、その上から塗ります。すると茶色がすう／＼と消えて、同時に鐵の汚斑がなくなります。もし、一回で除れぬ場合は、二回三回と同じ方法を、繰り返すのです。肌襦袢などに出来た黒鐵などは、この方法によつて酒すとよいわけです。次に色物に出来た汚斑は、少量の湯に、醋酸六七滴と、ヂアスターゼを少々入れた液をつけて、水洗ひすればよいのであります。

泥はねの汚斑は、よく乾いた上で刷毛で拂ひ、ベンジンで拭くとよいのですが、白地物の泥はねは、この方法では、なか／＼汚斑が除けませんから、湯五合、硼砂茶匙一杯を溶した液に十分間くらゐ浸け、石鹼で洗ひます。但し色物の場合は、硼砂茶匙一杯を五勺の湯に溶いたものを塗つて洗ひます。また鐵錆や、綠青の汚斑は、醋酸茶匙一杯、湯五勺の液をつけ、暫く日光に晒して、水洗ひをします。色物の場合は、リスリン一、マルセル石鹼一の割合に混ぜたものを汚斑の上に塗り、二三十分間ほど経た後、よく揉み洗ひして、後で薄い醋酸水に浸し、水で洗つて仕上げをします。

**膏藥、沃度丁幾、白髮染の汚斑脱き法** 膏藥の汚斑は、揮發油またはアルコールで拭き、微温湯で後を洗ひます。沃度丁幾は、三倍に薄めたアンモニア水で洗ひ、水で洗つて酒石酸茶匙一杯を五勺の湯で溶き、この液をつけて、再びアンモニア水に浸け、後をよく水洗ひして仕上げののです。

また白髮染の汚斑は、まづアルコールをつけ、薄いアンモニア水で洗つて、その上にテレピン油を塗り、なほリスリンとマルセル石鹼を半々に混ぜたものをつけて、よく洗ひます。すると大方汚斑が落ちますが、後で薄い酸液に浸し、なほアルコールをつけて水で洗ひます。

**原因不明の汚斑脱き法** この他、性質不明な汚斑は、まづアルコールで揉み、五倍に薄めたアンモニア液で洗ひます。もし以上でも除れぬものは、白地ならば、醋酸茶匙一杯を湯一合で溶き、色物は水一合に醋酸七八滴を落した液に浸け、よく水洗ひをして乾します。

## 衣服保存法の部

### 一、蟲干の一番有効な仕方

#### (1) 蟲干の時期と風土との關係

**蟲干の好時期** 蟲干は、土用干とも申しまして、これまでの習慣では、土用中にするといふ定りになつてをりますけれども、その一番理想的な時期は、何といつても、冬の二二月頃でありまして、次には、秋の彼岸頃であります。

一體、夏は氣温が高いので、乾き方は非常に早いのですが、濕氣が大變多いために、そのときには乾いてゐても、濕氣の戻る虞があるのです。冬は、それと反對に、乾き方は遅いのですが、空氣が乾燥しきつてをりますから、心まで、完全に乾くのであります。殊に夏は、丁度害蟲の跋扈する時季ですから、うつかりすると、蟲が飛んで来て、遠慮なく卵を生みつけてゆきます。しかし、大抵の方は、こんな事には一寸もお氣附にならず、蟲干といふものは、土用に出して擡げるもので、さうさへしておけば、蟲干の目的は達せられ

たものと思ひ、安心してゐられますが、その實、簞笥の中では、いつの間にか卵が孵化り、盛んに暴れ廻つてゐるといふ例が、決して少くないのであります。「毎年蟲干をしても、蟲がついたり、着物や帯にほしが出て困る。」といはれる方がありますが、これは、前のやうなわけで、蟲干の適當な時期を選ばぬため、却て、自ら害を招いてゐるのであります。

このやうに、濕氣と害蟲は、衣類保存上には、禁物であります。しかもこの兩者は、互に密接な關係をもつてゐるのです。よく乾燥してゐるものには、蟲がつきません。もし、ついたにしても、繁殖しないのですが、反對に濕氣がある場合は、蟲もつき易く、その上、どんく繁殖するのであります。また、ほしの出来るのも、濕氣のためなのです。それで、濕氣のあるところでは、どんなに乾燥させておいても、いつの間にか周囲の濕氣が移るので、どうしても蟲害を受ける度が多いわけですから、特に濕氣の多いお宅では、充分注意して、いつも乾燥させておかなければなりません。

また日本には、梅雨といふ、厄介なものがありますから、梅雨後には必ず蟲干をしなければなりません。殊に毛織物は、木綿や絹に比較して、水分の吸収率が多いのですから、我が國のやうな、濕度の高い國ではよほど注意しないと、すぐに蟲に荒されます。外國では、毛織物を多く用ひますが、防蟲のことは、さほど喧しくいはれないのであります。これは、濕度が低いために、防蟲の必要があまりないのですが、初めて日

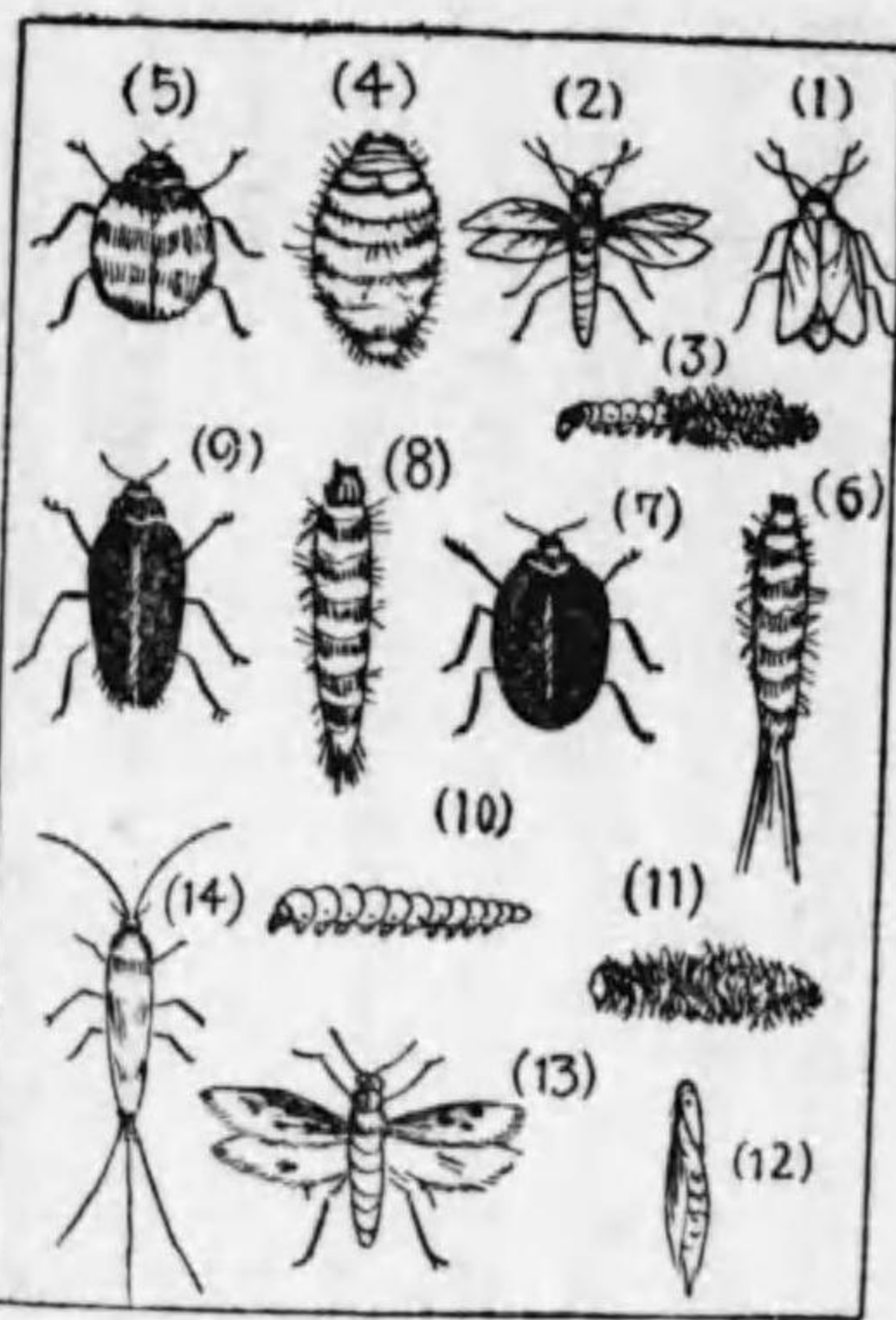
本に來られた方は、こちらの湿度の高いことに氣附かれず、よく失敗されるのであります。さういふわけで、すから、濕氣の多い時季には、なるべく蟲干をせぬやうに、また蟲干は年に一度のもの、といふ考へをお棄てになつて、度々風を通し、いつも乾燥させておかねばなりません。

なほ、消毒の目的でするものは、温度の高い土用が最も有効で、炎天に二三日も曝しますと、どんな微菌でも、殆ど死滅してしまひますから、梅雨あけ後などには、土用中に一旦出して乾しておき、彼岸か嚴寒の頃に、もう一度取り出して、本式の蟲干をし、充分乾燥させれば、申分ありません。

次には、土地と蟲害の關係であります。郊外とか田園地などは、市街地に比較して、蟲害の度が一般に多いといはれます。これは、木立や藪などが多いために、毛織物の大好きな、衣蛾とか、蠶蟲等の蛾が澤山ゐるからであります。それが、夜分になると、灯を目がけて飛んで来ては、そこに掛つてゐる、洋服とか着物に止り、産卵するので、それをそのまま知らずに、藏つておきますと、篋筒の中で、卵が孵化つて亂暴しますから、蟲の多い土地では、夏季の土用干は、危険があるばかりでなく、衣類を一寸掛けておく場合にも、よほど注意しなければなりません。

(2) 防蟲及び殺蟲法と蟲干の仕方

(1)は小衣服の成蟲、(2)は衣服の成蟲、(3)はその幼蟲で、毛深い毛織物を食害します。蛾は大きき三分夏分燈火の周圍に集まる蟲です。(4)はちび丸蠶蟲、(5)はその成蟲です。これは長さ二分五厘くらゐの毛蟲で、メリンスやセル類を食害します。成蟲は、マーガレットや新菊につく、小豆大の丸甲蟲です。(6)はひめ蠶蟲の幼蟲、(7)はその成蟲で、これも新菊に集ま



蟲成び及蟲幼の蟲害(圖一十第)

る黒色楕圓形の、小豆大の甲蟲です。幼蟲は赤茶色、長さ三分くらゐ、全身に毛を有し、毛織物や毛皮を食害します。(8)は腹に黒茶色の幼蟲で、(9)がその成蟲です。幼蟲は黒茶色で、長さが四五分くらゐ、成蟲と共に毛皮を食害します。(10)は毛織物の幼蟲で、主に毛織物につき、(11)は蠶、(12)は蛾、(13)は蛾、(14)の衣魚は、銀白色で尾端に長い毛があり、主に糊氣を好みます。

防蟲法と殺蟲法

害蟲を防ぐには、普通、樟腦、ナフタリン、固形フォルマリン等の、防蟲劑が使用されてをります。これは各一得一失があつて、はたして、どれが一番有効だとは、斷定されません。が、防蟲としての效力は、フォルマリンが第一であります。また消毒の効もあるのですが、何しろ、臭氣が不快なため、一般には、嫌はれてゐるやうです。但しこれは、着物を一日前に、容器から取り出し、よく風を當てて、その上でお召しになれば、結構、臭氣は脱けてしまひます。また需要の多い點では、樟腦が一番であります。これは臭氣も、さほど悪くありませんが、金銀を變色させる虞がありますから、金糸や銀糸を用つた織物とか、モール

を飾つた禮服などには、用ひぬ方が安全であります。ナフタリン、フォルマリンは、別に差支ありません。しかし、何れにしても、防蟲劑は、たゞその臭氣を嫌ふため、外部から侵入する蟲を防ぐに止まるもので、殺蟲の力はありませんから、既に衣類に附着したまゝで、藏ひ込まれてゐる蟲類は、たとひ、防蟲劑を入れても、その中で平氣に活動します。殊に卵の時代には、何の效力もありませんから、防蟲劑の中で孵化して、これも盛んに活動します。つまり、臭ひに馴れきるのでから、防蟲劑を入れてあると思つて、安心してはなりません。

次に、防蟲劑の使用法を申し上げます。すべて、防蟲劑といふものは、揮發性のものですから、これを用ひますには、箆筒なり、トランクなり、または長持のやうな、密閉のできるものでなければ駄目です。よく行李などへ入れておくのを見受けますが、折角入れても、行李などでは、何の役にも立ちません。これを用ひますには、普通は紙に包んで、容器の四隅へ入れておきますが、理想的にすれば、容器の底へ平均に防蟲劑を撒布して、その上に、空氣の通るもの、例へば簀の子のやうなものを置き、それから着物を入れますと臭ひが平均にゆき渡るので、効果が多いのです。(防蟲劑を直に布地の間に入れるのはよくありません。)なほこの防蟲劑は、揮發するに従つて、小さなつてゆきますから、時々檢べて、新に補充しておかなくてはなりません。

以上のやうに、防蟲劑を入れても、卵が孵化するやうでは不安ですから、完全に蟲を殺す必要があるのです。それにはまづ密閉できる箱を用意して、その中に衣類を入れ、二硫化炭素か四氯化炭素を入れた壺を、(栓をしないで)箱の四隅に入れて、箱の蓋をし、すつかり目張りをしておきます。かうして三四日おきますと、藥から發生する毒瓦斯のために、どんな内部に隠れてゐる蟲でも、完全に死滅してしまひます。但し卵時代には、これとても效力が不確實でありますから、卵が幼蟲に孵化する九、十月頃と、幼蟲が成蟲に變る三四月頃と、年二回、この方法を實行なされば安全であります。なほ、衣類を箱に移すと同時に、この藥を壺に入れ、箆筒の抽斗に、一つ宛入れて、きちんと閉めておきますと、箆筒の隅々などに隠れてゐる害蟲が死んでしまひます。また桐の箆筒などに、木蟲がついた場合にも、この方法で、蟲を退治することができまゝす。夜具や毛布のやうな、嵩張るものは、押入をすつかり目張りして、(壁や天井の隙間も)この殺蟲法をなさるとよろしいのです。

**効果ある蟲干の仕方** 蟲干に大切なのは、天氣工合と藏ふときの注意です。その日の天氣さへよければ、蟲干日和のやうに思ふ方が大分ありますが、雨上りの翌日などでは、どんな日本晴れの好天氣でもいけません。少くも二三日好天氣のつゞいた、風のある日を選ぶことです。障子や襖は除り拂つて、できるだけ風通しをよくすることは、申すまでもありません。室内を綺麗に掃除して、細引を渡します。上等のものは、な

るべく衣紋竿を使用して頂きたいのです。風を通すのが目的ですから、重り合はぬやうに、適當に衣類を掛けておきます。木綿や毛織物で、褪色の心配のないものは、直接日光に當てる方がよいのです。容器も同時によく塵埃を拂ひ、乾燥させることが大切で、これも行李のやうなものは、直接日光に當て、トランクや箆筒は陰干にします。かうして、蟲干しながら、汚斑や垢の有無をよく調べ、衿垢や袖口の汚れは揮發油で拭き、汚斑があつたら、それ〴〵手入しておかねばなりません。少しの汚斑だと思つても、藏つておくうちに大きくなり、しかも變色したり、地質を損めたりして、結局一文惜しみの百損になります。殊に、汗のついたものを、そのままにおきますと、ホシが出たり、微が生えたりします。汗でも汚斑でも新しいうちでしたら、タオル二枚を濡して固く搾り、汚斑の部分に、両面から當て、叩きますと、大抵は除れますから、そこで湯伸しなり、火熨斗なりで仕上げをすればよいのです。

日が落ちると濕りがきますから、日のある中に、すつかり取り込まねばなりません。そして、一枚々々をよくはたいて塵埃を拂ひ、絹物でしたら天鷲絨刷毛をかけ、毛織物は、普通の毛刷毛で表裏隅々まで、丁寧に拂つて疊み、それ〴〵糊氣のない白布(古浴衣などを綺麗に洗つて接ぎ合せ、澤山作つておく)と重寶です。に包んで、各容器に納めます。毛織物や毛皮類は、かうして蟲干したものを、更に前に申上げた殺蟲法を施し、亞鉛張りの箱に入れてお置きになれば安全です。

#### 和洋服の藏ひ方

折角苦心して、蟲干をしても、またクリーニングをいたしましても、藏ひ方が悪いと、形をくづしてしまひます。殊に洋服類は、藏ひ方が大切ですから、まづ洋服の方からお話をいたしませう。洋服は、何といつても、吊しておくのが一番よろしいのです。それで、洋服箆筒がなければ、押入を利用するとか、室の一隅をカーテンで仕切つて、洋服吊をお作りになるとよいのです。まづ洋服掛に洋服をかけ、それがすつぱり包める大きさに作つた、白木綿の袋(袋は上部を括るやうに作る。)を被せて、塵埃のからぬやうにして吊しておきます。その袋を、更に新聞紙の袋で包めば、一層完全です。蟲は、印刷インクの臭ひを非常に嫌ひますので、新聞紙は、その點で、防蟲上なかく有効です。もし吊す設備がなく、疊んでおく場合は、肩から胸のあたりへ、綿なり軟い綿布なりを丸めて當て、軽く疊んで一枚づつ、白布に包み、更に新聞紙に包んで、一着づつ、容器に納めます。行李などへ、幾組も重ねて押し込むことは禁物です。和服は大抵箆筒に藏ひますが、なるべく一枚づつ、布に包んで、重いものを下に、軽いものを上にと重ねて入れます。紋服は紋部に眞綿を當て、模様のところへは、白紙を當てます。なほ衿、袖口などにも白紙を當て、疊み目には眞綿を挟みます。帯なども矢張り折目に眞綿を挟まぬと、折切れがしてしまひます。

## 二、洋服の保存法と手入れの仕方

ズボンの折り目も正しく、塵などの少しもかゝらぬ、手入れのよい洋服を召した方を見ますと、御本人ばかりでなく、お家庭の平常までが偲ばれて、本當に奥床しいものであります。それで、主婦の方々の心得として、洋服の日常手入れ法や保存法に就き、少し御注意申上げることいたします。

### (1) 洋服を保ちよく着るに必要な日常心得

**服いだら直ぐにブラッシを** これまで度々申述べましたやうに、衣類は、その手入れ法の良し悪しによつて、非常に保ち方が違ふものですが、特に洋服は和服類と異ひ、さう度々洗つたり、縫ひ返したりすることができませんから、餘程手入れに注意しませんと、直き形がくづれたり、地質が損んだりします。それは、日々の手入れが一番大切でありまして、平常着る服などは、脱ぐとすぐ軽く毛刷毛をかけて、すつかり塵埃を拂つておくことです。すると何の造作もなく除れますが、それをそのまゝにおき、また翌日その服を着ると、もう塵埃が布の中にしみ込んで、なか／＼除れ難くなるのであります。何しろ衣服は、一日着ておくと、身体からは汗が出ますし、また外氣も受けて、いくらか湿つぽくなるのです。そこへ塵や埃がつくのですが、これをすぐ拂へば、容易く除れるのであります。一晩そのまゝに抛つておき、翌日また汗や塵埃に遇ふと、塵埃は布の目の中に入り込み、一寸拂つたくらゐでは除れ難くなるのであります。それが日一日

と重りますと、地質が損むのは當然なことでありますから、洋服をお脱ぎになりましたら、是非その手で、毛刷毛をかけることを怠つてはなりません。これは人手を待つまでもなく、御本人自らの手でする習慣をつけられることが、何よりのことと思ひます。なほ時々ポケットなどの掃除をしなければなりません。よく煙草の粉や塵埃が入つてゐますから、ポケットの袋を取り出し、隅々を綺麗にしておく必要があります。またはねをあげましたらば、乾いてから毛刷毛をかけ、それでも薄白く跡が残るやうでしたら、揮發油かベンジンで拭くと、綺麗になります。

かうして毛刷毛をかけましたら、上衣は形をこはさぬやうに、洋服掛に通して吊しておき、ズボンはきちんとして畳み、膝の折目をくづさぬやうに、敷壓しをするか、或はズボン挟みに挟んでおきます。また、日本流にきちんと畳んで寮壓しにするのも、一番簡單で、よい方法です。但し疊の跡がつかぬやうに、御注意なさいませ。毛刷毛は、木綿物は何でも差支ありませんが、絹物や毛織物には、必ず柔い毛刷毛を用ひませんと、地質を損じます。

**二週に一回は必ずアイロンを** このやうに日々毛刷毛をかける外に、一週乃至二週間に一、二度くらゐづ、アイロンをかけたいたいものであります。アイロンをかけますと、形を正しくするばかりでなく、毛刷毛で除れぬ塵埃もすつかり除れてしまふのです。まづ全體に毛刷毛をかけて塵埃を拂ひ、次に汚斑を見つけて拭き除りま

す。大抵の汚斑は薄いアンモニヤ水を、洋服とできるだけよく似た布に浸して、拭くとよいのです。また脂埃はベンジン或は揮発油で拭きます。かうして汚斑をすっかり拭き除きましたら、こんどは手拭を熱湯で固く搾り、それで洋服全体を乾く限なく拭き清め、風通しのよいところに吊しておき、最後にアイロンをかけるのであります。

アイロンをかけるには、まづ臺の用意をしなければなりません。もし専用の臺がなければ、(二三頁参照)毛布を四重か、それくらゐの厚さの蒲團の上に、洋服を平に攤げ、固く搾った濡手拭を洋服の上に當て、その上から、適宜に温つたアイロンをキユッとかけます。すると毛並の塵埃はみな手拭に吸ひ取られてしまひます。手拭は、一度々々に綺麗に濯ぎ出して使はねばなりません。なほアイロンを滑らしすぎますと、アイロンをかけた後が光つて、まことに見苦しいものですから、たゞ押しつけるやうにしながら、手早く當ててゆきます。もしどうかして、アイロンを直に洋服に當て、アイロン光りが出たときなどは、その光る部分に濡手拭を當て、アイロンを一寸當てますと、蒸気がたつて、光りはすぐ消えるのです。次に肩や袖のやうな丸味のところは、臺があれば結構ですが、ないときは小さい枕のやうなものを當て、膨みのくづれないやうにアイロンをかけます。またズボンの膝のところは伸びてゐる場合は、伸びたところを手に攤げ、やゝ湿りの強い手拭を被せ、伸びた部分の外廻りから、順次に内側に廻しながら、アイロンをかけてゆき、最後

にキユッと押へつけて、ゆるみを消してしまひます。この方法が一番簡単で、しかも綺麗にできるのです。以上の方法は、木綿、毛織物には適してゐますが、絹物には適しません。絹物に濡手拭を當て、は、汚斑が出来るのですから、絹の場合には、たゞ乾いた薄手の布を當て、その上からアイロンを當てなければいけません。なほ婦人子供服のスカートとか、女學生の袴などは、襷を一々驥糸で、動かぬやうに止め、前のやうな方法で濡手拭を當て、アイロンをかけますと、大へん綺麗になりますから、是非お試しください。

#### 衣更への度は乾燥洗濯

以上はつまり平常の手入れですが、かうした上に、汚れの多くなつたものは、特別の洗濯法によつて洗ひますが、(五一頁参照)これはまづ子供服とか下着類の範囲のものでありまして、大人の外套や男子の洋服は、乾燥洗濯(クリーニング)をするといひのです。殊に夏の衣更へには、是非クリーニングをして、その上で藏はなければなりません。これは五五頁で詳しく申上げましたやうに、佛國式家庭ドライ・クリーニング法によつて手入れをするか、または少々高價につきますが、本職の方に頼むかして、充分手當をおきます。ほんの少しでも垢や汚點のついたものを、そのままにして藏つておきますと、地質が損んだり、蟲がついたりして、(蟲は垢や汚れを好みます)再び着られないものになつてしまひますから、クリーニング代を惜むのは、一文惜みの百損となります。

次に大切なのは、洋服類の藏ひ方でありますが、これは、前の蟲干の部でも申述べておきましたから、前



章と読み合せて、研究して頂きたいのであります。これを藏ひますには、なるべく外氣の入らぬやうな容器に入れ、防蟲法を施しておきます。或る方の御経験では、長持の内側をすつかり亜鉛で張り、その中に、上衣類と下着類とを別々にしておかれますが、亜鉛が張つてあるので、濕氣を防ぎ得るためか、決して蟲がつかぬさうです。それから燕尾服やフロックコートなどは、疊んでおくとしても形がくづれますから、できれば洋服戸棚などに吊しておくのがよいのです。この場合は洋服の上に袋を被せておきますが、一層丁寧にするには、下に布の袋を被せて、その上から更に澁紙の袋を被せておけば安全です。かうして二重袋にしておけば、洋服戸棚でなくとも、普通の押入に吊しておいても、さほど地質を損じるやうな心配はありません。

毎日用ひる服にしても、吊した上から一寸袋をかけておくと、塵埃がつかないでよいのです。また西洋服衣の古いのを洗つておき、前の袋の代用にしますと、大變便利であります。以上のやうに、毎日よく刷毛をかけ、ときどきアイロンをかけ、またクリーニングをいたしまして、藏ひ方に注意すれば、洋服は存外長く丈夫に保ちますし、いつもきちんとしたのを着ることができなのです。また洋服は、一枚の洋服を着くづすまで着るといふことは、結局損になりますから、二三枚着替を用意しておき、一二週間目ごとに取り替へて着る方がお徳であります。

**濡れた服は殊に手入れを** 雨に濡れた服は、殊に注意深く始末しないと大へん悪くなります。脱いだらすぐ乾さなくてはなりません。この場合直に火に晒してはいけません。火氣のある側に（あまり近くてもいけません。）吊して乾します。次にアイロンをかけて丁寧に手入れをします。上等の服などで、あんまりひどい雨に遇つたときは、できれば仕立屋に頼み、本式に始末して貰つた方がよいのであります。カラーは、圓いカラー・ボックスに入れておきます。外へ出し放しにしておくと、汚れたり、折目がついたりします。ネクタイは、取つた度に、よく皺や襞を直して、きちんとしておき、一定の箱に藏つておくか、横木にかけておきます。また帽子は毎日刷毛をかけることは固よりであります。ひどく汚れたときは、濡した刷毛でよく拭き、數時間乾してから、普通に刷毛をかける綺麗なになります。もし汚斑などのついたときは、薄いアンモニヤ水をフランネルに浸して、叩くやうな氣持で拭ひ、その後アイロンをかけておきます。

### 三、見事に出来る和洋服類の繕ひ方

新物の仕立を上手にする方でも、古い着物の接ぎ縫や、破れ孔の色紙當を器用にする方は、少いものであります。しかし實際には、新しい物の仕立よりも、あちこちを繕つたり、または接いだりする古物の仕立の方が、遙かに多いのでありまして、和服の袖口、身八つ口の擦れ、膝や裾の破れから、洋服の袖口、肘の擦

り切れ、またはズボン膝の損みなど、衣服の破損箇所は、枚舉に違がないくらいであります。それで、このやうな破れは少々面倒でも、一々丁寧に手當を施し、上手に繕っておかねばなりません。これは、衣服を長く保たせ、いつまでも役立たせる上に、最も必要な條件でありますから、接ぎ縫や、色紙當の練習をいたしまして、上手に衣服の手當をしたいと思ひます。

### (1) 和服類の手際よい修理法

**和服類の繕ひ方** まづ和服の繕ひ方から申述べます。すべて補綴は、面倒な仕事であります。それだけにまた楽しみなものであります。しかし何しろ細い仕事だけに、それ相當の技術と熟練とを要するのですが、次のやうな仕方を應用されましたら、誰方にも上手におできになります。

**布地による接絲の選ひ方** まづ地質によつて接絲を選ばねばなりません。銘仙、秩父、大島のやうに、割合に地が平で太地のもは、普通縫絲に用ふ絹絲を二つに割り、縮緬、お召、錦紗などのしぼ物は、二つに割つた絲に縫をかけます。縫加減は、二尺くらゐに切つた絲の兩端を、びんと引張つておいて、お召ならば三回、縮緬類は十回くらゐ縫ります。また友禪や色物で、同色の絲のない場合は、用布の縫絲を抜いて用ひ、布地の非常に薄いものは、髪の毛で接ぐとよいのです。

**接絲の糊の引き方** 布地によつて接絲を選びましたら、その絲へ極めて薄く續飯糊を引き、鏝を當て、びんと張りをつけます。細地のもは、ごくく糊を薄くいたします。なほ針は、最も細い絹針か、または毛針を使ひます。

**布地の扱ひと縫ひ方** 幅の狭いもの、丈の短いもの、地が損んで接ぎ替へるものなどの場合は、まづ縞物なら、縞目や布目をよく合せ、無地物は縦横の布目を正しく合せて、細く待針を打ち、縫絲を一筋か二筋づつ拾つて、細く縫ひます。(縫方は普通です。)しかし針目が流れると、接目が現れますから、兩手の間隔を、できるだけ狭く持つて、針尖を、一々左の指先に當てながら、縫ひ進みます。

縫ひ上りましたなら、鏝板の上に一枚の半紙をおき、その上に縫目のところを擡げて載せ、拇指の背で縫目をびつたりと割り、唾を少しつけながら、鏝をかけます。鏝の温度は、厚地のもは少々強目に、薄地のものは弱くしなければなりません。

**色紙當の仕方** 鈎裂でも破れた孔でも、疵口は決して折り伏せません。まづ疵口のほつれ絲を、それとく綺麗に切り取つて、その縁廻りに、裏から糊をつけ、共の當布を、縞目や布目をよく合せて、びつたりと貼りつけます。このとき表布へ糊がはみ出さぬやう、よく注意しなければなりません。そして、その當布の端を、絹絲を二つに割つて糊を引いたもので、表布にまつりつけるのですが、このとき表布は、縫絲だけをお

揃ひください。かういたしますと、短時間で簡単に、巧妙に出来上ります。洗濯をしても離れることはありません。しかし糊加減が大切で、地質の薄いものは、水のやうに軟く溶き、厚いものは、少し固目に溶きます。糊があまり固すぎたり、澤山つけたたりすると、表へ滲み出たり、ごはくします。但しセルのやうなものは、糊が付き難いのですから、少し固目にして用ひます。そして疵口を、髪の毛で少しまつておくによいのです。

なほ膝のあたるところなどのやうに、一體に薄く地がひけてあるものは、裏から當布をして、前のやうに用意のできた接糸を用ひ、表に小さな針目を出し、隠し縫のかけ方に同じ。片端より、縦に布を刺してゆきまゝ。そして特に地の弱つたところへは、びつしり糸を刺し、仕上げは裏からアイロンをかけます。

**糊の作り方** 色紙當の糊は、普通のものではないけません。それには里芋を火鉢の熱灰に埋めて、軟くなるまで蒸焼にします。焼けましたら、皮を剝いて、中身を盃に入れ、水を少しづつ加へて、適度の固さに煉ります。黒地のもは、その中へ、染料または墨汁を少し加へ、薄黒い色にして用ひます。

## (2) 素人に出来る洋服の修繕法

### 洋服類の繕ひ方

御承知のやうに、男子服の損み易い箇所は、まづ上衣ならば衿の折り山、肘、袖口を初

め、袖裏、裾口裏などに多く、チョッキの衿首廻りから、前裏、背裏またはポケット口の綻びとか、ズボンの膝裏、膝表、裾口、臀部の擦切れ等であります。三つ揃の中では、一番ズボンが損み易いやうです。その他不注意のため、煙草の火で焼孔を作つたり、鉤裂をするとか、害蟲に喰はれたりして、思ひがけぬ傷をつけることが、往々ありますが、以上のやうな場合に、一々専門家に修繕を依頼するのも億劫ですから、できるだけ損みの少いうちに、お家庭で一時も早く修繕をなさることが、何より必要です。

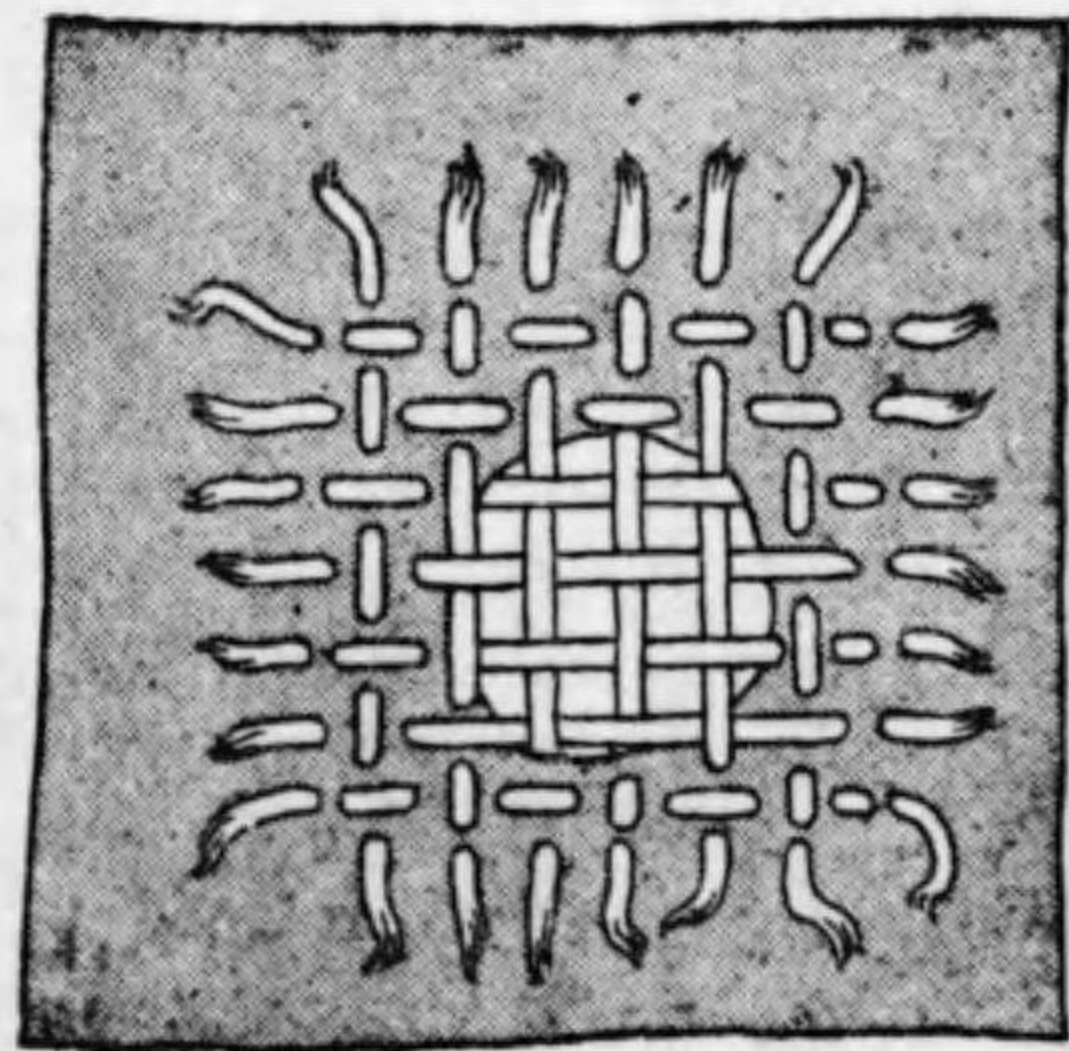
### 孔、鉤裂の繕ひ方

煙草の火、または蟲喰ひのために出来た小さな孔は、そのまゝ、服地の共糸で刺し込みま

す。まづズボン裏の縫込みを少々ほぐして、一本々々縦糸を抜き取り、孔の大きさによつて十本なり二十本なり用意するのですが、これは布の都合で、共糸の長さは、せいゝ五分か一寸くらゐのもです。但しこの共糸は針の孔に通りませんから、細針に羽二重糸または極細のカタン糸を、輪にして通し、その輪に前の共糸を揃まして、織目並に、孔の周囲の布を真直に刺し、孔の上に糸を渡すのです。かうして最初一本づつ、縦糸を並べまして、次に、同じ方法で横糸をかけるのですが、このとき孔のところでは、前の縦糸を、交互に揃ひながら、刺してゆくのです。(第十二圖参照)すると、縦横に糸が刺し込まれて、上手に修繕が出来ます。なほ、共糸の餘りの分は、適宜にお切りください。

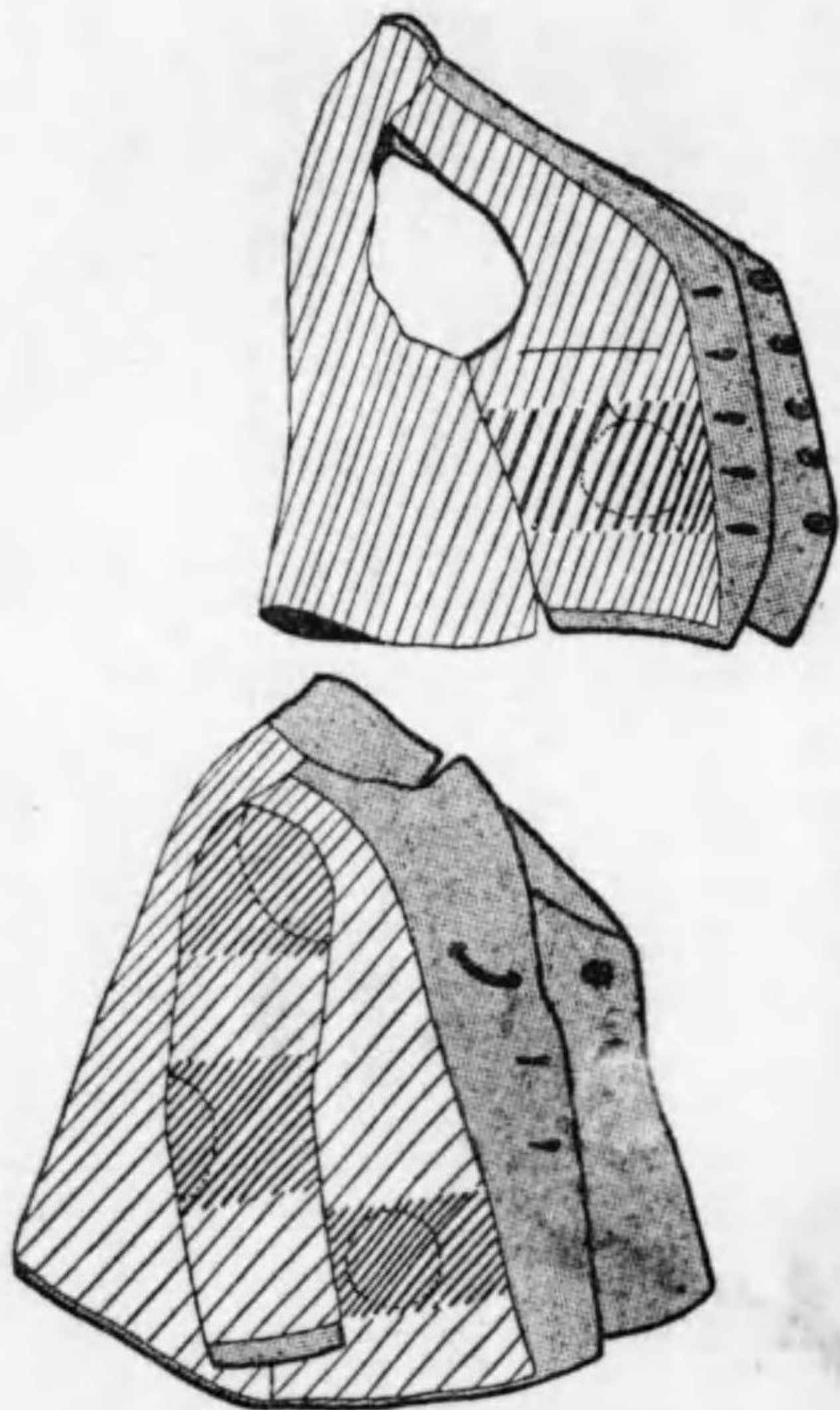
次に、前よりやゝ大きな孔で、共糸で編んだだけでは心細い場合には、孔の大ききの約三倍大くらの共

布を探し出し、周囲の糸をほぐしまして、(中の残布が、孔よりはやく大きいこと)これを孔の表に當て、前のやうに針を使つて、このほぐし糸を通し、一目づゝ下地の服の布目を拾つて縦横から糸を刺し、ほぐした糸を全部服地に植ゑつけるのです。また拇指大になつた孔は、周囲に充分餘裕のある共布を用意して、前の方法により、孔の周囲に當布のほぐし糸を刺し込み、この編み込んだ部分の裏に石鹼を少量こすりつけ、上から鏝を當てますと、羊毛の性質上繊維が縮みますから、服地と當布の両方の繊維が揃ひ合つて、びつたり喰ひつき、一寸見には修繕の跡が判りません。なほこれだけで心もとないと思ふときは、裏から甲斐絹または薄手の羽二重の小布を當て、表に糸の目立たぬやう、同色の羽二重絹を用ひ、八の字にかつておきます。こゝで大切なことは、洋服の共布でありませんが、これは服からは取り難いもので、僅かに、裾口の折返しとか、ポケット裏の布を利用するより外ありません。それで洋服をお仕立になるとき、洋服屋によく頼んで、少しの小布でも貰ひ受けておきますと、このやうな場合に、大へん役立つものであります。



方し刺の糸ひ繕(圖二十第)

**袖裏、前裏の繕ひ方** 袖裏は、多くの場合袖附が綻びたり、擦り切れたり、または袖口の部が損むものです。これ等はすべて、損みや綻びの少いうちに繕ふとか、または裏に布を當て、色紙當をしておけば、傷はあまり大きくなりません。



方ひ繕の裏頃身裏袖(圖三十第)

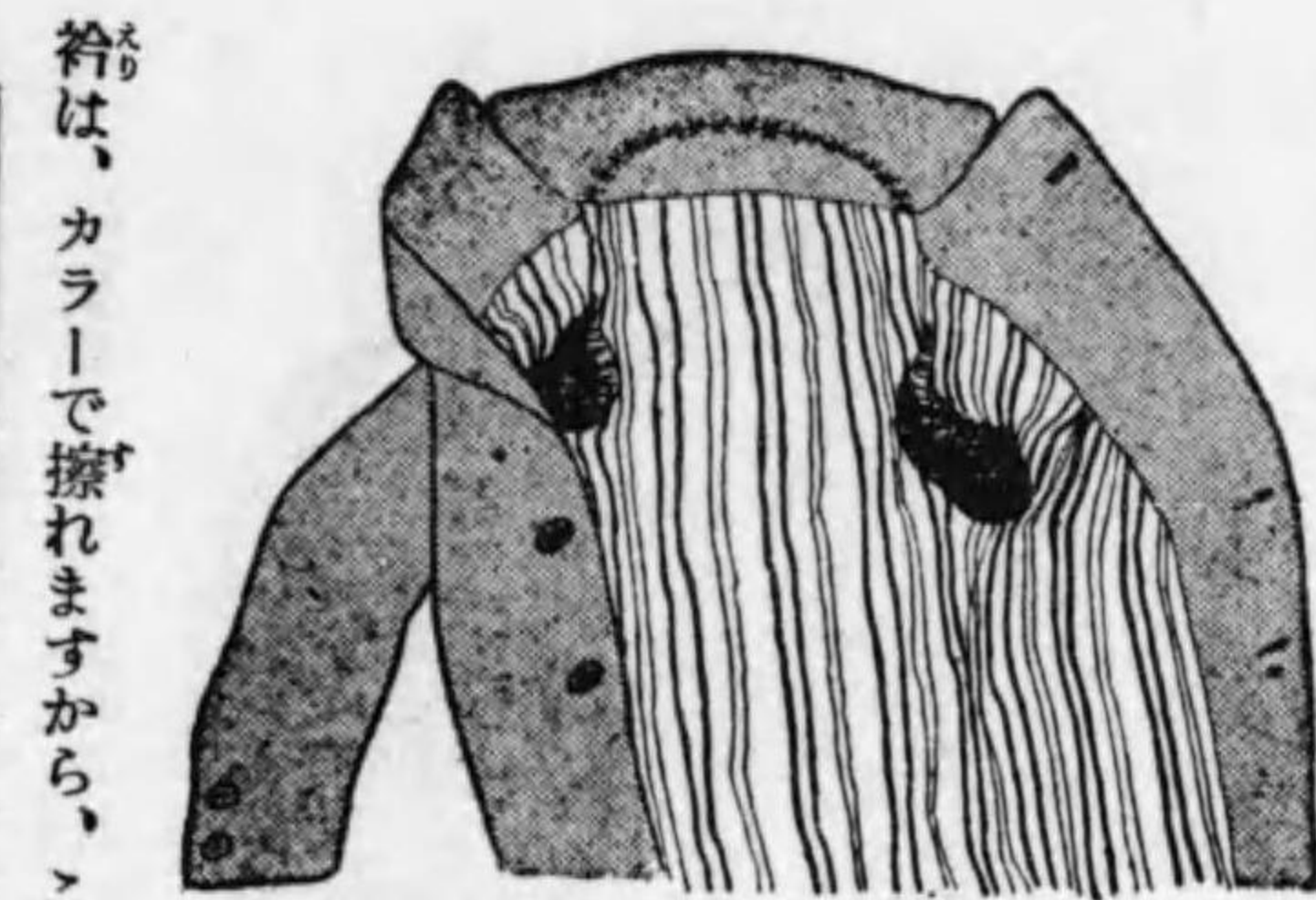
が判りません。また上衣、チョッキの前面の裏なども、よく損むところですが、この場合、単に孔の大きさを補つて縫ひだすのは、真に見苦しいものであります。それで第十三圖のやうに、孔の上下を左右の縫込みまで横

しかし袖附や袖口の邊がぼろぼろになりましたら、袖裏の中央部の、布の丈夫な部分だけを殘して、他を切り捨て、何か似寄りの布を新しく接ぎ合せ、元の型に合わせて裁ち、新規の袖を作るやうにして縫ひますと、袖を裏返さぬかきり、接ぎ

一文字に切り捨て、袖裏のときと同じやうに、よく似通つた裏地を接ぎ合せて。

**袷山、肘の縫ひ方**

次に袷の折山、肘などの地がひけた場合には、なるべく損みの少いうちに、内側から



方て當の布ひ繕山袷(圖四十第)

表と同色の絹布を張りつけ、その絹布の上から、縦横に残つてゐる糸を利用しながら、前の小孔の修繕法によつて、共糸を編みながら刺してゆきます。なほ裏から當てた絹布は、目立たぬやうに、羽二重糸で八の字かゝりをしておきます。また袷山などが擦り切れて、以上の方法で修繕の見込みのなくなつたものは、第十四圖のやうに、半圓形の共布を襟附の方に當て、襟廻りの縫合目を解き、縫代をできるだけ引張り出し、出た分を襟附の方へよせて、擦り切れた部分を、當布の下に押し込み、この接ぎ目がカラーで隠れるのです。當布の周圍を細く、同色の羽二重糸でまつり附けます。すると襟の高さには少しも變りなく、綺麗に修繕ができるのです。またチャッキの袷は、カラーで擦れますから、この場合には、似寄りの布を當て、繕ひます。

**袖口、裾口の繕ひ方**

袖、裾口の外、ポケット口、前身頃の縁の損んだときは、これも損みの少いときに、

残りの毛を利用して、共糸を編み込んでおきます。しかし山がすっかり切れてしまつたときは、この方法では追いつきませんから、このやうな場合には、前面の縁や袖口などは、縫代くらゐ短くなつてもよいのですから、見返しと突合せになるやうに縫ひ合せて。その結果、袖口や裾口に縫ひ目が來ますが、これも手際さへよければ、決して見苦しいものではありません。なほ、折返し附裾のズボンは、折返しがなくなり、最初から返りのないものは、ズボン丈が少々短くなりますが、これも致し方ないのであります。

**ズボン膝、臀部の繕ひ方**

これは最も損み易い部分で、殊に學生服などは、よく孔のあくところ。それ

れで、なるべく損みの少いうちに、内側から薄い木綿布を當て、前のやうに共糸を用つて、編み刺すか、また孔のあいたものは、例のやうに表から共布を當て、孔を防ぐとよいのです。よくズボンの膝頭や臀部に表からがに伏せにしたのを見受けますが、あれは見掛のよいものではありません。なほズボンの膝が破れた場合は、擦り切れた部分を、横一文字に切り除り、上下を接ぎ合せることもあります。この方法ですと、ズボン下が短くなりますから、裾に折返しのあるものとか、或は股上の深いズボンでないといけません。

**衣類洗濯法と保存法 (をばり)**

# 主婦之友

巻頭から最後のページまで一気に読んでしまへる雑誌に『主婦之友』を  
 措いて他にありません。発行部数において東洋第一の『主婦之友』は  
 その充實せる内容に於いても、到底他の追従を許さぬものがあります。  
 また飽くまで讀者を本位とする『主婦之友』は、その記事の徹底的  
 に親切なる點に於いても、廣く一般から認められてをります。試みに  
 月々掲載される、家庭記事の一つについて御覧ください。如何に家庭生  
 活の實際を重んじてゐるか、お解りになることでありませう。言ふべ  
 くして實行しがたい、所謂言葉の遊戯は、たゞの一頁も『主婦之友』に  
 は掲載されてをりませぬ。何卒最近號を一冊だけなりと御覧ください  
 ませ。事實は千鈞の重みをもつて、之を證明いたします。一冊定價五  
 十錢、半年分參圓廿錢、一年分六圓廿錢、外國行一年分八圓です。(但  
 し特別號の代金並に送料を含む)御購讀のお申込は、最寄の雑誌店か、  
 或は葉書を以て直接本社宛お申越を願ひます。

東京駿河臺 主婦之友社發行 振替東京一八〇番

昭和三年九月五日印刷  
 昭和三年九月十三日發行

定價六拾錢

主婦之友實用百種叢書

—(36)—

衣類洗濯法・保存法

□製複許不□

編輯者	東京市神田區駿河臺 南甲賀町十四番地
主編編輯局	東京市神田區駿河臺 南甲賀町十四番地
發行所	東京市牛込區區町七番地
印刷者	東京市牛込區區町七番地 竹内喜太郎
印刷	美

日清印刷株式會社印刷

發行所

東京市神田區駿河臺  
 株式會社 主婦之友社  
 振替東京一八〇番









主婦之友社編輯局  
主婦之友實用百科叢書

(御入用の方は主婦之友社または各地の書店にお申込みください)

<p>[篇八廿第] 中流住宅の模範設計</p>	<p>[篇九廿第] 手輕な西洋料理法</p>	<p>[篇十三第] 冬の女兒洋服の作り方</p>	<p>[篇一卅第] 冬の男兒洋服の作り方</p>	<p>[篇二卅第] 漬物の上手な漬け方</p>
<p>自分の思ふ通りに家を建てようとするならば、建築の知識がなくてはならぬ。本書は、建築の知識を、一般の家庭に普及させることを目的として、建築の基礎知識を、簡明易懂の言葉で、詳しく解説している。また、建築の歴史や、建築の材料についても、詳しく解説している。本書は、建築の知識を、一般の家庭に普及させるための良書である。</p>	<p>方法が簡単で、材料が安く、しかも、味もよく、栄養も豊富である。本書は、西洋料理の基礎知識を、簡明易懂の言葉で、詳しく解説している。また、西洋料理の歴史や、西洋料理の材料についても、詳しく解説している。本書は、西洋料理の知識を、一般の家庭に普及させるための良書である。</p>	<p>自分の思ふ通りに洋服を作りたい。本書は、洋服の基礎知識を、簡明易懂の言葉で、詳しく解説している。また、洋服の歴史や、洋服の材料についても、詳しく解説している。本書は、洋服の知識を、一般の家庭に普及させるための良書である。</p>	<p>自分の思ふ通りに洋服を作りたい。本書は、洋服の基礎知識を、簡明易懂の言葉で、詳しく解説している。また、洋服の歴史や、洋服の材料についても、詳しく解説している。本書は、洋服の知識を、一般の家庭に普及させるための良書である。</p>	<p>四季を問わず、全国の各地方で、漬物の文化が盛んである。本書は、漬物の基礎知識を、簡明易懂の言葉で、詳しく解説している。また、漬物の歴史や、漬物の材料についても、詳しく解説している。本書は、漬物の知識を、一般の家庭に普及させるための良書である。</p>

定價各冊金六拾錢・郵稅各冊金四錢

主婦之友社編輯局  
主婦之友實用百科叢書

(御入用の方は主婦之友社または各地の書店にお申込みください)

<p>[篇三卅第] お菓子の作り方百卅種</p>	<p>[篇四卅第] 子供の躾け方秘訣百ヶ條</p>	<p>[篇五卅第] ウツラの飼ひ方</p>	<p>[篇六卅第] 衣類洗濯法と保存法</p>	<p>[篇七卅第] 家庭向の支那料理法</p>
<p>経済的で美味いお菓子の作り方を、詳しく解説している。また、お菓子の歴史や、お菓子の材料についても、詳しく解説している。本書は、お菓子の知識を、一般の家庭に普及させるための良書である。</p>	<p>子供の躾け方を、詳しく解説している。また、子供の躾け方の歴史や、子供の躾け方の材料についても、詳しく解説している。本書は、子供の躾け方の知識を、一般の家庭に普及させるための良書である。</p>	<p>ウツラの飼ひ方を、詳しく解説している。また、ウツラの飼ひ方の歴史や、ウツラの飼ひ方の材料についても、詳しく解説している。本書は、ウツラの飼ひ方の知識を、一般の家庭に普及させるための良書である。</p>	<p>衣類の洗濯法と保存法を、詳しく解説している。また、衣類の洗濯法の歴史や、衣類の洗濯法の材料についても、詳しく解説している。本書は、衣類の洗濯法の知識を、一般の家庭に普及させるための良書である。</p>	<p>家庭向の支那料理法を、詳しく解説している。また、支那料理法の歴史や、支那料理法の材料についても、詳しく解説している。本書は、支那料理法の知識を、一般の家庭に普及させるための良書である。</p>

定價各冊金六拾錢・郵稅各冊金四錢

# 家庭洗濯必要品案内

東京 主婦之友社代理部  
（振替東京一八〇）

▲主婦之友の代理部では、最も確かな品を、最も御親切に、迅速にお取扱いいたします。どうぞ御利用くださいませ。  
▲代理部への御注文は、本書に添付してある、振替用紙をお用ひください。  
▲価格は至つてお安いのであります。すけれども、時勢によつて多少の變動がありましますから、御注文のときには、一應お問ひ合せを願ひます。

## 品類と具器を要必に濯洗

▲**へろく式洗濯機**  
一臺で、洗濯から濯ぎ上げ、水切りまでできる。新式の洗濯機です。定価二十八圓。荷造費一圓五十錢。送料買。送料二十八圓。

▲**文化張り物臺**  
前述の洗濯機と共に、口輪掲載のもの。定価五圓五十錢。荷造費五十錢。送料買。

▲**洗張り用伸子**  
綿縮用の、履上製の伸子です。縫ひぬいので、定評があります。丈夫で使ひよい。料内地十八錢、其他五十五錢。送料買。

▲**伸子張り用糊刷毛**  
伸子張り専用の、刷毛引き刷毛です。定価一圓六十錢。送料内地十二錢。其他四十五錢。

▲**洗張り用板刷毛**

▲**洗濯用ブラッシ**  
洗濯には、布地を損ねぬ、洗濯用ブラッシ、使用をおすすめします。定価木箱物内地十二錢、其の他四十五錢。送料二圓。

▲**マルセル石鹼**  
最も品質の良い、洗濯石鹼です。毛織物、毛織物、絹物の洗濯は、これでなくてはなりません。定価一圓三十五錢。送料内地十二錢、其他四十五錢。送料買。

▲**徳用粉石鹼**  
使用が簡便で、しかも品質の良い、經濟的粉石鹼です。定価一圓三十五錢。送料内地十二錢、其他四十五錢。送料買。

▲**ラックス石鹼**

▲**ホワイトローズ**  
木綿物の漂白剤として、定評のあるものです。定価一圓三十錢。送料三圓まで内地十二錢、其他四十五錢。送料買。

▲**洗青**  
絹毛用漂白剤で、至つて使用法の簡便なもの。定価一圓五十錢。送料三圓まで内地十二錢、其他四十五錢。送料買。

▲**洗青**  
白地木綿用の青味づけ染料で、袋入りになつてをります。定価一圓五十錢。送料三圓まで内地十二錢、其他四十五錢。送料買。

▲**バッグブルー**  
これも同じく、青味用の染料です。定価一圓五十錢。送料三圓まで内地十二錢、其他四十五錢。送料買。

## 品類と具器を要必に濯洗

▲**洗張り用艶糊**  
洗張りとして、特に發明せられた糊粉で、絹物、木綿物等、どの布地にも用ひられ、普通のお洗濯にも好適。定価一圓四十錢。送料内地十二錢、海外四十五錢。

▲**文化糊**  
木綿を麻にする不思議な糊で、煮る手数を要せず、水で溶けば、直ぐに糊がでます。定価一圓三十錢。送料十錢まで内地十二錢、其他四十五錢。

▲**カラ糊**  
價かの時間で、自宅でカラ糊の仕上がり全にできる重宝な糊。定価一圓三十錢。送料五錢。送料内地十二錢、其他四十五錢。

▲**コンスターチ**  
仕上げ用糊として重宝なもの。一箱定価二十五錢。送料内地十二錢、其他四十五錢。

▲**セラチン**  
絹毛物、または黒地物用の糊として、在来の布海苔と共に需要多きもの。定価一圓四十五錢。送料内地十二錢、其他四十五錢。

▲**メリノリン**

▲**ウオッシュ液**  
これは新發明の洗濯剤で、石鹼以上の効果を有し、布地を損ねず、即座に汚れが落ちます。特に絹毛用としておすすしめたい。定価一圓五十錢。送料内地十二錢、其他四十五錢。

▲**クリーニング液**  
襪の跡を簡単に簡単にクリーニング液が出来るので評判。一箱定価一圓二十錢。送料箱代共内地二十錢、其他五十三錢。

▲**揮発ブラッシ**  
揮発油を混ぜて充分に汚れを落とすことのできる、好評の汚洗脱きブラッシです。定価一圓一圓。送料内地十八錢、其他五十一錢。送料箱代共内地二十錢、其他五十三錢。

▲**晴雨文化物乾器**  
折疊式の物干器で、場所をとらず、晴天にも雨天にも、一時に多くの布が乾せる。新案の便利なもの。定価一圓三圓七十錢。送料内地二十四錢、其他六十五錢。

▲**洗濯曹達**  
洗濯に役立つ、洗濯曹達です。半キロ二百グラム。定価二十八錢。送料内地十八錢。

▲**洗濯用漂白粉**  
白地木綿の漂白に必要な、漂白粉です。定価一圓四十錢。送料三圓まで内地十二錢、其他四十五錢。

▲**ハイドロサルハイト**  
絹毛用の漂白剤であります。定価一圓四十錢。送料三圓まで内地十二錢、其他四十五錢。

▲**重炭酸曹達**  
半キロ價十五錢。送料内地十八錢、其他五十五錢。

▲**焼明礬**  
一斤價三十錢。送料内地十二錢、其他四十五錢。

▲**硼砂**  
一ポンド(四百五十五)價三十二錢。送料内地十八錢、其他五十五錢。

▲**蔞酸**  
一ポンド價三十錢。送料内地十八錢、其他五十五錢。

▲**酒石酸**  
一オンス價十五錢。送料内地十二錢、其他四十五錢。半キロ價一圓五十錢。送料内地十八錢、其他五十五錢。

品 類 と 具 器 を 要 必 に 濯 洗

- ▲サルチル酸  
半キロ價一圓六十錢。送料内地十八錢、  
其他五十五錢。二十五瓦價十六錢。送  
料内地十二錢、其他四十五錢。
- ▲單寧酸  
一オンス價二十五錢。送料内地十二錢、  
其他四十五錢。
- ▲醋酸  
半キロ價二十九錢。箱代十二錢。送料内  
地十八錢、其他五十五錢。
- ▲次亞硫酸曹達  
一ポンド價十八錢。送料内地十八錢、其  
其他五十五錢。
- ▲酸性亞硫酸曹達  
一ポンド價三十五錢。送料内地十八錢、  
其他五十五錢。
- ▲過滿俺酸加里  
一オンス價十一錢。送料内地十二錢、其  
其他四十五錢。半キロ價六十錢、送料内  
地十八錢、其他五十五錢。
- ▲アルコール  
二百五十瓦價六十錢。送料内地十二錢、  
其他四十五錢。半キロ價一圓、送料内  
地十八錢、其他五十五錢。共に箱代十  
二錢。
- ▲アンモニア水  
半キロ價二十八錢。箱代十二錢。送料内  
地十八錢、其他五十五錢。
- ▲リスリン(グリセリン)  
半キロ價九十錢。箱代十二錢。送料内地  
十八錢、其他五十五錢。
- ▲オレーフ油  
半キロ價九十錢。箱代十二錢。送料内地  
十八錢、其他五十五錢。
- ▲テレピン油  
半キロ價一圓十錢。箱代十二錢。送料内  
地十八錢、其他五十五錢。
- ▲亞麻仁油  
半キロ價九十錢。箱代十二錢。送料内地  
十八錢、其他五十五錢。
- ▲美也光油  
布の艶出し等に役立つ油です。定價一  
圓二十五錢。送料三場まで内地十二錢、其  
其他四十五錢。
- ▲白色ワセリン
- ▲樟腦  
半キロ價六十錢。送料内地十八錢、其  
其他五十五錢。
- ▲白蠟  
百瓦價四十五錢。送料内地十二錢、其  
其他四十五錢。
- ▲樟腦  
一オンス價二十五錢。送料内地十二錢、  
其他四十五錢。半キロ價二圓三十錢。  
送料内地十八錢、其他五十五錢。
- ▲ナフタリン  
半キロ價十七錢。送料内地十八錢、其  
其他四十五錢。
- ▲アンチインセクト  
毛織用の防蟲剤です。一壇定價一圓五十  
錢。箱代十錢。送料内地十八錢、送料五  
十五錢。
- ▲椿滓髪洗粉  
一袋定價十錢。六袋一箱定價五十錢。送  
料内地十二錢、其他四十五錢。

一時に多数の品を、御注文  
下さいますと、送料が大變  
お徳になります。

實で目へ安心であります。但しこの頃では郵便物の遅延しますので、普通郵便より四五E位に  
れて到着いたしますから、その點は難め御承知おきを願ひます。

(三) この頃は郵便物の不着や紛失等の事故が甚だ多いので、互に迷惑を蒙ることが少くありません。

それ、若しも主婦之友社(又は主婦之友社代理部)に御送金になつて、用當の時日が経つても御主

▲アルコール  
二百五十瓦價六十錢。送料内地十二錢、  
其他四十五錢。半キロ價一圓、送料内

▲白色ワセリン  
二十五錢。送料三城まで内地十二錢、其  
他四十五錢。

一時に多数の品を、御注文  
下さいますと、送料が大變  
お徳になります。

欄外注意事項に反するときは郵便局にて受付を断ることあるべし

票 查 監			
名 人 拂	※ 一金	加入者 氏名	口座 番 號
名 人 氏 ※	※ 一金	主 婦 之 友 社	東 京 一 八 〇 番
印附日廳管所座口		印附日局付受	
		受 付 番 號	

六ヶ月保存

數字は必ず楷書、文字は正確明瞭に書くこと

票 込 拂			
名 所 人 拂	※ 一金	加入者 氏名	口座 番 號
名 所 人 氏 ※	※ 一金	主 婦 之 友 社	東 京 一 八 〇 番
印附日廳管所座口		印附日局付受	

一年保存

各票金高に相違なきことを必ず確むること

票 知 通 込 拂			
名 所 人 拂	※ 一金	加入者 氏名	口座 番 號
名 所 人 氏 ※	※ 一金	主 婦 之 友 社	東 京 一 八 〇 番
印附日廳管所座口		印附日局付受	

金額を訂正せざることを

票	
拂込	人名
※	※
印附日廳管所座口	

六ヶ月保存

数字は必ず楷書、文字は正確明瞭に書くこと

拂込票	
口座	加入者氏名
東京一八〇番	主婦之友社
印附日局付受	
※ 一金	
拂込	住所氏名
※	※
印附日廳管所座口	

一年保存

各票金高に相違なきことを必ず確むること

拂込通知票	
口座	加入者氏名
東京一八〇番	主婦之友社
印附日局付受	
※ 一金	
拂込	住所氏名
※	※
印附日廳管所座口	

金額を訂正せざることを

受領票	
口座	加入者氏名
東京一八〇番	主婦之友社
印附日局付受	
※ 一金	

※印を附しある部は拂込人に於て記載すること

## 愛読者諸姉へお願い

△毎月缺かさず読むやうに豫約購読に願ひます。  
 △御近所の雑誌店に豫約購読の申込を願ひます。  
 △本社直接豫約購読申込も極く手軽に出来ます。

「主婦之友」を今後何うぞ引き續き御愛読のほどをお願い申します。それにつけ、皆様には御近所にも御依頼したいことは「主婦之友」の豫約購読の法を實行して頂きたいのでございませぬ。御近所に雑誌店のある方は、その雑誌店に「今後毎月「主婦之友」を讀むから、發行したらすぐ届けて欲しい」とお申込みになれば、大抵の雑誌店では毎月缺かさずお手許までお届けいたします。若し雑誌店に不便な方は、本社宛に半年分三圓半銭なり一年分六圓半銭なり、の雑誌代を添へてお申込みになれば、毎月發行早々に第一番に御郵送いたします。その御送金の際には、皆様から非常な御信用を博してをります。取扱品は本館の代理部案内廣告を御覽になれば詳細に發表してございませぬ。どうぞ御入用の品を取纏めてお注文下さいませ。御送金の場合には、雑誌代と一緒に纏めて御送りくださつてもよろしくございませぬ。

(御用向はこゝへ詳細に御記入下さい。お記しがないと間違ひが出来ます。)

姓	名	住	所
〒	番	番	番
主婦之友社			

▲此の用紙にて送金と通信とができます◎文字は明瞭にお書き下さい。

使おを紙用替振の此に金送御の外以件用の文註御誌雑  
 代の品の部理代に際の際の文註御誌雑は又、もてつなひ  
 んせまひまかもてつさたく金送御てしに籍一脚を金

## 主婦之友社 又は主婦之友社代理部へ 御送金くださる方は御覽ください

- (一) この用紙の表面と裏面とに必要な事柄を記し、お金を添へて郵便局へお持ちになれば、そのお金は御用向を書いた紙片と共に振替貯金課を経て主婦之友社(主婦之友社代理部に御送金の場合でも、主婦之友社宛に御送金くださつてよろしいのです)に届きますから、當方では早速御注文の雑誌なり書籍なり又はその他の品なりを、取り揃へてお送り申し上げます。
- (二) この用紙を用ひて御送金になれば、爲替を組んで書留郵便にして出すと同じやうに、途中で紛失するやうな心配なしに、確實に主婦之友社(又は主婦之友社代理部)に送金することが出来ます。若し途中で紛失するやうなことがあつても、後で調べて發見することが出来ますから、その點は大層重寶で且つ安心であります。但しこの頃は郵便物が延着しますので、普通の郵便より四五日間位おくれに到着いたしますから、その點は豫め御承知おきを願ひます。
- (三) この頃は郵便物の不着や紛失等の事故が甚だ多いので、互に迷惑を蒙ることが少くありません。

雑誌の代金、送料、手数料、印紙代、郵便代、その他、御送金の際には、御送金票に記して下さるようお願いいたします。

それで、若しも主婦之友社(又は主婦之友社代理部)に御送金になつて、相當の時日が経つても御注文の品が届かなかつたり、雑誌の發行日(大抵毎月十五日頃發行します)が来ても雑誌が届かなかつたりしたときは、御面倒ながら御地の郵便局をお調べのうへ、一應當方へ御照會くださいませ。さすれば

この代理部案内廣告を御覽になれば詳細に發表してございます。どうぞ御入用の品を取纏めてお言文く  
たさいませ。御送金の場合には、雑誌代と一緒に纏めて御送りくださつてもよろしくございませ。

(御用向はこゝへ詳細に御記入下さい。お記しがないと間違ひがございませ。)

主婦之友社	又は主婦之友社代理部へ
御送金くださる方は御覽ください	

▲此の用紙にて送金と通信とができます◎文字は明瞭にお書き下さい。

各票金高、貯蓄、...

## 主婦之友社 又は主婦之友社代理部へ 御送金くださる方は御覽ください

- (一) この用紙の表面と裏面とに必要な事柄を記し、お金を添へて郵便局へお持ちになれば、そのお金は御用向を書いた紙片と共に振替貯金課を経て主婦之友社(主婦之友社代理部に御送金の場合でも、主婦之友社宛に御送金くださつてよろしいのです)に届きますから、當方では早速御註文の雑誌なり書籍なり又はその他の品なりを、取り揃へてお送り申し上げます。
- (二) この用紙を用ひて御送金になれば、爲替を組んで書留郵便にして出すと同じやうに、途中で紛失するやうな心配なしに、確實に主婦之友社(又は主婦之友社代理部)に送金することができます。若し途中で紛失するやうなことがあつても、後で調べて発見することができますから、その點は大層重寶で且つ安心であります。但しこの頃では郵便物が延着しますので、普通の郵便より四五日間位おくらせて到着いたしますから、その點は豫め御承知おきを願ひます。
- (三) この頃は郵便物の不着や紛失等の事故が甚だ多いので、互に迷惑を蒙ることが少くありません。

それ、若しも主婦之友社(又は主婦之友社代理部)に御送金になつて、相當の時日が経つても御送金品が届かなかつたり、雑誌の發行日(大抵毎月十五日頃發行します)が来ても雑誌が届かなかつたりしたときは、御面倒ながら御地の郵便局をお調べのうへ、一應當方へ御照會くださいませ。さすれば事故等を調べるにも、一層都合がよろしくございませ。

御照會のときは郵便局へお拂込の月日、郵便局名、金額、品名等詳細に御知らせくださいませ。

東京一八〇番	郵便局名
金額	品名等詳細

主婦之友社代理部へ御送金くださる方は御覽ください



洗濯

▲サルチル酸  
 半キロ價一圓六十錢。送料内地十八錢、  
 其他五十五錢。二十五瓦價十六錢。送  
 料内地十二錢、其他四十五錢。  
 ▲單寧酸  
 一オンス價二十五錢。送料内地十二錢、  
 其他四十五錢。

▲アンモニア水  
 地十八錢、其他五十五錢。共に箱代十  
 二錢。  
 半キロ價二十八錢。箱代十二錢。送料内  
 地十八錢、其他五十五錢。  
 ▲リスリン(アリセリン)  
 半キロ價九十錢。箱代十二錢。送料内

半キロ價六十錢。送料内地十八錢、其  
 他五十五錢。  
 ▲白蠟  
 百瓦價四十五錢。送料内地十二錢、其  
 他四十五錢。  
 ▲樟腦

文品が届かなかつたり、雑誌の發行日(大抵毎月十五日頃發行します)が来ても雑誌が届かなかつた  
 りしたときは、御面倒ながら御地の郵便局をお調べのうへ、一應當方へ御照會くださいませ。さすれ  
 ば事故等を調べるにも、一層都合がよろしうございます。  
 御照會のときは郵便局へお拂込の月日、郵便局名、金額、品名等詳細に御知らせくださいませ。

東京	一八〇番
主	之
支	店
支	店
支	店

開代三意奉取... 御照會... 郵便局... 金額... 品名... 詳細に御知らせくださいませ。

終

